ショートショートの広場2

星新一★編

ショートショートの広場 2

星新一★編

ショートショートの広場 2

星新一★編

850円

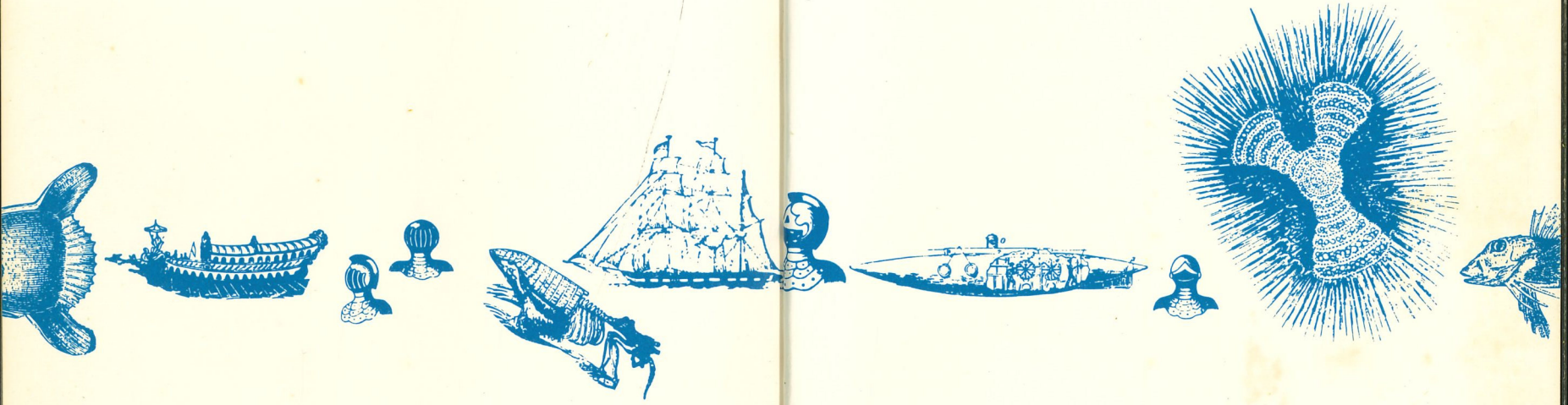
0093-168548-2253（0）

講談社

ショートショートの広場2

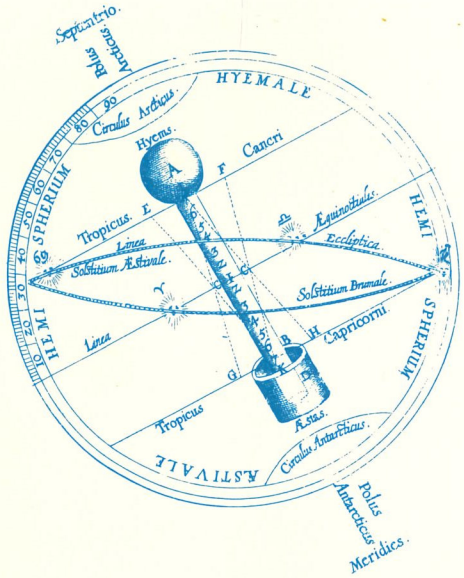
星新一★編

講談社



ショートショートの広場 2

星新一★編



講談社

まえがき

星　新一

前回の『ショートショートの広場』があまりに好評だったので、ひきつづいて昭和五十四年の十月末を締切りとして、講談社がショートショートの募集をおこなった。

今回は本にまとめるための募集で、収録作品には謝礼、優秀作にはそれより多い賞金という条件である。そう大きな広告もしなかったが、前回にまさる六千八百三十一編の作品が集まり、またも驚かされた。

そして、私は予選通過の三百七十二編を読み、ここに六十編をえらび、一冊にまとめたというわけである。前回より、収録作数もページ数もふえている。

読者はどういうのを好まれるだろう。私の目による優秀作は、あとがきでお教えします。

目次

まえがき　星新一　1
人魚の日　望月博之　9
雀　甲田陽子　14
自殺コントロールセンター　吉島弘治　18
タイムパラドックス未来騒動　村野高弘　23
階段　山本一広　26
高価な五百円札　竹内議一　31
おかあさん　宮内美砂子　40
傑作SF　保呂香　44
語学の才能　田村悦　49
花火　江坂遊　55
来訪者　久保田浩子　60
拡散　田次慶久　66
可愛い誤算　渡辺勝　68
不思議な服　滝田尚宏　73
逆さテレパス　松原弘樹　79
喜びも悲しみも幾年月　まさたか　86
美女マスク　小川有里　93
悪魔講　荒石人　97
念力　豊田糧　101
産声　新宅道子　102
赤いリボンの果て　稲田尚　110
二階のあいつ　守屋みえこ　113
不条理な夜にしどけなき猫　呉芳景　117
主役(ヒーロー)ダンチ論争　久保建樹　121
移り気な男　木村俊行　126
見知らぬあなた　石上信治　131
公園で……　森文夫　134
いまに分る　関谷碧　141
食料危機　成松良一　142
杉山昌善　149
頭の上に光る電球　山下成司　153
夕焼け　林承徳　157
未来へ行った順　池田信義　161
奥様は魔女　深里茉莉子　164
不可解な死　三谷志乃夫　167
黄金色の瓶詰　清水信之　170
特技　西谷慎一　176
パーティーにて　斎藤文彦　178
カーニバル　井口健郎　183
DOY(ドゥーイ)　早島悟　185
ロボテイジの進展　前田恭二　192
ある日突然　赤松秀昭　194
電話　田代武夫　201
茶の間にて　窪田京雅　204
嘘つき少女　高橋裕司　210
白い黄昏　大野隆之　217
傘　牧野浩子　220
あなた　釜田雅彦　224
なわばり　阿部龍一　231
羊を飼う日　M　235
逢魔ケ時　松林由美　239
ひも　宮下ふみ子　242
彼は死んで私はどうなる　平田暁　244
花のみち　山本唯　248
成就　小林聡幸　252
いたい　西秋生　255
追われる　蓑虫研介　261
殺人鬼　大月伸平　266
ある遺言　横関洋　268
死相　新屋健志　273
あとがき　星新一　274

ショートショートの広場2

装幀・司　修

人魚の日

望月博之

ぼくが彼女と暮らすようになってから、もう一年になる。彼女、ケイっていう名前だけど、実は人魚なんだ。去年の夏、伊豆まで、ポンコツのマイ・カーで、一人、ドライブとしゃれこんでいたとき、出会ってね。誰もいない海岸で水浴びをしている彼女を見たときは少々驚いたけど。最初、言葉なんかわからなかったけど、何かお互い気があって、その時から、ぼくらはいつもいっしょさ。

ケイは人魚だから、下半身は魚だけど、うろこの色は肌色だし、上半身はふつうの女の子とちっとも変わらないんだ。変わっているといえば、とびきり美人ってとこかな。バスタブの中で、膝をかかえて眠っているところは、ちっとも人魚にはみえないし、誰だって離したくなくなるよ。

そうそう、彼女はいつでも体がぬれてなくちゃいけないし、それに眠るときは、水中と決っているんだ。そんなわけで、ぼくはバスつきのアパートに、今までの三畳一間の安下宿からのりかえて今日に至っている。こんな町で、それもたいした郊外で、一ヵ月三万とは恐縮しちま

うけど、とにかく二人で暮らせると思えば、安いもんかな。ケイのきれいな髪や、美しい寝顔をみていれば、働きがいがあるってもんだけど。

人魚と暮らすっていうのは、そりゃあ大変なことだよ。とにかく、食費がかかるんだ。まず、いつでも新鮮な魚を用意しなくちゃいけない。それもたっぷりだから、中小企業従業員の一ヵ月の給料なんか、部屋代を払ったら何も残らないほどだ。それに、これが一番やっかいなことなんだけど、人目を気にしなくちゃいけないんだ。万が一、ぼくが人魚と同棲しているなんて大家さんに知れたら、それこそ一大事だろう。まず、この町じゃ暮らせないし、だいたいマスコミが放っておくもんか。ぼくとケイの関係だとか、ケイの出生についてだとか……ケイの人魚の国のことだって聞きだすに違いない。繊細な心のケイのことだから、海底の雪の話や、サンゴの林の話をするときの神秘的な彼女とは別人みたいになって、ひどく脅えて毎日を送るに決ってる。だいたい、そんなもんだろ、マスコミっていうのは。でも、こうして一年も、誰にも知られず、二人だけの暮らしができたのは、ぼくにしてみれば満点というところかな。

でも、今日はうっかりしていた。いつも会社へ出かけるときには、彼女がバスタブの中で眠っているのを確かめ、部屋にはしっかりと鍵をしていくんだけど、時間を気にして、部屋の鍵をするのを忘れて出てきちまったんだ。悪いことに、先月、車が故障したから、月給をそっちにまわして、家賃をためこんでいたしね。

それはぼくが仕事を終えて帰ってきたときさ。駐車場から二階の部屋へと階段を登ろうとしたら、顔をゆがめて腰をぬかしそうになった大家さんと、その奥さんが、口をパクパクさせて階段を降りてきたんだ。そのとき、ようやく自分の失策に気付いたよ。ぼくは、ぼくを見つけてますます恐怖している二人を押しのけて、二階へととびこんだ。案の定、ぼくの部屋のドアは開いたままになっている。しまった、見られちまった。とにかく彼女を、隠さなくちゃ。部屋代を取りにきた大家さんが、不用心なぼくの部屋に入りこみ、彼女を見つけたにちがいなかったから。

ぼくは、バスタブの中で気持ちよく眠っているケイを起こし、ぬれた毛布でくるんで、一目散に、廊下の反対側にある非常口からとび降りた。運良く、ポンコツ車には、いつもキーをつけたままにしてある。このときばかりは感謝して、はやる心でエンジンをかけ、全速力で町を出た。ケイと出会った伊豆の海岸までとはいかないけれど、近くの海岸までなら一時間で往復できる。それにしても、やっかいなことになったな。大家さんの奥さんまでいたのは、きっと彼女を確認するために連れてきたに違いないんだ。でも、他の部屋の人が誰もいなかったのは不幸中の幸いだったな、なんて取り留めもなく考えながら、それでも、その合間にケイに事情を話しながら、何とか海岸にたどりついた。

夕暮れの浜辺に車を寄せて、ぼくはケイにぼくの決心を話した。

「そういうわけさ。もう、これっきりにしようよ。君だって静かな生活のほうがいいだろう。ね、もう二度と海岸に近づいちゃだめだよ。約束してくれよ、絶対だよ」

そのとき、ぼくはもう、ケイとの再会はあきらめていたんだ。実際、もうぼくの部屋には、テレビ・ニュースの取材班やら、週刊誌の記者たちが、どっと押し寄せているのかもしれない。これからは、二人きりで会うなんて不可能だろうし、へたに町の人に知れるより、このまま会わないほうがどれほどいいだろう。

なんとかケイを説得して、すっかり暗くなった海に送り出し、ぼくは一刻もはやくアパートに戻ろうとあせった。相手は年寄り二人だから、何とかしらを切れば、むこうの錯覚で終るかもしれないな。とにかく、はやく部屋に戻って、何事もないふりをしているのが一番さ。ぼくはポンコツ車に、来たときよりもすさまじい音をたてさせてアパートを目差した。だいたい、人魚がこの世にいるもんか。だいたい、人魚がこの世にいるもんか。ぼく自身が人魚否定の立場に立たなくちゃいけないんだ。こうして呪文を唱えるようにして、自分に思い込ませなきゃ……。

ぼくの考えとは裏腹に、アパートはいつもよりひっそりとしているようだった。ぼくは駐車場に車をとめて、非常口からこっそりと二階へ上がろうとした。音をたてないようにそっとね。狭い階段の一段目を踏んだとき、いきなり肩をたたかれた。後ろを振り返ると、声をたてる間もなく、無数のフラッシュがぼくに浴びせられたんだ。肩に手をかけたままでいる男が、ぼくに言った。

「君がヒロシ君だね。今、どこに行ってたんだね」

そらきたぞ。ぼくはひるまずに言葉を投げ返そうとした。そのときには、建物の陰や、植え込みから大勢のカメラマンたちが現われ、テレビカメラまでぼくを覗いている始末さ。

「えっ。ぼくがどこへ行ってきたかって。フン。まさか、海の中のおとぎの国へ行ってきたとでもいうんじゃないでしょうね」

ぼくは一同を見まわしてやったんだ。男は急に騒ぎだした記者たちを制するとさらに続けて言ってきた。

「君は海へ行ってきたようだね。そうか、それじゃ、海へ死体を捨ててきたっていうわけか。申し遅れたが私は警察のものだ。詳しくは本署で聞こう。なにしろ、新聞の集金人、ガスの集金人、それからセールスマン二人が、それぞれに君の部屋で女の水死体を見たって通報してきたんだ。念のため、大家さんに確認してもらったわけだったんだが……。えっ、何、人魚だって？　ばかも休み休み言いたまえ。だいたい、この世に人魚なんかいるものか」

雀

甲田陽子

それは、シトシト雨の降る、肌寒い初冬の日曜日の事だった。日頃の仕事疲れも出たので、のんびりと居間のテラスぎわのソファに坐り、ぼんやり庭を眺めていた。小さいながら種々の木々を植え、こぢんまりした、落ち着いた庭にしてあるのだが、小雨にけぶって、それも又風情があった。しばらくの間そうやってボンヤリしていたのだが、雀がチチチといやに鳴くのに気がついた。たださえずっていると言うよりは、助けを求めて鳴いている風であった。あまりチチチとうるさいので、テラスから庭に出てみた。ケガでもした雀がどこかに居るのかもしれない。僕は、注意深く木々の間に目を走らせた。すると、いた、いた。小さな雀が雨にびっしょり濡れながら、草の間にうずくまっていたのだ。僕は思わずかわいそうになって、その雀を手に取り、居間へ持ち帰った。

コーヒーを運んで来た妻が、物珍らしげに見、「何ですの？」と言った。

「雀だよ、ケガしてるらしいんだ」

「まあ、かわいそうに」

二人で見てみると、足から血を出していた。妻が救急箱を持って来たので、薬をつけてやった後、柔らかな綿の上に寝かせてやった。

「元気になったら、又離してやろう」

「そうね。後で恩返しに来たりして……」

「雀の恩返しか、ハハハハ……」

「ホホホホ……」

二、三日の間エサを与えてやり、すっかり元気になった時外へ離してやった。雀は青空に向ってパーッとはばたいて行った。僕は、何か良い事をしたような気がして、満足気な気分だった。

それから一週間程たったある日の事、窓辺でチチチと雀の声がするので窓をあけると、紛れもなくあの助けてやった雀が、窓辺に止っていたのだ。僕はすっかり嬉しくなって、「お前じゃないか」と言っていた。妻を呼んで来て、二人して雀と対面した。雀は目をくるくるさせて私達を見、小鳥特有の、機敏なかわいい動作を繰り返した。

「まあ……、助けてやった事覚えていたんだワ、なんてかわいらしい」妻は、感激していた。すると、雀は、サーッと窓辺から庭に降りると、僕達の方を向いてしきりに鳴くのだった。不思議に思って庭に出て見ると、今度はチョンチョンと飛びながら、僕達を庭の隅に連れて行った。そして庭の隅のカエデの木の根本に立つと、口ばしで地面をつっつくのだった。僕達は顔

を見合せた。一体どういう意味なのだろう。ミミズでもほじくって欲しいのだろうか。雀は繰り返し繰り返し同じ動作をすると、僕達の方を見るのだった。それで僕は、小さなシャベルを持って来ると、そこを掘り始めてみた。すると雀は、納得したのか、どこかへサーッと飛び去って行ってしまった。変だと思いながらもどんどん掘ってみると、なんと、大昔の金銀の小判が出て来たではないか。三十センチ程掘って、全部で五十枚もの小判が……。大昔の小判はものすごく値打ちがあるのだ。それが五十枚も！

「あなた……」妻はオロオロしている。

「オイ、雀が本当に恩返ししてくれたんだよ。このせちがらい現代において」

「素晴らしいワ、夢のようだわ」

「本当に夢のような話だ」

僕達は、このお伽話しのような心暖まる出来事に、涙を流さんばかりに感激したのだった。その時、家の中で電話が鳴っているのに気がついた。僕は我に返り、はやる胸を押えながら電話に出た。

「こちら、国家国民調査機関の者ですが」と事務的な声は言った。

「ハア……」

「二〇五〇年度の国民の意識調査を行なっておるのでございますが、この程、貴方を含めました、ごく平均的常識的国民を選抜しまして、今の国民には、まだメルヘンやロマンス意識、やさしさといったものが残っているだろうか、という調査を行なわせて頂きました」

「ハア……」

「貴方様が、過日、助けた雀は、ごく精巧なロボットなのでありまして、先程貴方様が小判を見つけるまでの過程は、仕組まれたものでございます。御参考までに結果の内訳けを申しますと、雀が鳴いても無関心だった方、七十パーセント、うるさいとどなりつけた方、二十パーセント、そして貴方様のように、雀を助け、この様な過程をたどった方は七パーセント、その他三パーセントとなった次第であります。なお、小判五十枚のうち、隅の方にA－3とマークのついている一枚だけをお取りになり、銀行で現金とお替えになって下さい。それを謝礼とさせて頂きます。なお、残りの四十九枚は、後程係の者が引き取りにあがりますので、保存しておいて頂きたいと存じます。御協力ありがとうございました、失礼いたします」

電話が切れたとたん、僕の頭にはカーッと血がのぼって来た。

「なんて人をバカにしたやり方なんだろう！　こんなだから、今の世の中メルヘンも何もないのだ。今度雀が鳴いていたら、うるさい、とどなってやろう」

自殺コントロールセンター

吉島弘治

「私が今回あなたの自殺を担当いたしますネタルといいます」
白衣を着た男はそういった。
ここは自殺コントロールセンターの一室。自殺コントロールセンターとは、自殺による社会への影響を最小限におさえるという趣旨で設立されたものだ。
「そしてこちらの方があなたの相手の方で、ミルトさんとおっしゃいます」
と彼は私にミルトさんを紹介した。ミルトさんは私とネタル氏に握手を求め、よろしくと言った。
「ではそろそろまいりましょうか」
ネタル氏が私とミルトさんをうながした。私たちはその部屋を出て、長い廊下を歩いた。
「いやここもずいぶんかわりました。以前はせいぜい自殺志願者の勤務先へ連絡をとり、志願者のポストの後を継ぐ者を養成したり、扶養家族の収入を安定させたりする事ぐらいしかできなかった。そのころから自殺者の遺体の一部を臓器移植に使うという事は行なわれていました

が、しかしあれの発明はまさに決定的なものでした」
「人工転生装置の事ですね。私も名前だけは知っているのですが、どういう装置なのですか」
ミルトさんがネタル氏にたずねた。
「生まれかわりの話を聞いたことはありませんか。一度死んだ人間が生きかえった。家族は喜ぶ。しかし生きかえった当人は家族の事をだれだか知らないという。そして自分はまったく別な人間だと言った。というたぐいの話です。あれはある肉体に別な個体の霊魂がのりうつった事によるのです。人工転生装置というのは、これと同じで、人為的に、ある個体から霊魂を引き出し、その霊魂を別の肉体にのりうつらせるという、いわば生まれかわり装置なんです」
「しかし発明された時は、ずいぶん話題になりましたね」
私は当時のさわぎを思い出して言った。
「ある人間がまったく別な人間になれる装置ですからね。もし犯罪者が手にいれて、悪用したら大変な事になりますよ」
犯罪に利用されなくても、こんなものが普及して勝手に使われ出したら大混乱をまねくだろう。
「だから政府はすぐに、その構造を最高機密にしたわけですな」
「そうです。そしてまず最初はこの自殺コントロールセンターで利用しようということになったのです」

「一方に私のように、死を望んでいるのに健康な体をもっている者がいる。もう一方にはミルトさんのように、生きる事を望んでいるのに不治の病を背負っている人がいる。そこで転生装置を使って自殺を願う者には死を、そして残った健康な体を、それをもとめている人に与える。こういう事ですな」

私はネタル氏に同意を求めたがなぜか彼は言葉を濁した。

私たちは転生室と書かれたドアを開けて部屋の中に入った。そこにはごたごたと機械がとりつけてあるベッドが二台あった。ネタル氏はそれぞれのベッドに私たちをねかせた。

「では始めます。すぐに終わりますから」

どうやら私たちはただ寝ころんでいればいいらしい。これはすばらしい装置だ。

カチッとスイッチのはいる音がきこえ、ベッドについている機械が虫の羽音のようなうなり声をあげ始めた。

これで私は死んでいくのだろう。そして私の体はミルトさんの体になって生き続けるに違いない。私は目を閉じた。エレベーターが下降する時に受けるような奇妙な感覚が私をおおい、意識が遠のいていった。

気がつくとネタル氏が私とそっくりな男となにやら話をしている。一瞬おどろいたが、すぐ気がついた。あれは私の体を受けとったミルトさんだ。だがなぜ死んでいるはずの私がミルトさんの体にのりうつって生きているのだろう。

「おかげで私は助かりました。本当にありがとうございます」

ミルトさんがネタル氏に頭を下げていた。

「新しい体は最初は不自然に感じる事もあるでしょうが、なに、すぐに慣れますよ。それからこれがあなたの元の体の体格や顔形のデータです。これを整形外科へもっていけば、かなり元に近いものになるはずです。お元気でおすごしください。さようなら」

ミルトさんはネタル氏から元の体のデータをもらい部屋から出ていった。それを見届けてから私はネタル氏に聞いた。

「いったいどういうことです」

ネタル氏がふりむいた。私は言葉を続けた。

「本来なら私はあのまま二度とこのように生きかえることなく霊魂は霊界にいっていたはずでしょう」

ネタル氏は私をなだめながらいった。

「実はあなたにお願いがあるのです。ミルトさんのかかっていた病気は不治の病で、患者数も多い。私たちとしましては、なんとかしてこの病気の治療法を見付けたいのです」

「そりゃあそうでしょう。でも私は死にたいんだ。私を生きかえらせた事と病気の治療法をさがす事とはなんの関係もないじゃないですか」

「いやそれがあるのです。普通の患者の場合死に対する恐怖から自己暗示にかかり正確な症状

を伝えられない事もあります。しかし死を希望している人なら冷静に症状を伝達できるでしょう。それにどういう副作用があるかわからない薬を使う事もできます」
「だから私にこの体で生き続けろというのですか。私はいやだ。別な人にしてください」
「ほかの人では困るのです。というのはあなたほどこの仕事に対してすぐれた才能をもった人はいないのです」
「そんな事は関係ない」そういってふとポケットをさぐると小さなナイフが入っている。私はそのナイフをとりだしていった。
「そっちが私を殺してくれないのなら、私はこのナイフを心臓につきさして死にますよ」
しかしネタル氏は冷たくいった。
「あなたが死のうとなさろうとそれはあなたの自由です。ただ私たちは転生装置を使ってあなたの霊魂をこの体と同じ病気の患者にのりうつらせるだけですよ」
そんなばかな。しかし私が死んでも、すぐに転生装置を作動させれば、たしかに私の霊魂はひきもどされてしまう。ということは、このいやな世の中を私はまだ生き続けなければならないのか。
がっかりしている私にネタル氏は言った。
「胸にナイフをつきさすなどという事はおやめなさい。衝動的な自殺ほど無意味で愚かな事はないのですよ」

タイムパラドックス未来騒動

村野高弘

親友の広瀬がタイムマシンを作ったというので、早速出掛けてみた。
機械は、もっともらしい形をしていて、二人乗れるようになっている。
「手塚も一緒に実験を手伝ってくれると思って二人乗りにしたんだぞ。君も新薬を開発する化学者なら未来を知っておくのも悪くはないだろう」
やれやれ、とんだことになってしまった。
「ところで広瀬、未来と過去のどっちへ行くつもりなんだ」
「実はそれが問題なんだ。おまえ、『親殺しのパラドックス』を知ってるか」
「ああ、聞いたことはある。自分が生まれる前の過去へ行き、親を殺したら自分はどうなるかだろ」
「その通りだ。そこで俺がそれをやろうかと思ったが、やはりやめることにした。自分が消えてしまったらかなわんからな。そのかわり、子孫殺しをしてみようと思ってる」
「子孫殺し？」

「そうだ。まず百年くらい未来に行き、俺の子孫をみつける。そして五十年ほど戻って、その子孫が生まれる前に親を殺す。つまり、親殺しのパラドックスを未来で実験してみるんだ」

私と広瀬はタイムマシンに乗り込み、百年後の未来に飛んだ。想像もできないような都市に着いた。

我々は苦労しながらも、広瀬の子孫を捜しだした。

「見ろ。おまえの子孫だけあって瓜二つだな」

「うん。よく似てるな」

広瀬は照れ笑いをしながら言った。

「よし、百年後の子孫は確認した。さあ、今度はあいつの親を殺しに少し戻ろう」

再びタイムマシンに乗って、約五十年ほど、戻った。

また、広瀬にそっくりの子孫がいた。

「おまえの孫くらいかな」

「そうかもしれん」

真っ昼間に殺人をするわけにもいかないので、夜になるのを待ち、チャンスをうかがった。

そして深夜、広瀬は持ってきたピストルで彼の子孫を撃ち殺した。

「広瀬、ついにやったな」

返事はなかった。いや、それどころか広瀬がいなかった。瞬間に消えてしまったのだ。

私は恐々と、広瀬が今、撃ち殺した死体に近寄った。それはなんと、彼の子孫ではなく、広瀬自身に間違いなかった。

広瀬は広瀬自身を撃ち殺してしまったのだ。

私の頭は、極度に混乱してきた。

そのとき、足下にあった新聞に目がいった。

〃不老薬完成五十周年記念。発明者手塚博士語る。……〃

その新聞に出ている写真は、まぎれもなく、私だった。

階段

山本一広

白い大理石の手摺りに左手を軽く添えて、踊り場を小さく廻り、次の階段を下りようとして、一瞬、男はあっ、と息を飲んだ。無い！　階段が無いのだ。黒々と、口を大きく開けて、深い奈落が彼を待ちうけていた。思わず目眩を覚えたが、辛うじて、手摺りにあった手に力が込められて、男は後退ることができた。そして、ふうっと、安堵の息を深く吐いた。

週日の、それも正午前のデパート。大方の客はエレベーターなりエスカレーターを利用するから、男が七階から下りて来た階段は、その時刻、何か人に忘れられたような存在だった。下方、家具売り場には、女店員がここかしこカウンターを前にして立っているのが、彼の所から見えた。彼は気を取りなおした。

――一時の幻覚だ。一時的にせよ目だけが俺を裏切ったのだ。階段が消えてなくなるなどということが、一体全体、あってたまるものか――

彼は視線をば、自分の立っている床の面と水平に保ち、手を手摺りに添えながら、こわごわ、それでも、右足をそっと前方に差出して階段のありかを探ってみた。が、彼の足は何ものにも触れず空しく宙をまさぐるばかりだ。彼は、再び、今度は前にも増して爪先に力をこめつつ探ってみた。が、しかし、やはり結果は同じだった。目の錯覚ではなかった。わが身の一部でもってしても、階段を見出せなかった。忽然として、それは消えていた。男は狂ったように、踊り場の床の端から端まで様々な地点から、虚しく足をさし伸べた。

何げない視線を階段の方へ向けた、ひとりの女店員の口から小さな叫び声が聞かれた。階段の踊り場のところで、中年とおぼしき一人の男が奇妙な動作を繰返しているのだ。そろそろと前方に片足を突き出しては、その都度、引っこめている。その有様をこちらから見ていると、まるで、足でもって空気か何ぞを掻きまわしているように見てとれる。女店員は他の同僚に言わずにはおられなかった。

「変よ！」

制服の肘のところをいきなり強く引っぱられたので、その同僚は、瞬間、眉をしかめて嫌な顔をしてみせた。

「何？」

「ほら、あそこ、階段のところを見て！」

同僚も目を瞠った。なるほど不思議な見ものだ。

「何してるんでしょう、あんなところで」

「気狂いよ、きっと」
「そうね、——たぶん、気狂いよね」
それはちょっとした騒ぎになった。男子店員の何人かが階段の下に来て男を見上げた。年嵩のひとりが声をかけた。
「どうしたのですか？」
その声でもって彼にかかっていた呪術がとけたかのように、男ははっとなって、先ほどからの動作を止めた。男は照れたような、それでいて泣き出しそうな表情を作って、彼の方を見上げている人々の顔を眺めやった。自分が惹起した騒ぎにひどく困惑したらしく、しばらくは無言のままでいた。
「どうしたのです?!」
先ほどの店員が、もう一度、訊ねた。男が黙ったままなので少し苛立ったのか、声の調子が高くなった。
「階段が無い、階段が見えないんだ」
「えっ?!」
人々は呆気にとられた。思いもよらない答だ。誰の目にも、階段は存在する。それを——
「なんですって、階段がどうしたって?!」
「消えてなくなっているんだ」

皆はすぐ隣のものと顔を見合せた。いよいよ狂人か。それにしては、そうと断定しかねるものが、男の表情には見てとれるのだ。
ひとりの若い男子店員が、そっと片足を階段のステップに乗せてみた。そして、男の言葉の真疑を確めるように、靴裏でもってステップを軽く撫でさすった。それを見ながら、年長の店員が叫ぶように言った。
「ほら、あるでしょう、階段は」
男は訝かしげに若い店員の足の動きを見つめていた。そして、それからもう一度、思いなおしたように足を宙に踏みだした。が、しかし、慌てて足をひっこめた。何の応えも足に感じなかったかのような仕ぐさだった。
「しようがないな、ほっておこうか」
「そうですね、好きにさせとけば……」
「ひょっとしたら、こっちを揶かっているんじゃないですか」
「まさか?!」
からかわれているのではないか、という言葉に年長の店員は改めて男の顔をまじまじと見つめた。男の表情には思い惑った様子しか見てとれない。意を決して、その年長の店員はとんとんと階段を昇って、その男のすぐ真下に立った。そして、憐れむような、蔑すむような目つきをしてみせながら、男に言った。

「ほれ、このとおり階段はちゃんと在るでしょう、無けりゃ、私は立って――」
そこまで言ったとき、店員の顔の上を驚愕の色がさっと走って、彼は仰天の目を瞠った。と、見るまに、その身体は、踏板を外された首吊人のように、ストンと男の眼前からかき消えた。
「アア――――」
店員の悲鳴が奈落の底に消えてゆく、その siga を人は皆、聞いた。身じろぎするものさえ無かった。恐しい悲鳴が消えてまもなく、くだんの男の眼の前に、再び、階段がその形を現した。おずおずと、男は階段を下り始めた。

高価な五百円札

竹内議一

夏も終りに近いというのに今年は蒸し暑さがいつまでも尾をひいている。無意識のうちに遠回りをしても日陰道を歩いている。ここ副都心では、車が優先のため日陰道を歩こうとすると陸橋をこえるか、信号を待たねばならない。
(この橋もだいぶ古くなったな。早くなおしてくれないといつか事故がおきるだろうね。えーと大津の電話番号はと……。ア！　シマッタ)
男の手から五百円札が一枚舞い落ちた。と、その時三十五、六の男がす早くそれを拾った。
「オイ！　何すんだ。それはオレの金だぞ」
「あなたの名前は？」
「オレ？　オレは新井だけどそんな事関係ないだろう。早くその金を返してくれ」
「いや返すべきではないでしょう」
「ナ、ナニ！」
「残念ですがあなたに渡す訳にはいきません」

「ナ、ナゼ返せないのだ」
「それはこのお金が私のお金だからです」
陸橋の上で、新井と名乗る男と三十五、六の男が何やら言い合いをしているのを関心も無さそうに人々が通り過ぎて行った。
「何を言ってるんだ。その金はオレが今、友人の電話番号を調べようとした時落としたものだ」新井という男はさも意外という顔をかくしきれずに言った。
「このお金があなたのだという証拠はありますか？」三十五、六の男はうれしそうに言った。
「証拠？　そんなもの……いやある！」
「ほう、何ですか」
「確か裏側に数式が落書きしてあるはずだ」
「残念ですが、その事はこのお金が私のものに相違ないということに他なりません」
「何を訳のわからない事を言ってるんだ。早く裏をみて納得したら返してくれ」
「だから今言った通りその数式というのは私が書いたものですよ」
「何をばかな！」
新井と名乗る男は上衣のポケットからタオルのハンカチを取り出し、首筋の汗を拭った。
「ほかに何かあなたのであるという証拠がありますか。ア！　何をしますか」バシッ！「暴力はいけません。暴力は」

「イテテ。分かった分かった。離してくれ」
新井と名乗る男は腕力で奪い返そうとしたが、逆に腕をねじあげられてしまった。
（此奴体つきの割に力のある奴だ。オーイテ）
「さて続きですが証拠は他にありませんか」
「オマエ、オレがその金を落としたところをほんとうに見てなかったのか」
「ははは、そんな初期の誘導尋問にはひっかかりませんよ」
（こんな気違いにこれ以上関わりあうのはよそう……）
新井と名乗る男は諦めきった様子で言った。
「分かった分かった。その金は君のだよ。オレはもう帰る」顔中が汗の玉でいっぱいであった。
「それは困ります。まだお帰り願う訳にはいきません」
「なぜだ！　それはオマエのものだと決着がついたじゃないか」
「いや、あなたは完全に納得してはいないからです」三十五、六の男は持っていたカバンの中から帽子を取り出し頭にのせた。太陽は陸橋の上の二人に容赦なく照りつける。
「それじゃオレはどうすりゃいいんだ」
「私のものかあなたのものか真実を二人で探すのです」
「それじゃこうしよう。その金をオレに渡してくれ。それで今度はオマエが証明しろ」

「結構ですね。あなたが少し落ち着かれたので私は嬉しいです。それではよろしいですか」三十五、六の男はニコニコしながら言った。「まず第一にそれは五百円札であります。第二に表の右側に岩倉具視という人の絵があります。そして第三に裏側には確か富士山が……」

「キ、キサマ！　オ、オレを馬鹿にする気か！」

「まあまあ、落ち着いてください」

「ウルサイ！　オレは用がある。帰る！」だが、次の瞬間、新井と名乗る男の腕は強くつかまれてしまった。「イテテ。離せ！　バカ」

「だめです。さっき約束したでしょう。まだ終わってません」

「そ、それじゃ言うがな、オマエが今言ったことは何の証拠にもならないぞ」

「でもあなたの証拠よりはましです」

三十五、六の男はカバンの中から罐入りジュースを取り出し、一口で飲み干した。新井と名乗る男はジッとジュースの罐が口の方へ傾いていくのを生唾をのみながら見ていたが突然、

「ア！　思い出したぞ」

「そうですか。それは良かった。で、それは何ですか」

「ウルサイ。もうオマエに騙されないぞ」

新井と名乗る男は、暑さのせいか昂奮のためか眼は異常にギラギラと輝き、シャツは汗でビッショリである。

「これは他の人に聞いてもらい証人になってもらう」

「それは得策ではないですね」

「なぜだ！」

「いいですか。考えてみてください」と、三十五、六の男は言った。「まず女性の方を選ぶのは公平ではありません。なぜなら私はあまり自慢できる顔をしてないし、スタイルもあなた程よくありません。又、年齢的にいってもあなたの方が母性本能を動かし易いのですから。そして子供ではこの手の公証人としては不適当です。又、記憶力、感覚器官の衰えている老人では無理でしょう」

「だから男で成人であればいいのだろう」

「そうですが今日は日曜日であまり人通りがありませんよ。でもあなたがそれでもと言うなら私の方は待ちますけど」

と言って三十五、六の男はカバンの中から携帯用の椅子を出し、そこに坐った。そして扇子を出して動かし始めた。新井と名乗る男はいっそう眼をギラギラさせ、暑さのためか顔全体が青白くなった。

「ク、ク、それじゃ立て」

「立って何処に行くつもりですか」

「いいか、よく聞け。オレは昨日この金を『クレッチメル』という喫茶店で釣りとしてもらっ

たんだ」
「ほう。して証拠は？」
「こ、これ……」と言いながら新井と名乗る男はしゃがみこんでしまった。
「どうしました。顔色が良くないが大丈夫ですか」
「ウルサイ！　これを見ろ、ここの透かしの部分だ」
「僅かにシミの様なものがありますが」
「そうだ。そ、それは昨日釣りを渡された時、女の指がレジを取り変え……いやレジが女を……ク、クソ！　暑いじゃないか。何でオレが暑いんだ。よく聞いてろバカ。レジのレシート用紙をだな、取り替えたんだ、女が。そ、その時にだな、指にインクが付いたんだ、女の」
新井と名乗る男はそこまで言うと、ベッタリ陸橋の上に坐りこんでしまった。そして、右手に持ったタオルのハンカチで口の外にはみ出た唾液を拭きとると、ワイシャツのボタンを上から一つ二つ外し始めた。
「なるほどなるほど分かりました。それでその喫茶店に行こうという訳ですか」
「……」
「しかし毎日何十人というお客にお釣りを渡しているのですから覚えているかどうか疑問ですね。ましてその女性、自分の指の汚れでお釣り銭にシミをつけたことなど、記憶にないでしょう」

「……」
「どうしました？」
「……とにかく行ってみてくれよ……」
「申し訳ありませんが実はそのシミは、私が裏側に数式を書く時につけてしまったものなのです。こんな事を言うと、あなたはガッカリなさると思いましておひきとめしようとしたんですが」そこまで言うと三十五、六の男は、又カバンの中からさっきと同じ罐入りジュースを取り出して飲み始めた。
「頼む、そのジュースをオレに売ってくれ」
「いやあ困りましたね」
「なぜだ、なぜ困るんだ」
「いや、もう無いんですよ」
「い、今飲んでいるやつでもかまわん」
「ア、スイマセン。コレもうカラになっちゃいました」
「……！」
「ところで本題にもどしますが、他に何かご記憶の点はありませんか」
「……ナイヨ。いや……わるかった。それは私の金ではない。いろいろごまかそうとしたが君にはごまかしきれなかった。その金は、確かに君のものだ……」

「又、又そのような弱気な事をおっしゃる。いいですか、このお金は私のだという証拠もないのですよ。ただ分かっている事は二人のうちのどちらかのものであるという事です」
「だ、だから君の……。数式だって君が書いたんだろ。コ、コイツ」
「ところがこの数字ですが、私の筆跡と少し違っているんですよ。ホラ！　ここのところ、2という数字ですが私はいつもaとまるめるのです。が、これは2と直線になっていますね」
三十五、六の男がそこまで言うと、新井と名乗る男は突然立ち上って陸橋の上から生理的欲求を満たした。「オイ！　見ろ！　今日は雨だ！」
「ど、どうしました。私の話を聞いていたのですか」
「バカ、帽子を捨てろ！　危ないじゃないか」
「な、何ですって？　よくおっしゃってる意味が分かりませんが、どうかしたんですか」
「……△×…！？△□××△…？！」
「先を続けますがよろしいですね。一つ二つ私に提案が有るのですが」
「×□×△！□！」
「どうでしょうか。このお札の汚れ具合、折り目、シワ、製造番号などから私たち二人の環境に対して確率的に……」
新井と名乗る男は、強く昂奮して腕をふり上げ同調したかと思うとひどく悲しそうにうなだれて聞き入っている。

そして三十五、六の男はしゃべり続ける。
「ですから我々二人の性格的な問題から推察しても……」
「！！！……？…□！！×…△△×！」
陸橋にもようやく日が陰りはじめた。

おかあさん

宮内美砂子

ぼくはおかあさんが大好きです。ぼくが五つの時にパパが連れてきてくれたんだ。本当のママは今はいません。ぼくはひとりっ子だし、パパは病院のお仕事が忙しくてたまにしか遊んでくれないし、とってもさみしかったの、だからおかあさんが来てくれて本当にぼくうれしかったです。

ママは病気だったし外で遊んだことなんかなかったけど、おかあさんとはね、かけっこだって何だって一緒に遊んじゃう。お昼寝にはそいねしてくれるの。だからお使いにだってついていくんだ。ぼくの方がにもつたくさん持てるしさ。

近所のアッちゃんもおかあさんと一緒だといじわるしない。ぼくよその子にいつも泣かされてばかりだからパパはいつも言うんだ。「やられたらやりかえすもんだ。男の子なんだから」って。でも今は、おかあさんがかたきをとってくれるし、ぼくもだんだん勇気がでてきたみたいです。もういじめっ子だってへっちゃらだ。

おかあさんの胸はあったかいの、ほわほわしてるよ。お風呂では背中洗ってあげたりするとすごく喜んでくれるし、ぼく、そんなおかあさんの顔みてるとうれしくて。もう、最高のおかあさん！

ぼくは春から小学校一年生になりました。大好きなおかあさんと離れたくないので一緒に学校へいこうよとだだをこねて首にしがみついてたらパパが来た。「こらっ！　また甘えてるな。おかあさんはパパが連れて来たんだからな。ひとり占めはずるいぞ」

なんだ、パパのやきもちやき！　いじわる！

この間はね、学校で「おかあさん」という題の作文がでたのでぼくせいいっぱいほめて書いてやりました。先生は最初へんな顔したけどすぐ頭をなでてくれました。「すてきなおかあさんらしいね。今度、先生も逢ってみたいなあ、いつまでも仲良くするんだよ」

あのね、おかあさんをキライな人もいるみたいです。病院の廊下をおかあさんと歩いていると待合室のおとなたちが、いやーな目をしてぼくたちをみるもの。

「いやねえ、奥さんがいた時はこんなことなかったのに……」「ふけつよね。気にならないのかしら、男ってこれだから……」

ぼくたちに聞こえるようにいやがらせ言うんだ。ちぇっ、おとなってやだな。うるさくてさ。パパにみてもらいに来てるくせに……いいつけてやるから。

大変なことがおきました。おかあさんがお使いの途中、車にはねられてしまったんです。パパは内科で手当ができないから、よその病院へ運ばれたんです。ぼくいのったよ。どうか神

様、お願い！　おかあさんを助けて！

夜になりました。手術室から出て来たパパはすわりこみ、黙ってぼくの目をみつめるとただ、首をふっただけでした。ああ、だめだったんだ。おかあさん、あのやさしかったおかあさんが死んでしまったなんて……。

ぼくは悲しくて悲しくて一晩中、泣きあかしました。おかあさんをはねた奴がにくい。にくくてにくくてたまらない。ぼくは心の中でふくしゅうをちかいました。そいつはぼくと同じクラスの黒田ミツル君のお父さんなのでよく知っています。家も近いし、遊びに行ったこともあるんですから。

ぼくはちょうざい室に忍びこみました。どれが毒薬かは、前にびんをいじっていて、かんご婦さんにひどくしかられたのでよく覚えています。中身を少しだけ取っておきました。

次の日、ぼくはミツル君ちの台所へ入ってそっと毒薬をポットの中にいれて逃げてきました。

新聞を広げてパパたちがしんこくそうに話しています。パパのつぶやきが聞えました。「ミツル君もかわいそうになあ……。両親がいなくなって……」

ぼくは心の中でさけびました。（おかあさん、ぼくやったよ！　おかあさんのかたきをとったんだ！）

「ねえ、パパ、悪いことされたら仕返ししてもいいんだよね」

「ああ、そうだ。なぐられたらなぐり返せ、これがパパのモットーだ。男は弱虫じゃあいかんぞ」

パパはにっこり言ってくれました。あーよかった。パパも賛成してくれたよ。本当いうとね、ちょっとぼくこわかったんだ。でもさ、ミツル君のお父さんは、おかあさんを殺したちょうほん人だろ。ミツル君もおかあさんがいなくなったらちょっとは悲しいだろうけど、ぼくとあいこだもん。うらみっこなしさ。

ぼくはやっと明るい気持ちになりました。それにねえ、今日はママもサナトリウムから帰ってきてるんだ。

ぼくはパパの肩にもたれ甘えた声で頼みました。「ねえ、ねえ、パパ、いいでしょう？　またかってほしいんだけどな」

となりでママがちょっと困ったように言いました。

「それはいいけれど、今度のシェパードには違う名前をつけなきゃあ、ママいやよ」

傑作SF

保呂　香

頭上をプテラノドンそっくりの翼手竜が飛びすぎていった。その巨大な翼から生じるすさまじい風の煽りをくらって、弁西博士が地面に叩きつけられた。私はあわてて博士を助け起した。

「だいじょうぶですか！」

「いやはや、ここにおっては、命がいくつあっても足らんわい」

私と博士は、きのう、ここファンタジー星に着いたばかりであった。ファンタジー星はその名の示す通り、ありとあらゆる奇々怪々な出来事が、それこそ一分きざみにもち上がるのであった。弁西博士は前々からこの星に興味をいだいておられたので、最近アンドロメダでの科学会議に行ったついでに、帰途にこの惑星に立ち寄ったのであった。

ファンタジー星は、聞きしにまさる奇怪千万な所であった。私たちがここに到着したときにも、えたいのしれない無数の円盤が襲来し、H・G・ウエルズの古典小説よろしくあわや宇宙戦争勃発かと思わせる事態が発生したが、申しあわせたように円盤の搭乗員全員がこの星の黴菌によってばたばたと倒れ、一瞬のうちに全滅してしまったのであった。

「まさに小説の踏襲じゃな」

本当に弁西博士のいう通りだった。そんなことがあってからいまに到るまで次から次へと矢継ぎばやに、わが地球のＳＦ小説に書かれてあるような出来事が、実際に起ったのである。

私たちは昼食をとりに、市の中央にあるレストランに入って行った。店内は人々でごったがえしていた。博士と私はすみのテーブルに着いた。奥から全裸の女がやって来て、注文をきいた。注文をきき終ると女は身をくねくねとうごかしたと思うと突然全身に亀裂が生じ、あっという間もなく、ぼろぼろとまるで壁土のように、床にくずれ落ちてしまった。いまは土埃と化した女の残骸の上を、注文を記入したメモ用紙がひらひらと飛んで、奥へ入って行った。

「はやく慣れんことにはめんくらうな」

博士は額をハンカチで拭った。

「ここの人たちは、平気なんでしょうかね？」

「だろうな」博士はぐるりと店内を見まわした。「みんな、平然として食っておる」

いっときして、私たちのテーブルの前に、突然降ってわいたように男が現れ、注文の料理をテーブルに並べた。料理はうまかった。博士も私もがつがつと食べて、あっという間にたいらげてしまった。

「ちょっとものたらんな」

いったとたんに空の皿の上に、いま食べたばかりの料理が、山盛りに出現した。
二人が満足してレストランを出ると往来には、植物がかっ歩し、岩がのそのそと動いていた。
前方から、きちんとした身なりの男がちかづいてきて、弁西博士の手をにぎりしめた。
「ようこそ地球のおかた。よくわがファンタジー星へいらっしゃいました」
男は私とも握手をした。私は、ここにきてはじめてまともな人間と出くわしたと思って、ほっと胸をなでた。
「じつは私――」男はいった。「この国公認の悪魔でして。よそからおいでくださった人の魂を抜き取ることを仕事にしておる者なんですよ」
男がいい終るか終らないかのうちに博士も私も、一目散に逃げ出していた。二人は巨大なビルとビルの間に逃げ込んでから、ようやく一息ついた。
「こんな星からは早く退散したほうがよさそうじゃな」
博士の意見に私も飛びついた。二人が路地から出ようとするといきなり足もとから、ごぼごぼと赤いねっとりとした水がわき出してきた。
「なんじゃ、これは！」
もたもたしている私たちの頭上から、とてつもなく大きなセロリと、電柱ほどもあるソーセージが降って来た。それで私は赤い水の正体をしった。それはトマトケチャップだった。すると両脇のビルディングは……？　そいつは両方からじりじりと迫って来た。ああ！　巨大なパンであった。
二人は悲鳴をあげながら、セロリとソーセージの下をかいくぐって、つっ走った。私たちが死にものぐるいで表に飛びだしたときには、すぐうしろで、想像を絶するほど大きいサンドイッチが完成していた。数秒後にそれはひょいともち上がった。私たちは再び駆け出した、うしろを見ないようにして。誰が一体あのサンドイッチを食べるやつなど見たいものか！
宇宙船に飛び乗った私たちは、一時の猶予ももたずに飛び上がった。
「もうまっぴらじゃ、こんな星は」
ファンタジー星が卵大ぐらいに見えるようになってから、弁西博士がいった。
「一時はどうなることかと思いましたね」私は博士に熱いコーヒーをわたした。
「まったく、まったく」
うまそうにコーヒーを飲みながら博士は、ポケットから一冊の本を取り出した。
「ファンタジー星のSF雑誌じゃよ。着いた日に買っておいたんじゃ」
本の表紙には、傑作SFと銘打ってある。
「あんな星のSFじゃから、さぞかし凄いじゃろうな……」と博士は本のページを、ぺらぺらとめくりはじめた。
しばらくページに目を通していた博士は、あきれたといって私に本をなげて寄こした。

私は本をひらき、最初の一ページを読んだ。

そこにはこう書かれていた。

——朝七時に、庭で鳴く小鳥のさえずりで目を覚ました私は、顔を洗い、食事をとった。九時に出勤した私は、淡々と仕事をし、五時に会社を終えた。家に帰った私は、家族にかこまれて一家団欒（だんらん）の夕食をし、十時に静かに床についた。今日も一日、何事もなく、平和にすぎてゆく……

語学の才能

田村悦

アメリカに来て未だ三ヵ月しか経ってないのに、言葉に全く不自由を感じない。日本で何年勉強しても一言も話せなかった英語が、今では不思議な程上手になった。やはり言葉はそれが話されている国に行かないといけない。否、若しかしたら、語学の才能が有るのかも知れない。まさか、そんな馬鹿な。一かけらの才能でも有ったら、アメリカなんかに来なくとも英語が話せるようになったろう。

そんな事を考えている暇があったら、他に考えねばならない事がある。これからの生活の事だ。今までは何とか生活できたが、問題はこれからだ。何かやらなければならない。英語が出来るようになったのだから、アメリカ人の中に入って働けないこともないが、それなら特に人より優れている訳でなし、日本へ帰ったって同じだ。

その時、彼はふと気が付いた。今までこうして思った事を総て英語で考えている。日本語の入る余地が全く無くなっている。英語はどうやら本物になったらしい。たった三ヵ月で本物になった。これは凄い事だ。若しや、どんな言葉も三ヵ月で出来るようになるのかも知れない。

その国にさえ行けば良いんだ。これは特技だ、恐らく他に誰も真似の出来ない素晴らしい物なんだ。これを売り込めば良い。出版社、否、それよりテレビ局が良い。しかも、大きな所が良い。

スポンサー捜しも割に上手く行った。CBA放送局が特別番組を企画してくれた。英語を本国人並みに話せてもそれ程話題にはならないが、今度はこの男を他の国に三ヵ月住まわせ、その言葉の学習進歩を確かめる、と言うのだ。うたい文句は、三ヵ月でどんな言葉もマスター、しかもどこの国のどの言葉を学ぶかは視聴者の投票によって決める、と言うのだ。

もちろん、局の方では事前に調査し、彼が日本語を母国語とし、外国語としては英語しか学んでないと判り、その二つ以外の言葉であれば何でも良い事となった。局の方には、視聴者から希望の国と言語が毎日山となって届いた。中でも最も希望の多かったのは、世界でも難しい言語とされているロシア語だったので、彼はソ連に行く事となった。

モスクワへの飛行機の中で、彼は考えた。三ヵ月でどんな言葉も出来るようになるなどと言い、局をスポンサーにし、いよいよソ連に行く事になってしまった。確かに英語は出来るようになった。しかし、ロシア語も同じく三ヵ月でマスター出来ると言う保証は全く無い。況して、ロシア語は難しい言語と聞いている。万一全然出来るようにならなければとんだいんちきで、しかもその可能性の方が余程強い。英語だって巧くなったから、ロシア語も同じだ。否、違う。この堂々巡りの考えが、モスクワまで続いた。

モスクワでは、小さなホテルに滞在する予定だ。スポンサーがいるので、割に良い生活が出来る。モスクワに着いても、特に決まってする事は無い。ロシア語学校に行くとか、そんな事は遣らない。アメリカに行った時だって、唯毎日を過しただけで、英語の勉強と言う物は特に遣らなかった。食事、散歩をし、店を覗いたり、当り前の生活を送っただけだった。モスクワでも同じ事を遣ろう。同じ様に過そう。ここまで来てしまっては、それしかない。

CBA放送局のモスクワ特派員が時々来たが、話もしなかった。しかし、彼がロシア語で話して来た時は例外で、分らなくても大いに話をしようとした。

凡そ一ヵ月も経った頃、特派員に電話があり、声の主を聞いて、腰を抜かした。自分の耳が信じられなかった。ソ連で生まれ育った者でなければ決して話せないようなロシア語が、受話器を通して聞こえて来た。しかも、良く聞き慣れた声の……。

スポンサーの強い希望で、更に別の国に行く事になった。三ヵ月どころか、その三分の一でロシア語を物にしてしまったので、スポンサーを含め驚かない人はなかった。どうしてたった一ヵ月で一つの言葉をマスターしてしまったのか分らないが、出来るようになって良かった、と思った。駄目だったら、一体どんな事になっていたろう。良かった。どうやら、これで又別の国に行ける。

モスクワの次は、キンシャサにやって来た。ここでリンガラ語を覚えるのが、次の仕事(?)になった。リンガラ語なんて聞いた事もないが、そんな事はどうでも良い事で、それが使われている所で覚えてしまえば済む事だ。ロシア語ですら一ヵ月で覚えてしまったのだから、リンガラ語だろうが何だろうが大丈夫だろう。

そして結果は、やはりその通りで、ロシア語同様一ヵ月で出来るようになってしまった。こうなって来ると、最早アメリカの一放送局のみの話題でなくなり、世界中のマスコミが騒ぎ始めた。次は我が国へと言う招待が殺到した。こうなると面倒だから、近い所から順番に回ってやれ、と次々と国巡りに掛かった。そう言っても、一年で十二ヵ国しか行けない。時間の掛かる事だが、国を一つ一つ回り始めて五年も経った。一ヵ月で住居を変え、それを五年も続けると、流石に疲れ、故郷の日本に帰りたくなった。早速、スポンサーに言ってみた所、それは尤もだとの事で、三ヵ月の休暇が出る事になった。

しかし、日本のマスコミが黙っている訳はない。新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等、ありとあらゆる物が取材に来る事は間違いない。そこで、帰国後一ヵ月は一切マスコミとは離れたい。しかし、一ヵ月後、必ずや如何なる取材にも応ずる、と言う条件が受け入れられた。これで一ヵ月はゆっくり出来る。一ヵ月休めば、後はテレビに出て有名になるのも悪くない、と彼は思った。

帰国からの一ヵ月は、全くの休暇であったが、マスコミから完全に離れて暮らした他、何時

もと何ら変わらぬ毎日であった。そして、いよいよマスコミ登場の日となった。

FEDテレビ局のスタジオに入った彼は、世界各国から人が集まっているのに驚いた。少くとも五十人は居るだろう。しかも、この放送は宇宙中継で世界各国に同時放映されるらしい。おまけに実況放送とのこと。

いよいよ放送開始で、アナウンサーが話し出す。

「日本の皆様、否、世界中の皆様と申し上げた方が宜しいでしょう。語学に弱いと言われ、何年英語を勉強しても会話一つ出来ない、と言われている日本人の悪評を今覆す人を、今日スタジオにお招きしております。お名前は最早申し上げるまでもございませんでしょう。これまで六十ヵ国以上に滞在され、そこで話されている言葉を総てマスターされた山口正夫さんを御紹介致します。

本日は、山口さんのいらっしゃった国より一人ずつゲストをお招きしておりますので、山口さんと各国語でお話しして頂きましょう。何十という言葉を本国人と同じに話すという奇跡が、今テレビの前の皆様の目の前で起こるのです。

それでは早速でございますが、もうこれ以上待ちきれませんので、まずアメリカ、ソ連と、山口さんが学んだ順に、お話しをして頂きましょう。それでは、まずアメリカからブラウンさん、どうぞ」

呼ばれたブラウンと言うアメリカ人が立って、英語で山口氏に話しかけた。山口氏は黙った

ままである。アナウンサーがあいだに入る間もなく、ロシア人が話しかけた。山口氏はなおも黙ったままだ。スタジオ内でざわめきが起こった。今度はアナウンサーが少し慌てて山口氏に話しかけた。

「山口さん、何かお話し下さい。黙っていらしては困ります。一言でも二言でも」

「無理ですよ」

「どうしてですか」

「だって、僕は新しく言葉を覚えると、前のは忘れてしまうんですから」

「えっ、それでは六十ヵ国も回って学んだ外国語は……。そして、今、あなたが私と日本語で話してるということは……」

「そうですよ。日本へ帰ってから一ヵ月で又日本語を覚えてしまったから、前のは一つも覚えてません」

「……」

「次はどの国に行って何語をやりましょうか」

花火

江坂遊

「もうあれは、四十年も前のことになるやろか。なぁ、おっさん。せや、そのぐらい前になるかなぁ」

警部は、薄暗い取調室で、老人にこう言って話しだした。その老人は頷くでもなく逆らうでもなく、ただタバコを神経質にぷかぷかと吸っている。もう、秋も近い夏の夕暮れ時であった。

「秋風が吹こか、というような夏の終わりやったかな。丁度今頃やな。せや、今の季節や。派手な夏が行ってもて、じっくり物事を考えることのできる秋へ、ぼちぼち移って行こうとしとった頃や。せや、そんなある晩、俺は常光寺さんの夜店へ、涼みがてらひとりで出かけてみたんやった。

おかんに内証でな。

行き交うみんなは陽気に河内音頭を口ずさんでる。

おっさん、覚えとるか、あの頃、売っとったもん。綿菓子やろ、黒パンなぁ、試験管の子分みたいなもんに入っとった、水に色付けただけの飲みもん、あれは、今から考えたら、身体に

大丈夫やったんやろか。ぼんせんべいな。今では口が肥えてもてて、あんなもん到底旨ないやろなぁ。まぁ、そんなん売る店がずらぁっと並んどった。その並びのすみっこの方に、ちょっと間隔あけて、ひとつの店があった。

もう、店が賑わう時間もすんどったもんやから、人通りもまばらやったし、とりわけ、その一軒はずれた店には、人なんて見入っている様子もなかったんや。寂しそうな店やったなぁ。俺はちっちゃい頃から、そんなんに引かれる質やったから、その店の前に、吸い寄せられるようにやって来てもたわけや。

その店、売ってるもんがあれへんねんがな。全然。提燈には、『花火』て書いたるけど、ひとつも花火らしいもんはあれへん。蜜柑箱だけがころがってる。不思議な店やな、と思とったら、うつらうつらしとった花火屋のおっさんが、目え覚して俺のことに気付きよった。ほんで、えらい勢いでこんな事をしゃべりだしよった。

『ぼん、よう来てくれた。やっぱりな、ぼん、花火っちゅうもんは、その素晴らしさをわかってくれるもんに、買うてもらわなあかん。例えば、ぼんみたいな人にやな』

俺はその時、こくっと頷いたがな。

『ぼん、花火は芸術やがな。わかるやろ。おっさん一生懸命考えて、ひとつひとつ作るわけやからなぁ。それをわかってくれなあかんわ。花火いうもんはすぐ消えてしまうもんや。しやから、その短い短い間に、夏の夜の美しさをどう感じさせるか、それがぼん、おっさんのこの腕

にかかっとるっちゅうわけや。紅葉が舞い落ちる下でも、雪が舞い落ちる下でも、桜が舞い落ちる下でも、夏の夜の一瞬の芸術、それを作るために、おっさんいつも新しい仕掛けのことを考えとるんや。しやから、おっさん、ぼんみたいな子には、ええとびきりの花火を見せてやりたいんや。しやけどな、今、まわり見渡してみたら、もうネズミ花火も線香花火も打ち上げ花火も、そんじょそこらのとちゃうでぇ、あれへんがな。早合点せんでもええ、今、そらっ、そこにしゃもが来よった。あっこの闘鶏のしゃもやろ、ええとこへ来た』

そう言うと、おっさんは鋭い嘴をしたしゃもに素早く近づいた。やにわに、ふところから火打ち石出しよると、かしっとしゃものしっぽに火い付けよった。そしたらどや、怪しくしゃものトサカが光ると、わっとその尾っぽから火が噴き出しよった。目がランと輝いて、せわしく羽をバタつかせよると、ふわっと宙に浮いた。尾っぽから星くずのような物、せや、金粉が滝のように降り落ちとる。しゃもは首を上にあげると、今度はものすごい速さで夜空にびゅうっと舞い上っていった。一直線に星くずが降ってくる。空にひとすじ星へと誘う金色の紐が垂れ下がったみたいやった。パラパラパラ、しばらく星くずの落下は止まんかった。そらもうきれいやった。俺は小躍りして喜んだ。手をパチパチたたいて、両手を天に突き上げて、わあっとその辺を駆け回ったんや。

『おっちゃん、きれいや、きれいや。げいじゅつや、げいじゅつや』

その言葉、何のこっちゃわからんかったけど、そう言うたんや。おっさんも愉快そうに、ケ

ラケラわろてる。
『ぼん、おもろかったかぁ。きれいやったか。いい、いこぉる、えむしぃの、にじょうや。よっしゃ、ぼん、もうひとつだけ見したる。これがとっときのやつや』
おっさん、そう言うと、ふところごそごそして、今度は十センチぐらいの線香だしよった。
『ぼん、ちょっと危いから向うへ退いとり』
おっさんは、そう言いよった。
その線香が燃えてるうちは何も起こらんかった。火はどんどん指の方へ登って行きよった。俺は何が起こるんやろと、息もできんかった。
その時や、どかぁんと大きな音がして、おっさんが柘榴のように破裂しよった。
おっさん、きれいな花火になりよった。星くずが四方にこう飛び散りよった。赤や黄色や青や金や銀や、ちっちゃな玉みたいなんが、お互いにゆっくりとぶつかり合いながら飛び出してくる。俺はもう、金縛りにあったようや。この世のもんとはとても思えん。おっさんは、キラキラ光って、メラメラと燃えて、パッと爆ぜよった。七色の煙が、上の方は大きくつぶれて丸い、まるでキノコのように現われた。
『おっさん、花火はげいじゅつやなぁ』
思わず口に出たがな。
その花火と煙が尽きてしまうと、あたりにもとの静寂と暗闇が戻ってきた。おかしなことに、もうそこには、提燈も蜜柑箱も跡形もない。おっさんといっしょに消えてもてたんや。花火屋のおっさん自身の花火が消えた時、夏も終わったというわけやったんやなぁ。
これで全部や。これが、なつかしいなつかしい、何物ともかえることのできん俺の大事な思い出や。なぁ、おっさん」
この話に聞き入っていたおっさんに、彼は次にこう言った。
「なぁ、おっさん。あの花火屋のおっさんやろ、おまはん。せやろ。俺は忘れとらんで。なんでまた四十年もたって、俺の少年の頃のきれいな思い出、わざわざ踏みにじりに来よったんや。なんであんな事して、ひっぱられて来たんや」
「……」
「おい、おっさんて。黙秘権か。それもええやろ。まぁ」
「……」
「おっさん、何かしゃべれや。助けたいんやで俺は……、おっさん」
「……」
「おっさん、そんな、煙草いうもんは、端まで吸うもんやないがな。な、唇に火い付くがな、あついっちゅうのに」
警部が手を出す前に、おっさんは、突然キラキラ光って、メラメラと燃えて、パッと爆ぜよった。窓からすうっと秋風が吹き込んできて、河内音頭の太鼓の音が、急に遠ざかった。

来訪者

久保田浩子

H博士は、小鳥のさえずりに、夜が明けつつあるのを知った。ついに昨夜は、徹夜してしまったのだ。

「今さら家に帰っても、仕方がないな」

博士は、大きく一度深呼吸をすると、かたわらのソファに、ながながと寝そべった。

「しばらくここで、寝るとするか」

H博士は、机の上の、今しがた完成したばかりのそれを、満足気に見つめた。次第に快い眠気が、優しいウェーブとなって彼を包みはじめた。その時、その快さを引き裂くかのように、呼鈴が鳴った。彼は、昨夜この研究所に、宿直がいなかったことを思いだし、うんざりした様子で、ゆっくりと立ちあがった。

そこには、二十五、六歳くらいの若者が、立っていた。

「H博士ですね。僕は、〇〇研究所の研究員のNと申します。博士が、今、タイム＝テレビなるものを、発明中と聞いて、ぜひとも一目見せていただきたいと思ってやって来ました」

「こんな朝早くにかい？　非常識だよ」

「ええ、私もそう思ったのですが、昨夜そのことを聞いて、いてもたってもいられず、すぐその日の夜行に、飛び乗ったのです。ですからここに着いたのは、真夜中でした。研究所に灯がともっていたので、誰かがいると思いましたが、もしそれが博士でしたら、研究の邪魔になると思って、今までここで待っていたのです」

「それでは君は、ずっと朝まで待っててくれたと言うのか」

博士は、彼の熱心さに感動してしまった。この寒いのに、彼はじっと辛抱強く立っていたのだ。ただ自分の研究を一目見たいだけのために……。

「いいとも、見せてあげよう。先程完成したのだ」

博士は、彼を研究室へ導いた。タイム＝テレビは、中央の机の上にあった。それは、一見、普通のテレビと変りがない様であった。

「これがそうですか？　いったいこれは、どういうものなんですか？」

「まず、画面の前に立ち、チャンネルを年代に合わせる。そしてスイッチをONにすると、その人のその年代での姿が写るのだ」

「へえ……面白そうですね。どうでしょう。ひとつ僕の未来を見せていただけないでしょうか」

「いいとも、何時頃がいいかね？」

「――五十年後にして下さい」

博士はチャンネルを＋50に合わせ、スイッチを入れた。テレビは、ツーという機械音をあげると、やがてその画面に、一人の老人を写し出した。

「あっ、これは確かに僕です。素晴しいっ」

老人は、豪邸に住んでいた。彼はテラスでコーヒーを飲むと、庭園へ降りて、一匹何十万もするであろう錦鯉の群れに、餌をやり始めた。その池の回りには、大輪のバラが咲き乱れている。

「なかなか優雅な暮しをしてますねえ、僕は、本当にこういう生活をするんでしょうか」

「タイム＝テレビは正直だよ。たとえばその時代に存在していない人間は写らない。ごらん、画面の前には、私も立っているのに、君だけしか写っていない。私は今七十八だ。いくらなんでも五十年後には、この世にいることはないだろう」

「それでは、私は確実に生きて、このような生活をすることになるんですね」

「ああ、そうだとも――しかし……」

その時博士は、隣りにいる若者が、突然ヒヒヒと不気味な笑い声をたてはじめたのに気づき、言葉を止めた。

「どうかしたかね」

「ウヒヒヒヒ。いいかよく聞け。俺が研究員なんてまったくのでたらめだ。俺はお前が、一人

でここに残るのを毎日ずっと待っていたんだ。俺は、銀行強盗を計画している。しかし不安だった。すぐに捕るのではないかとな。しかしこれを見て安心した。俺は、監獄どころかこんな立派な家に住んでいるじゃないか。何故か。答えは一つだ。つまり俺は、強盗に成功して時効が過ぎるまで逃げ切り、大金持ちになれるってことさ、じいさん、いいものを見せてくれてありがとよ」

Nと名乗る男は、そのまま矢のように走り去った。あとに残された博士は、自分の軽率さに、溜息をつき、テレビのスイッチを切った。その顔には不安の色がうかがえた。

しかし次の朝刊に、もうNは載っていた。まったく危険が無いとわかると、計画はいいかげんになるものだ。彼は、白昼堂々と銀行へ押し入り、とり押さえようとした人々を、次々に包丁で、刺し殺したが、結局一文もとれずに、捕ってしまったらしい。彼は警察へ連行されるときも、大胆不敵な笑いをうかべ、

「捉えるなら捉えろよ、俺は必ず逃げ出すことができるんだからな」

と叫んだと言う。

何年たっても判決は出なかった。彼の態度は、まったく厚かましく、裁判中にも居眠りはする。にやにや笑いながら、

「おう、死刑でもなんでも適当に決めてくれていいぜ。どっちにせよ、俺はまったく安全なんだからな」

と、野次をとばすといったありさまであった。それは、ひどく不気味で、裁判官達は、そのためかえって判決が出せないでいたのだ。

さらに年月が流れ、世間の人々があの事件をすっかり忘れてしまった頃、ある日H博士は、心臓疾患で倒れた。彼はすぐに病院へ運ばれたが八十九の高齢では、その命は、もはや風前の灯だった。しかし彼は世界的な科学者だ。ノーベル賞候補にも挙げられている。断じて死なせてはならない。

「なんとかならないか」

「心臓を取り換える以外ないね」

「しかしねえ。博士のこの御老体では、心臓を換えても何年もつか」

「――いっそのこと、脳を移植してしまおうか」

一瞬、医師たちは、沈黙した。どの医師も、日本中から緊急に呼びだされた名医ばかりであった。

「それはいい。若く強靱な肉体に博士の脳を移し変えれば、あるいは、彼を生かすことができるかもしれない」

「現在でも危険な手術だが、一か八かやってみるか」

「急ごう、もうあまり時間がない。早くその代わりの肉体を捜さねば」

丁度先日死刑が決まった男がいた。彼はその日のうちに、医学の犠牲になってしまった。彼

の肉体にH博士の脳が移植された。そして彼はもはやNではなかった。

H博士は、小鳥のさえずりに、夜が明けつつあるのを知った。まだ非常にだるかったが、彼はゆっくりと体を起こし、自分の新しい肉体に気づいた。彼は、それが、元あの不運な銀行強盗のものであったとわかると、そっとつぶやいた。

「やはりこうなってしまった。あの時から、ずっと気になっていたんだが……。あのテレビに写っていたのは、実は私の家だったのだ」

彼は、大きく一度深呼吸すると、再び快い眠りについた。

拡散

田次慶久

これが起こることはわかっていた。何しろ自分の脳髄のことだからわからないはずがない。脳髄は頭蓋骨に圧迫されるのがいやになってしまったのだ。

始まった。

脳髄が細胞単位になってじわじわと全身に拡がっていく……。

終わった。

三時間がすぎていた。

脳髄は全身に拡がったが、ばらばらになったわけではなく、以前と同じに統一されていた。それより意識が拡大されて、視覚・聴覚が、体じゅうに拡がったようだ。体のどこからでもまわりを感じることができるのだ。服ぐらいは何の妨げにもならない。三百六十度の空間を立体的に把握できるのだ。

足の裏が少しかゆかった。

新しい感覚の力を確めようと神経を集中させた。更に広い空間を感じた。体じゅうがピリピ

リしていて、他人の目にはまったくすきがないように見えるだろう。

慣れないせいかすぐに疲れてきたので、横になった。緊張をといて寝ころんだら、とたんに背中にすごい圧迫感を受けた。驚いて立ち上がると、圧迫感は消えた。触覚も鋭敏になっていたのだ。服が気にならないので安心してしまっていた。当然、予想されるべきだった。一生、立ちっぱなしになってしまった。

頭をふったら、脳髄のなくなった頭蓋がからからっ、と音をたてた。

本当に頭がからっぽだ、と全身で思った。

可愛い誤算

渡辺　勝

その夜、私はスナック「K」で酒を飲みながら、昼間起した交通事故の話をママとしていた。

そんな時、私たちの話を聞いていたのか、隣りの席でひとりウイスキーの水割を飲んでいた男が、不意に話かけてきた。

「交通事故は本当に嫌ですね」男は私に同情するように言った。「私にも経験があります。だからあなたの気持はよくわかります」

「あなたにも交通事故の経験があったんですか」

私は妙に感心した。だがよく考えてみれば、私の隣りに交通事故の経験者が居たとしても、それほど不思議なことではなかった。全国であれだけの量の事故が発生しているのだから、当然の事かもしれない。

「話を聞いていますと、あなたの場合は軽傷ですんだらしいですね。幸運ですよ。私の場合は殺してしまった。しかも可愛い少女をです。何んともやりきれません」

ウイスキー・グラスを両手でつつむように持って、正面を見ている男の表情が、かすかにゆがむのが判った。事故当時の模様が、男の記憶の中で再現されたかのように。

「嫌な事を思い出させましたね」

私は詫びるように言った。だが、私が男に詫びる必要はなかった。男が勝手に私の話を聞いていたのだから。私の話から男が苦痛を受けたとしても、それは私の関知しない所で、行きがかり上そうなってしまったにすぎない。

「私の話を聞いて戴けますか。ぜひ聞いて欲しいんですが」

男は私とママの顔を交互に見ながら、哀願するように言った。

交通事故で人を殺した話を聞かされたところで、気分の良いものではないと思ったが、男の態度から、事故にからんだ何かがあるのではないかと思い、私は黙ってうなずいた。ママも興味をそそられたらしくうなずいていた。

「事故を起したのは、かれこれ十五、六年前になりますか。当時、私には婚約者がいましてね。最初、彼女の両親は私たちのことをなかなか認めてくれませんでね、苦労しました。でも、私が何度も足を運んで説得するうち、その努力のかいあって結婚すること了解してくれました。その時はうれしかったですよ。これで私の人生も順調に走り始めたと思いました。私は彼女をとても愛していましたから。しかし、人生は好事魔多しですね。丁度その頃は紅葉の季節でしたので、私は彼女を誘ってドライブに行くことにしたんです。そのドライブの途中事故

を起しまして。それがきっかけで、私の人生は目茶目茶になりました」

男は淋しそうに笑った。

「私たちはT県へ行くことにしました。N市からS町まで。この間の紅葉が特に美しいことで有名でしたから。評判通り美しかったですよ。そしてS町まで後数キロの地点に来た時事故が起ったのです。そこは山を切り崩して出来た道路で、右側が山、左側が深い谷になっていました。道巾も四メートル位であまり広くありませんでした。突然右手の岩の陰から少女が飛び出して来たんです。私が少女に気が付いた時は、すでに車の正面にいて、顔だけがボンネットの上からのぞくように立っていたんです。私は慌ててハンドルを切り、ブレーキを踏みましたが間に合いませんでした。少女は即死でした。楽しいはずのドライブが一転して地獄となりました。幸せの絶頂から奈落の底へ転落です。彼女は泣きわめくし、私は事の重大さに気はどうてんしておろおろするばかりで、何をどうしたのか今でもはっきりとは思い出せません」

男はウイスキー・グラスを干した。

「この事故が原因で私たちは別れることになりました。彼女の両親が反対したからです。私にとって事故のショックは、あまりにも大きすぎました。彼女の両親を再度説得するだけの気力を失なっていました。本当なら私が受けた心の傷を直すため、彼女に励ましてもらいたかったんです。でも仕方がありません。原因は私がつくったんですから。自分を責めることによってあきらめました」

男は大きく嘆息した。言葉とは裏腹に、男は彼女をあきらめたことを後悔しているようにみえた。

「私は事故から日時が経過するに従っていろいろ考えました。そして、あの事故に対していくつかの疑問が浮んだのです。事故の責任を転嫁するつもりではありません。私が少女を車で殺した事実は変えようがありませんから、どうしてあの少女が現場附近に居たのだろうかと言うことです。現場附近には人家はありません。それに少女の家はあそこからでは三キロ程先です」

「たまたま遊びに来ていたと言うことあるでしょう」

私は男が何を考えているのか予測出来なかったが、思いつくまま言った。男は私の意見には納得しなかった。

「私は今でも車の前に立っていた少女の顔を覚えています。あの表情は意外におだやかでした。走って来る車の前に立っているにしては、恐怖をまるで感じていない」

「多分、少女は車に轢かれるとは思っていなかったんですよ。自分の前で車は止るものと決めていたんでしょう」

男は私の言葉にかまわず話を続けた。

「それにもう一つ、これは後から判った事ですが、あの事故現場では私が事故を起す前一ヵ月の間に、左側の崖から三台もの車が転落しているんです。そして、乗っていた人たちは全員死

亡しています。確かにあの崖から谷へ転落したのでは助からないでしょう。私の場合もあの時少女が飛び出して来るのを、ほんの一寸早く発見し、思い切ってハンドルを左に切っていれば、私の車も崖から転落していたでしょう。ですから少女は私たちの身代りになって死んだのです。それが私たちにとって最も辛い事でした。仮に私たちが崖から転落していたとしたら、少女はこの事故の目撃者であり、また発見者にもなっていたはずです。それは私の事故以前に崖から落ちた車三台の場合と、全く同じ結果になります。付け加えますと、崖から落ちた三台の車の発見者はすべてあの少女だったのです。そして、私が少女を轢いて以来、あそこでの転落事故は無くなりました」

男は、自分の話すことはこれですべて終ったと言うように、口を閉じた。

不思議な服

滝田尚宏

太郎は、毎朝満員電車に乗るたびに思います。次の駅では、降りられるだろうか。気の弱い太郎にとって、人がぎっしり詰まった車内を押し分けて出ることは、とてもできないのです。そのため、乗る時はドア近くに居るのですが、いつの間にか奥へ押しやられてしまいます。よし、今日こそは絶対途中で降りてやるぞ、と思ってみてもいざとなると、気後れしてしまいます。

すでに、自分の降りる駅から二つも乗り越していました。「すみません、降ります」と小声で言ったぐらいでは、誰ひとりよけてくれません。いや、よけようがないのです。そして、いつも身動きのとれないまま、終点まで行ってしまうのでした。太郎は、また思います。何とか、苦労なくこの人込みの中を通り抜けられないかな。そうすれば、満員電車から降りられるのに。

ある日、太郎は街を歩いていると、変わった洋服店が目に入りました。店先に、世界各地の

珍しい動物の皮で作られた服が、並んでいるのです。これはおもしろいぞ、と太郎は入ってみました。たくさんある服の中には、狩猟禁止の動物の背広や、とうの昔に絶滅した鳥の毛皮もそろっており、しまいには、人魚の皮のチョッキまで出て来る始末で、いささか怪しげでした。

それでも、けっこう楽しい店でした。太郎は、ふとあらゆる動物の皮があるのに、人間のはないんだな、と思いました。しかし、自分が服になってしまう姿を想像して、やっぱりない方がいいや、そう思い直しました。

いろいろある中でも、一番、太郎の気を引いたのは、ウナギの皮でできた服でした。触ろうとしても、手が置けないくらい、するする滑る服です。色は紺に染められていました。また、魚の臭いもなければ、味もありませんでした。太郎は、一週間前に食べたウナギの蒲焼(かばやき)が頭に浮びました。でも、それよりすてきな考えを、思いついたのです。すると、たまらなく欲しくなりました。

「ねえ、これ本当に本物のウナギの皮なんですか」太郎は服を指して、店員に聞きました。

「もちろんですよ、お客さん。ここにある服は、全部表示してある通りの皮で作ってあります」

「じゃあ、これください」太郎は、服を買ってしまいました。でも、店員の話を信じたからではありません。なにしろ、この滑る服が欲しかったのです。

明くる朝、太郎はウナギ皮の服を着て、さっそうと満員電車に乗り込みました。こんなに生き生きした気持で乗ったのは、入学式の日以来でしょう。それは、あの洋服店でひらめいた、すてきな考えのせいなのです。しだいしだいに太郎の身体は、車内の奥へと詰められていました。さて、その考えはこうでした。ウナギはつかもうとしても、つかみどころがなく逃げられてしまう。つまり、ウナギ皮の服を着た自分は、電車の中をそんな風にうまく通り抜けられるにちがいない。だって、この服は、ウナギみたいによく滑るのだから。とまあ、まったく単純な理由です。

さあ、降りるはずの駅に着きました。けれども、まわりには、誰も動こうとする人がいません。太郎は、待ってましたとばかりに、目をつぶって力いっぱい、出口の方へ身を乗り出しました。すると、どうでしょう。つんのめるように小走りで、ホームに出ていました。不思議なことに、何の抵抗もなく、するする人込みを通って来たのです。太郎自身、一瞬信じられませんでした。ホームに突っ立ったままポカンとしているうち、電車は行ってしまいました。他のみんなは、きっと何も気付かなかったでしょう。それほど、あっという間のささいな出来事でした。しかし、太郎は、とても満足でした。

気を好くした太郎は、今度は街へ行きました。うろうろ歩いているうち、デパートのバーゲ

ンセールの人の群にぶつかりました。さっそく、服を使ってみました。一番最後に来た太郎が、最前列に顔を出していたことは、言うまでもありません。また、火事のやじうまにも容易に滑り込み、間近に火を見ました。

気の弱い太郎には、いずれも初めての光景でした。そして、都会のように人の殺到した所では、ウナギ皮の服はとっても便利だ、と思いました。

夕方になり、さんざん街を見物した太郎は、なぜか海が見たくなりました。疲れて気の抜けた太郎の身体は、近くの海の見える崖へ足を運びました。崖っぷちでは、なにやらすごい人だかりです。太郎は、急に元気が出て来ました。走り寄って、輪の外で飛び上がって見ている人にたずねました。

「どうしたんですか。こんなに人が集って」

「みんなやじうまさ。スポーツカーが、急カーブでハンドル切りそこねてね、ガードレール吹っ飛ばして海へドボンだってよ」

「スピードの出し過ぎですね」

「まったくだ、この辺は、こういう事故が多いというのになあ」

太郎は、一目散に、人だかりの中へ入って行きました。見る見るうちに、人の間を通り抜けて行きます。しかし、太郎の身体は、前へ勢いがついてしまい、止まろうにも止まりません。

さあ、大変です。あと数人通り過ぎれば、ガードレールのない絶壁があるだけです。なにしろ、摩擦抵抗がゼロ同様の服なものですから、助走をつけて崖から海へ飛び込んだことになるのです。太郎が、力いっぱい走り過ぎたのかも知れないぞ、と思った時は、もう、足下は空を切っていました。太郎は、真逆さまに落ちて行きました。事故に集っていた人々も、あっけにとられ、ただまばたきをしているだけでした。誰か、危ないと叫び、太郎の服をつかんだ人がいましたけれど、すぐに服は、その手をするりと抜けてしまったのです。

太郎は奇跡的に助かり、海を漂っていました。塩からい水を飲みながら、少し調子に乗りすぎた、と反省しました。はっきり意識を取り戻した太郎は、岸の方へ泳ぎ始めたのですが、身体が言うことをききません。それどころか、逆に沖へと反抗するのです。それを振り切って、やっとのこと岸にたどりついた時には、もうへとへとでした。ところが、さらに驚いたことに、海から上がろうにも首から下が出ません。なにか強い力で、海に吸い付けられている感じです。このまま、一生海で暮らさなければならないのかと思うと、太郎は泣きたくなりました。しかし、気が付いてみると、足も腰も水面から外に出せます。つまり、服を着ている腕と胴の部分だけが、水中を離れないのです。太郎の頭は、今やはっきり、この服は本当にウナギ皮なのだ、しかも生きているんだ、と確信しました。そうしてみれば、不思議と海へ誘われたこと、また、奇跡的に助かったことも、このウナギのせいにちがいありません。太郎は、水中

ですぐさま、服を脱ぎました。すると、服から解放され、太郎の全身は、海を脱することができたのです。脱ぎ捨てられた服は、しだいに沖へ遠ざかって行き、もう太郎の目には、映らなくなってしまいました。

もし、あなたが海で一着の、いや一匹の服が泳いでいるのを見かけたら、それは太郎の着ていた、不思議なウナギ皮の服かも知れません。

逆さテレパス

松原弘樹

私は今大きな湖の縁に立っている。何をするためかって？　死ぬためだ。正確に言うならば自殺だ。もうこれ以上生きていることはできない。あの日以来私の人生は狂った。

あの日、正確には七日前のことだ。

その日私はいつものように朝六時半に起きた。顔を洗い終ってから、妻の待っている食堂へ行き朝食を食べようとすると、

「どうせそうでしょうよ」

突然妻がそう叫んで私の頬を引っぱたいた。

「なんだ。どうした」

まったく訳が分らなかった。妻になぐられるようなことをした覚えはまったくないのだ。

「隠したって無駄よ。どうせ私はブスのふとっちょよ」

今までにこれほど驚いたことはない。確かに私は寝起きの妻の顔を見てブスのふとっちょだ

と思ったが、それはただ思っただけのことで決して口に出して言ったりはしていないのだ。だのに妻はそれを知っていた。これが驚かずにいられようか。

「お前何故そのことが分ったんだ」

「ほらやっぱり。私の言った通りだわ」

妻は得意そうな顔をしてみせた。しかし、それどころではない。

「そんなことはどうだっていいんだ。それよりも何故俺の考えていることが分ったんだ」

「そう言われてみれば不思議ねえ。何だか知らないけどあなたの考えていることが分るの。どうしてかしら?」

私の心を読んだんだ。私はそう思った。もしかすると彼女はテレパスなのかも知れない。

「今俺が何を考えているか分るか?」

「私がテレパスかも知れないって思っているんでしょう。でも今まではこんなことなかったし……」

「今日急になったのかも知れないじゃないか。とにかく俺の心が読めているのだから」

その朝私は複雑な心持ちで家を出た。会社を休むわけにはいかないのだ。第一何と言えばいいのだ。妻がテレパスになったのでは信じてくれるはずがない。それほど不思議なことなのだ。

会社に着くと、親友が急に驚いた顔をして話しかけてきた。

「君の奥さんがテレパスだって!」

朝驚かされたばかりだというのに、またも驚かされてしまった。

「何故知っているんだ」

「何だか君がそんな事を考えているような気がしたんでね」

不思議だ。この男もテレパスになったのだろうか?

しかし、私の心を読めるのは何もこの二人に限ったことではなかった。

部長の側で、部長はブタに似ているなあと考え、こっぴどくしぼられた。

食堂では、頼みもしないのに食べようと思っていたカレーを持って来てくれたりもした。

友人に金を借りようと思って近づいたら、何も言わないうちから走って逃げていった。

帰りの電車の中では、ブスだと思った女から足をふまれた。

この頃になると鈍い私にも事の真相が分ってきた。いくらなんでも私の合う人間全てがテレパスのはずはない。超能力者は私の方なのだ。こう考えれば全てつじつまが合う。

私はテレパシーとまったく正反対の能力を持ってしまったのだ。つまり、テレパシーとは他人の心を読むことが出来る能力を言うのだが、私の場合は自分が考えていることを他人に伝えることの出来る超能力なのだ。珍らしい能力だ。こんな話は聞いたことがない。でも、それでなくては私以外の全ての人々がテレパスということになってしまう。

私は、家を出た時と同じ様に、複雑な気持ちで帰宅した。

奥から妻が、私の帰りを待っていたかのように急いで出て来て言った。
「あなた、おかしいのよ。あなたが私をテレパスだと言うから、私、ご近所を回ってみたの。でも、誰の心も読めなかったわ。どうしてなの。あら、あなたの心はやっぱり読めるわ。まあ、私じゃなくてあなたが超能力者なの？」
私は、喋り続ける妻の横を抜けて自分の部屋へ逃げこんだ。今日の経験から、近くにいなければ考えが伝わらないということが分った。だから、部屋の中にいれば妻に心を読まれなくてもすむのだ。
先の妻の言葉から、私が超能力者だということが明らかになった。妻が私の心しか読めないということはつまりはそういうことだ。
私は超能力者になったのだ。
しかし、この能力はあまりありがたいものではなかった。それどころか非常に困る能力なのだ。その証拠に、三日後私は会社をクビになってしまった。
まったく悲劇と言う他ない。
だいたい、人間というものは心の底では他人をバカにしているものだ。普通の人ならそれでもいいのだろうが、私の場合は超能力のせいで考えていることが他人に全部伝わってしまうのだからたまらない。この能力はおさえることが出来ないのだ。私は、一日にして職場の嫌われ者になってしまった。

それだけならまだ良いが、翌日病気で休んだ部長の代りに、重役会議に出席させられてしまったからたまらない。重役が全部ハンサムなわけがない。特に社長はひどい馬面だった。私は重役連の大部分に嫌われてしまった。
翌朝、私は職を失った。
また、こんな調子では再就職できるはずもない。
その内、妻にも疎まれ始めた。何しろ妻はブスだから、考えまいとしても顔を合せればついつい考えてしまう。私の方でも妻が可哀相になってきたので結局離婚した。
私はもう全てに絶望していた。近所にも嫌われて、村八分のようになっている男にもう道はなかった。
その夜、私は気がすむまで思う存分酒を飲み、思う存分酔っぱらった。生まれて初めての事だ。
だが、悪い事は続くもので、真夜中の道をフラフラしながら歩いていると、火星人みたいな顔をした三人のチンピラに会ってしまい、袋叩きにされた。酒に酔っても能力は一向に衰えないらしい。
それからどうやって帰ったのか記憶にないが、とにかく朝起きた時は我家の中だった。
それから私は電車賃だけ持って駅へ向い、どこ行きとも分らない電車に飛び乗った。飲み慣れない酒のため二日酔いはひどく、殴られた顔もまだ痛んだが、もうそんなことはどうでもい

い。

行先にあてはないが、目的はあった。私にはもうこれしか残されていないのだ。

一時間ぐらい揺られた後、あまり人のいそうにない駅を選んで降りた。

そして、その町にまったく人の寄りつかない一つの湖を見付けた。私の目的を達成するにはもってこいの場所であった。

かくして、今私はその湖の縁に立っている。もちろん自殺するためにだ。ここなら大丈夫だ誰もいない。人のいる所で死のうとすれば心を知った人がたかってきて困るだろうが、ここならばその心配はない。

私は目を閉じた。たったの一週間で平凡で幸福だった男が自殺するまでにおいこまれてしまったのだ。何という人生だろう。

私はいよいよ飛び込もうとして、水のピチャピチャという音に気付き一旦閉じた目をまた開いた。

そして、私は一つの発見をした。今まで私の能力は人間にだけ通用するものだと思っていたのだが、それは大きな間違いだったようだ。動物にも通用するのだ。

その証拠に、私が飛び込もうとしている湖の水面には半円を描くようにして無数の魚が集っている。

そして、私がいつ飛び込む気になるかと嘲るような目で、こちらをジーッと見つめているのだ。

ああ、何ということだ！

喜びも悲しみも幾年月

まさたか

夜もふけてきた。この交差点は十一時にもなると、人通りはまったくなくなる。
ホッと一息つく。今日は本当に疲れた。
いつごろから、こんな苦痛を毎日味わされているのだろう。体にねばりついたガムや痰を、ぶるぶると払い落とした。
ぼくは横断歩道だ。
この世に生を受けて以来、ずっとこの交差点に寝そべったまま、二次元の生活を続けている。
毎日、人に踏みつけられ、自動車に、自転車に、オートバイに、うば車に、轢かれて生きてきた。
ぼくの上を通っていく人間は、悪い奴ばかりだ。痰や唾を撒き散らす奴もいれば、ゲロを吐く奴もいる。ガムやタバコを平気で投げ捨てるのは、日常茶飯事。道路掃除のおっさんまでが、無神経にゴミを落としていく。

なぜ、こんなに苦しまなければいけないのか？
何度も逃げ出そうとした。
しかし、いくら逃げても、気がつくと、いつの間にか、この場所に戻っている。本能なのだろうか。
よその交差点に出かけて、ほかの横断歩道たちの話を聞いてみても、みんな同じだという。
しかたがない、これがぼくたちの運命なんだ。最近はすっかり、あきらめている。
死ぬまで、ここに寝てるよりしょうがない。
しかし死ぬときとは？
「何を考えてるの、ビリー」ビリーというのは、ぼくの名前だ。話しかけてきたのは、ジェーン。ぼくの向いの横断歩道だ。
「元気ないのね」
「いま、ちょっと考えてたんだ。死ぬときはどんなだろうって」
「まあ、あなたらしくもない」
「君はぼくより年上だから知ってるだろ？　ぼくたちが死ぬときは、いったいどうなるんだい？」
「わたしもよく知らないんだけど、聞いたところによると、わたしたちは人間に殺されないかぎりは死なないんですって」

「ふうん」
「でも、そんなこと考えても、しょうがないじゃないの」
「そうかなあ」
「おいおい、おふたりさん」
「何を話してるんだよ」
ぼくの右どなりのジョンと、左どなりのジェームスが話しかけてきた。二人とも、このあたりでは一番の年長者である。
「この人、死ぬときのことを考えてるんですって」ジェーンが二人に言った。
「ねえ、君たちなら知ってるだろ。ぼくたちが死ぬときって、いったいどうなるの」
ジョンとジェームスは、ちょっと、しかめっ面をしたが、すぐに笑いだした。
「ハハハハハ……変なことを考えるんだな」
「バッカだなあ、それより、もっとおもしろい話をしようよ」
やっぱり、ぼくの考えることは、おかしいのかなあ。
それから、いつものように、四人で朝まで楽しく語りあった。
夜が明けてきた。
キキーッ。交差点のまん中にトラックが止った。作業衣を着た二人の男が降りてきた。片ほうの男が、ぼくを見降して言った。「ここは新しいから、今度でいいな」

「ほかの三つは全部かすれてるから、塗りかえよう」もう片ほうの男が言った。
「ようし、じゃあ人がこないうちに、早くやっとこうぜ」二人は手袋をはめ、トラックから大きな鉄のバケツを出してきた。熱い、油くさい、においが漂っている。おそらく、ぼくたちの下にある地面と同じもの、アスファルトとかいうものだろう。
「ここからだ」右にいる男が、ジェーンを指さした。
左の男がバケツの中身を、ジェーンの上にぶちまけた。
「キャーッ。助けて！」ジェーンの悲鳴が聞こえた。
ぼくは体がすくんだ。
ジェーンの助けを求める声が、耳に響く。
「ビリー、ジョン、ジェームス、誰か、助けて！」
しかし、ぼくらには、どうすることもできないのだ。横断歩道の無力さを、つくづく感じた。
あっという間のできごとだった。
ジェーンが、まっ黒に塗りつぶされて殺された。
ジョンとジェームスも、そのあと、殺された。しかし彼らは悲鳴をあげなかった。ある程度は予期していたのかも知れない。
そうだ、三人とも知っていたはずなんだ。昨日も楽しそうに話してたけど、内心では恐怖に

怯えていたのだ。それなのに、あんなこと聞いちゃって、悪いことしたなあ。
ふと見ると、二人の男は、まっ黒に塗りつぶされたジェーンたちの死体の上に、新しい横断歩道を作っていた。
そして作業を終えると、トラックに乗ってさっさと帰っていった。
彼らは、ぼくたちにとって、殺し屋であると同時に造物主でもあったのか。つまり神様なのだ。
いやだ！　そんなこと認めるものか。怒りで体がふるえた。
夜になった。
ジェーンたちのことを思い、感傷に浸ろうとするのを、じゃまするように、今日もいろんな奴がぼくを踏みつけていったが、やがて人通りもなくなり、あたりは静まりかえった。
ぼくは新しく生れた三人に、声をかけてみた。「おい、君たち」
返事はなかった。まだ、口がきけないのかな、と思った。
遠くで声が聞こえた。「ビリー！」一つ先の交差点のベンがやってきた。
「ジェーンがやられたんだってな」
「ジョンも、ジェームスもだ」ぼくは答えた。
「かわいそうにな、おまえを慰めてやろうと思って、みんな連れてきたんだ。酒もあるぜ」
お酒を持って、チャーリーとかキャロラインとかいった、顔なじみの連中がやって来た。

「ところで、新しいのに何か言ったか」ベンがたずねた。
「口がきけないらしい」ぼくが言った。
「おーい、君たち。こっちこいよ」ベンが叫んだ。
「はーい」
「こんにちは」
「よろしく」
三人とも女だった。ぼくが聞いたときは何も言わなかったくせに。ベンは男前だからな。
新入りの三人も加えて、飲めや、歌えやの大騒ぎとなった。
酔っぱらったチャーリーが話しかけてきた。
「なあ、三人が死んだときは、どんなだった？」
「知らないほうがいいよ。それに、ぼくも話したくない」ぼくは答えた。そう、ジェーンたちも同じ気持だったんだ。だから、ぼくに何も話さなかったんだ。
急に、ジェーンの断末魔の悲鳴が、耳に甦えってきた。
なんとか忘れようと、飲んで、騒いだ。
それでも、あの二人の男が始めに言った言葉が、耳に残っていた。
「ここは新しいから、今度でいいな」
今度は、ぼくが殺られるのか。

もう、生きてゆくことなんて、どうでもよくなった。その夜は、酒をめちゃくちゃにがぶ飲みして、あたりかまわず女たちに抱きついた。まるで乱交パーティだ。

夜が明けた。

みんな、そのまま寝てしまったらしい。

ここは、いつの間にか、スクランブル交差点になっていた。

しかし、気づく人は、誰ひとりとしていなかった。

美女マスク

小川有里

一九九×年、巷（ちまた）は美女であふれていた。高度な〝美女マスク〟開発の賜物（たまもの）である。それは超極薄、伸縮自在のお面のようなものである。精巧で、本物の肌と区別がつかないくらいであった。安くて手軽に好みの美女になれるので「容貌を悲観して自殺」などというニュースは全く聞かれなくなっていた。

男達は喜んだかというと、それがそうでもなかった。

田所銀河の場合も同じである。

仕事を終えて家に帰る。どこの女優かと見まがうほどの美女が出迎えてくれる。妻である。家事はすべて電化されているので妻たちは手も荒れない。時間はたっぷりと余っている。長い爪は毎日マニキュアの色が違っていた。髪は一筋の乱れもなくセットされている。素顔など見たこともない。入念に化粧をほどこした凄いばかりの美女マスク美女、これが一般の妻の姿であった。

彼はなんだか息が抜けなかった。一分の隙もない美しい妻といるとよけい疲れが増すのであ

る。

本来、美女というのは高嶺の花ゆえにあこがれ、もてはやされるのである。こう会社にも街にも、そして家にもクレオパトラが右往左往していては、美女の価値は薄れる。

「わたくし、これからいつもの無料美容講座へ行って参りますわ」

妻が上品にほほえんで言う。一日おきに夜開かれている美容講座である。まだ、これ以上きれいになるのかと思うと田所銀河はぞっとする。女というのは、どうして果てもなく美しくなりたがるのだろう。男心がちっとも分かっちゃいない。

「僕もちょっと出かけてくる」

夕食がすむと妻と前後して彼は夜の街へと出た。ぶらぶらと裏通りのバー街へと向かう。バー「素顔」、バー「つっかけ」などという看板が光っている。そんな看板を見るだけでも田所の肩の凝りがほぐれていく。彼は迷った末、まだ行ったことのないバー「洗い髪」のドアを押した。

「いらっしゃいませ」

ホステスが迎えてくれた。目が象のように小さくやさしい、ずんどうの中年女であった。笑うと、いっぱいに歯ぐきが現われて、歯の製造元までまる見えになった。彼は、なつかしい故郷へでも帰ったような心地がしてニッコリと笑い返した。

満員の盛況だった。彼は隅の方にやっと一つ空いていた席に案内された。

おしぼりを使いながら、彼は明るい店内を見渡した。めり込んだように鼻ペチャのホステスを囲んで談笑している一団があった。すごい出っ尻で、鬼瓦のようなホステスとしんみり語っている若い男もいた。ママは、つり目をさかさまにしたようなひどいタレ目で、鼻はあぐらをかいていた。ママのまわりはファンの男たちで賑わっていた。

どのホステスも洗ったままの乱れ髪である。もう、めったに見ることのできない素顔の、それも今は死語に等しい醜女たちであった。

「いいなあ、ここには安らぎがある。くつろぎがある」

田所はビールを注いでくれるさきほどのホステスに名を訊いた。

「シカノです」

「うん、シカノさんか。日本的ないい名だ」

話がはずんだ。子供のおねしょはどうしたら治せるとか、水虫の原因とか、どこのメーカーの米研ぎ機がいいとか、ざっくばらんに喋り合った。シカノさんのもの言いは品がなかったが、いつも気取って言葉少ない妻に比べると何十倍も親しみがもてた。

彼は満足してバーを出た。気を許せる、日常会話の場がバーであった。彼は世間一般の男が誰でもするように家庭的なムードを味わいにバーへ行くのであった。

一方、バー「洗い髪」では……

ひどいタレ目のママがそっと手招きした。

「シカノさん、御苦労さま。もう美容講座は終わる時間でしょう。じゃ、また、あさってね」
「はい、ママ。お先に」
源氏名シカノさんは大急ぎで更衣室へはいった。
男たちはこんな素顔のどこがいいのだろう——シカノさんには、さっぱり分からない。
手早く、美女マスクをつける。〝美女ランス〟というカツラをかぶる。ずんどうに見せるためウエストに巻いていたバスタオルを引っ張り出す。長い、ピンクに輝く〝さし爪〟をつける。
十五分後、シカノさんはどこにもいなかった。鏡の中には、絶世の美女、田所銀河の妻がいた。きょうは全くヒヤッとしたわ。さあ急いで帰らなきゃ……一人呟くと、そっと裏口のドアを押した。

悪魔講

荒石人

「えぇ、もう五年も前になりますかなぁ。その頃の私の暮らしときたら、そりゃあ酷いものでした。あなたも覚えていらっしゃるでしょう、あの頃世間を賑わした〝ネズミ講〟という奴を。ハハ、ものの見事にそいつに引っ掛けられましてねぇ。おかげで色々とごたごたがあって会社を辞めるはめにもなりましたし、親戚の者や友人達にも大変な迷惑をかけましてねぇ。そう、借金を五百万程もつくりましたかなぁ、いやあ、参りましたよ。うまい話というものはそうそうないものですな。それでもう首をくくるしかない、そういう所まで追い詰められましてね。えぇ、冗談どころじゃありませんよ。実際、あの時あの方が私の前に現われてなけりゃ、そうしていましたね」
その男は感慨深げにそこまで話したところで一息いれた。男はシガレットケースを取り出して、俺に一服勧めると、煙草をくわえながらライターを取り出して、俺に、そして自分のに無造作に火をつけた。シガレットケースもライターも、見るからに高価そうな代物であった。俺などが一年間あくせく働いて稼いだ金くらいでは、そのどちらかひとつでさえ買えそうにもな

い。いや、その二品だけでなく、その男の身に付けているひとつひとつの物や彼の仕草の端々に現在のなみはずれた裕福さが見てとれた。

本当に俺もこの男の様に金持ちになれるというのだろうか。俺は男が一服し終って話を続けるのをいらいらしながら待った。

やがて男は、その奇妙な体験談を話し始めた。

――私がね、遺書を書いているちょうどその時でした。軽いノックの音が私の部屋に響いたんです。その頃は、私の部屋に来るのは、借金取りくらいのものでしてね。ボロアパートのドアなんかたたき壊さんばかりの勢いのノックばかりでしたから、少し変った印象を受けたんですね。それにもう死ぬ覚悟もできていましたから、借金取りだったとしても別に恐くはないし、いつものように居留守を使うこともないと思ってドアを開けたんです。するとそこに立っていたのは身なりの良い中年の紳士でした。

「Nさんですね。お初にお目に掛かります」

私は、予想外な人物の出現に気を飲まれたというか、

「あ、あの、どちら様で……!?」と言うのが精一杯でした。するとその紳士はにこやかな顔で言葉を続けまして、

「実は私、あなたを救いに来た者なんです。いえお隠しになっても分ります。あなたが人生に

絶望なさっていることも、現に今、遺書をお書きになっていることも存じあげております。でもねぇ、あなた。それはつまらない事ですよ。あなたさえその気になれば、すばらしい明日が開けることになっているんですからねぇ……」男は私の顔色を見ながら続けて言った。「いえなあに、簡単な事でございますよ。私共の会に入っていただきまして会員を増やすのに御協力いただければ、色々とあなたの望みが叶うように取り計らうことができるのでございますが」

その紳士が丁重な言葉づかいでそこまで話したとき、遺書のことなど言い当てられてその話に引き込まれかけていたのですが、急に腹が立ってきました。当然ですよねぇ、〝ネズミ講〟のおかげで自殺するはめに落ちいっていた私に、もう一度〝ネズミ講〟に入れと言うようなもんですからねぇ。ところが、私がそう思って言い返そうと思うと、紳士はあわてて言葉を続けました。

「あっ、あなた。私を新手の〝ネズミ講〟の者だなと思いましたね。冗談じゃありませんよ。第一、あなたは一文なし、どうして金を巻き上げたりできましょう。仕方がありませんな。こうなれば私の本当の姿をお見せしましょう」

そう言うと、紳士は忽ち悪魔の姿に変ってしまいました。私の想像にあわせたのか、本来がそういう姿だったのか、とにかく私にはひと目で悪魔と分かりました。

私が驚きの声をあげて、

「お、お前は悪魔だな！」と叫ぶと、

「はい、実はそうなんでございますよ」と相変らず丁重な言葉で悪魔は答えました。
「魂と引き換えに願いを叶えてやろうとでもいうのだろう。ふん、死んでからも苦しい目にあいたくなんかないぞ。さぁ、さっさと消えちまえ」私が感情的になってそう言いますと、悪魔はまた紳士の姿に戻って、やさしくこう言いました。
「いえいえ、別にそういうつもりで来た訳ではないんですよ。実はですね、今度、悪魔講という新しいシステムができましたので、そちらの方の勧誘に伺った次第でして。これに入会なされますとですね。まぁ一応、魂の方も担保として預からせていただきますけれど、あなたが子会員を三人集めて魂を手に入れていただいた時点で、そのうちのひとつがあなたの魂と交換されて、あなたの魂は自由ということになります。残りのひとつはあなたの親会員——この場合は私ということになります——に上納されまして、最後のひとつがあなたの願いの分ということになる訳ですな。もちろんそれ以上に会員を集めていただければ、あとは魂二つごとに、ひとつが上納、ひとつが願いという事になっておりますし、孫、ひ孫と会員が増える毎に上納として入ってくる魂に対しても同じ扱いになっておりますから、魂ひとつ当りの願いというものに限りがございますけれど、相当量の願いが叶うというもんでございますよ……」

その男は、奇妙な体験談を話し終えると、甘い言葉で俺に囁きかけた。
「どうです、あなたも入会なさりませんか?」

念力

豊田糧

念力だって? は、ばかばかしい。
そんなもの、あるわけないじゃないか。
たとえば、ここにあるトランプ五十二枚、この表を見ないで、赤札か黒札かを当てられると思うかい?
ひとつ私がやってみよう。
赤、黒、黒、赤、……
さてと、どのくらい当っていたかな?
え、全部はずれたって?
そうだろ、そんなものさ、君。

産声（うぶごえ）

新宅道子

オレは声を出さなかった。

看護婦が心配そうに言った。「おかしいわねェ、仮死状態ならわかるけど、ちゃんと呼吸もしてるのに産声をあげないなんて……」

オレは、その瞬間、「あっ、そうだ」と声を出してしまった。ギョッとする看護婦。

オレはあわてて、「オギャーオギャー！」と泣いてみせた。看護婦は、とたんにやわらかな顔つきになり、「空耳だったのネ」とつぶやいた。そばでまどろむ母親……

しかし、オレがドジったばっかりに、オレの生まれてくるまでの記憶が、そのまま残るハメになってしまった。

オレが死んだのは、七ヵ月前の事だ。

交通事故だった。愛する女房のおなかに子供ができたと知って、オレは有頂天だった。さっそく、おもちゃを買いに雨の中を出かけた。それがいけなかった。横断歩道で、おしゃぶりを

落とし、しゃがんだ所へダンプがつっこむという、個性派をモットーとするオレにしては、まるで、二流メロドラマのお涙ちょうだいおきまりコースってなぐあいの、この世とのお別れだった。

オレが天国へ行く途中、考えた事は、残された愛する女房と、まだ魚のような形であろうお腹の子供の事だった。

天国についた。

なんと、天国は目のまわるような忙しさだった。オレは、目の前をブンブン飛びまわっている天使をつかまえて聞いてみた。「どうなってるんだい、これは。天国っていうのは、こんなに忙しいもんなのかい。まるで、ミキサーの中みたいじゃないか」

天使は答えた、

「どうもこうもないですよ、この忙しい時に。そりゃあ、昔は、天国と言えば花の園で、ここにやって来た人は、のんびり天国を楽しんで、退屈した人や気が向いた人だけ、下界へもどって行けばよかったんだけどね」

「下界へもどる？」

「そうですよ、輪廻ですよ、リンネ！　ま、簡単に言えば、往復運動ですけどね。魂は決った数しかないんですから、下界での、ぼう大な事故死に加えて、人口増加、上下行ったり来たり

で、今じゃゆっくり休んでもらっちゃ間に合わないんですよ。世界中の胎児が魂の入るのを待ってるんですからね」

「世界中の胎児だって？　魂？」

「さあさ、早く受付へ行って、手続きをとって下さい」

オレは何がなんだかわからないまま、しぶしぶ、受付と書いてある所へ向った。

受付の女神は、横目でチラッとオレを見るなり、まるっきり事務的な声でこう言った。「こちらに用紙がありますから、誕生希望国、コネがあれば、それも記入して下さい」

「コネってなんですか」オレは聞いた。

「コネはコネです。最近は、世界情勢が複雑になってます。ですから、ここへ来られた方はみんな平和で豊かな国を希望されますが、子供は、世界のスミズミで誕生するわけですから、アメリカに生まれる人もあれば、アフリカの奥地、戦火のまっただ中で生まれる人だっているわけです。それで一応希望をとっていますが、希望者多数の場合は抽選で決めさせて頂きます」

（なにか、クイズの応募みたいだな）

「それで、コネクション、つまり、自分の知り合いの中に、妊娠している女性がいる人は、優先的に、そこへ入れてあげる事ができるのです。手続きが早く済みますからね」

（こんどは、まるで就職試験だな）

しかし、オレはその時、飛び上った。

女房は、妊娠していたんだ。——

「あります。あります。絶対のコネクションが！」オレはせき込んで言った。

「じゃあ、そちらの項目に、その方の住所、氏名、年齢をどうぞ」

オレの興奮をヨソに、女神は淡々と言った。「それが、済みましたら、隣のコーナーで、胎教がありますので、どうぞ」

オレが『胎教』と、大きく看板が出ているコーナーへ行くと、頭に光る「わっか」を付けた、白髭（しろひげ）のおじいさんが立っていた。

「わしが、このコーナーを担当しておる神様じゃ。さっき、おまえさんの書類へ目を通したが、おまえさんのカミさんは、もうじき出産じゃな。早いとこ胎教にとりかかるとしよう」

「ヘェー、天国というのは時がたつのが早いんですねェー。で、胎教と言うと」

「おまえさんは、もうすぐ下界へ降りて誕生するわけじゃから、そろそろ母親の胎内で、待機しておらねばならん。その間の教育が、胎教じゃ」

「はあ」

「おまえさん、赤ん坊が生まれ出た時、オギャーと泣くのを知っとるか」

「あったりまえでしょ。赤ん坊は、オギャーと泣くもんです」

神様は、ここでニヤリとした。

「それじゃあ、ここでクイズじゃ。赤ちゃんは、何故（なにゆえ）、オギャーとなーくか」

（ははあ、オレの教養をためす気だナ）
「もちろん知ってますよ。それは、赤ん坊が初めて呼吸をした証拠でしょ」
オレは、胸をはった。しかし――
「はーずれー」
すごく、うれしそうな神様の顔。
「まあ、おまえさんは下界の知識しかないから、仕方ない事じゃがな。赤ん坊が、オギャーと泣く、これは一種の催眠術でな。オギャーと泣いた瞬間、いままでの記憶は全て消える。とまあ、こう言うワケじゃ」
驚いた。オギャーってもんに、そんな重大な意味があったのか。
「おっ、もうそろそろ時間じゃ。これから、おまえさんに、その催眠術をかけるぞ。ハイッ、5ォ4ン3ン2ィいち」
オレは、突然、夢見心地になり、そのうちどこからともなく、声が聞こえて来た。
「さあ、おまえさんは今、とてもいい気持じゃ。おまえさんはな、いいかな、産まれた瞬間にオギャーと泣かねばならん。それをすれば今までの記憶は全くなくなり、すべては、いちからの、真新しい人生が待っておる。オギャーと言えば、おまえさんは、しあわせになれるのじゃ。いいか、わかったな。さあ、練習じゃ。オギャーと言ってみなされ、その時おまえさんは眠りから醒める。さあ、言うんじゃ、ハイ、5ォ4ン3ン2ィいち」

「オンギャー」
実にリアルな声が出せたと思った時――
オレは胎児となって暗やみの中にいた。

オレはそれからずっと、「オギャー」の練習をくり返した。（うまくやれないと事だからな。記憶が残ってしまって、女房をママとは、呼びにくいもんナー。えーっと、オレが女房に育ててもらうということは……、いや、しかし、その時はもう記憶は全くなくなっているわけだから、もう、すんなりママと……！）
その時、オレは不意打ちをくらった。
とうとう、産まれ出たのだ。しかし、よけいな事を考えていたので、何をどう言えばいいのか、すっかり忘れてしまっていた。
「おかしいわねェ、仮死状態ならわかるけど、ちゃんと呼吸もしてるのに産声をあげないなんて……」（産声……！）
「あっ、そうだ」オレは、うれしさのあまり思わず叫んでしまった。あわてて「オギャーオギャー」と泣いてみたが、オレには何の変化もなかった。（しょうがない。ま、せいぜい、女房ママにかわいがられて、女房ママに孝行することにしよう）オレは自分に言いきかせた。
産湯を使ったあと、オレは看護婦に抱かれ（なかなか悪くないなあ、この感触……）、女房

ママの待つ部屋へ、ゴ対面に行った。
「さあ、赤ちゃんですよ。ごゆっくり、親子の対面をして下さいね」
看護婦が、そう言って出て行ったあと、女房ママは、感きわまった声で言った。
「これが私の赤ちゃん？　なんてかわいいんでしょ」
オレ、のぞき込まれて、大満足。
しかし、その時のぞき込む女房ママの顔の横に、見知らぬ男の顔が、ヌッと現われた。
「この子が僕達の赤ん坊だ」
確かに、男はそう言った。
「ホント。あなたとの子供が出来たと知った時、どうしようかと思ったわ。だけど、主人たら単純に喜んじゃって……。その上、うまい具合に、事故に遭って死んでくれるし」
オレは耳を疑った。
「おまけに、生命保険金はガッポリ入ってくるし、だろ？」男が言った。
（いったい、いつの間に生命保険なんか、かけていやがったんだ）心の中で、オレは叫んだ。
「君が、生命保険をかけて、あの計画を持ちだした時、僕も勇気がいったよ。しかし、君と僕の幸せのためならって決心したんだ」
「そうよ、でも、あの人が事故にあってくれたおかげで、私達、手を汚さずに幸せになれるんだわ。あなた……愛してるわ」

二人は、オレの目の前で、ひっしと抱き合った。空しさの中で、オレはひとりでにつぶやいていた。
「なんてこった。なんてこった」
「あら、赤ちゃん、まるで何か言ってるみたい」
「きっと、僕たちに『おめでとう』って言ってるんだよ」

赤いリボンの果て

稲田尚

彼は忘れっぽい性格だった。普通の人間が覚えている、ちょっとした事の、半分の量を普通の人間が覚えている半分の時間、それだけ覚えるのもなかなか、といった所だろうか。

利点もある事はある。推理小説など、読んでから一定の時期たてば、トリックから犯人まで、きれいに忘れてしまうから、何度も楽しめる。かといって、そうそうすべてのものがいつまでも新鮮に感じられるわけではない。そういった現象は、むしろ芸術的感覚に起因するものらしい。

まあ、何といっても普通より忘れっぽいという事は、結局は損になる。憂えるべき特徴である。欠点なのだ。

彼は自覚していた。もちろん対策をたてた。いわく、指にひもを結ぶ。しかし、これは何の為のひもだったのだろう。それを覚えておく為のひもも必要になる。彼はこの方法を打ち切った。頭は悪くはなかったからである。いわく、手のひらに書き記しておく。だが、手を洗う事ができない。水で消えないペンで書く。今度は消えなさすぎる。次に覚えておかねばならない

事が書けないではないか。

ある時、彼が入社試験を受ける事になった。どうも試験日を忘れそうである。彼は失敗した二つの方法を組み合わせる事を、考えついた。試験日の事をメモしておく。指に赤いリボンを結ぶ。リボンは、

「メモを見ろ」

の、しるしである。こうして彼は、無事に入社試験を受け、二日後、一枚のハガキを受けとった。

「二次試験は二週間後の×月〇日」

すかさず彼は、リボンとメモである。所が、前回目立っていたリボンも、一日、二日とつけているうちに、じきに慣れてしまう。四日たって友人に、何だその赤いのはと指摘され、自分であみだしたそのシステムを忘れかけている事に気付く。

「同じ方法を二度もやったのがいけなかったのだ」

今度は手首に鈴をつけた。音がするたびに思い出す。だが今度は何と三日ともたなかった。小指のつけねまで、消えないインクにどっぷりとひたす。これも二日しかもたない。彼は人間の恐るべき適応能力を呪った。最初はちらちらとしていたものがいつのまにか、風景の中に溶けこんでいる。

当日。試験官である、その大企業の管理職および、重役数名は、廊下の異様な気配に気付い

た。ノックの音。開いたドアから、彼が入って来た。片手にギブス（緑色の包帯付き）をはめ、右目の回りを明るい黄色に塗り、首から点滅するライトをつるし、胸ポケットからはブザーの音、懐からは「白鳥の湖」、そして足首にくくりつけたアキカンはたがいにぶつかりあった為か、ぽこぽこになっていた。

さて、彼は見事、二次試験に受かったのである。当然だろう、一流企業には忘れねばならない事が山ほどあるのだから。

二階のあいつ

守屋みえこ

あいつは、もう帰っているだろうか。自らの手を血で汚しながら何の素振も見せずに平然と、いつものように坐っているのだろうか。家にたどり着くと、おびえきった小さな生き物のような妻が、あたふたと出迎えに駆けつけて来た。

「奴は帰っているのか!?」

「ええ、いつものとおり二階にいますわ。あなた、警察の呼び出しは何でしたの？」

「まだだ……」

「まあ、何てことでしょう」

妻は絶句したまま、表情ひとつ崩さなかった。深い絶望のあまり私達は、悲しむことや嘆くことを忘れてしまっているのだ。私は奴の隠れ家に向かった。ドアの前に立ち、ノックをする。内部からはやはり何の応答もない。ドアをかすかに開けて、中をのぞいて見た。奴はいた、いつものとおりこちらに背を向けて机の前に坐っている。衣服におびただしい赤黒い斑点が飛び散っている。私は声をかけることもせず扉を閉めた。階段の手摺（てすり）で妻がこちらを見上げ

ていた。
「今日は何人でしたの？」
「三人だよ……。後で着替えを持っていってやりなさい」
妻は突然、表情を変えた。
「いやよ。あなたが持って行って！」
妻は恐怖のために顔面が蒼白になった。そうなのだ、こちらがちょっとしたスキを見せたら最後、奴はいつ私達を襲って来るかわからないのだ。恐怖におののきながら、私達は殺人鬼を養って行かねばならないのだ。
夕食を取りながら、私達はひとつの空席をぼんやり眺めていた。
「警察では何と言っていますの？」
「いつものとおりさ。仕方ありませんねと言ったよ。アメリカでは数十人やった奴もいるそうだ。うちのあいつはまだましな方だ」
その時である。階段を静かに降りてくる足音が聞こえて来た。奴だ、奴が来る！　妻は私にじり寄り、私達は硬く手を握り合って奴を待ちうけた。奴は私達をじろっと一べつすると、黙って盛ってある食物に口をつけた。私達は息を殺し、奴の一挙手一投足を見守った。一秒一秒が私達には永続的につづく拷問のように思われた。奴は食べ終えると、テレビのスイッチを入れてしばらく眺めていたが、突如「キガエ」と抑揚のない声で言った。妻は飛び上がって居

間へ駆け込み衣服を整えて来た。それを無造作にもぎとると、奴はゆっくりと階段を昇ってゆく。と急に、妻はその場に泣き伏した。
「どうして、どうしてこんなことになったのよ！」
私には妻を慰める言葉ひとつなかった。何が私達の生活を根底から狂わせてしまったのか、私達に一体どんな誤ちがあったと言うのだろうか。
〝ボク、シンデシマウヨ〟私達大人は、毎日この一言におびえて暮らしている。彼らの口からこの一言が発せられたが最後、私達の未来はもうなくなってしまうのだ。数年前から、事は始まった。世界中の子供たちは何の前ぶれもなく次々と自殺して行ったのである。学校の成績が下がったから、友達とケンカしたから、親や教師に叱られたから、子供たちはあまりに単純な理由で次々と死んでいった。まるで流行病のように世界から若年人口が減少してしまった。国連は各国へ向けて児童の保護養成に関する条例を発布した。大人たちはまるで腫物にさわるように子供達に接して来た。しかしそれでも、彼らは自殺をやめなかった。大人の社会でも彼らを怖れるあまりに、新しい生命を産むことに難色を示す人々が多く、出産率は自然に低下の一方をたどっている。私達の未来には、老齢化した末期的社会があるのみであった。このような結果、生き残ったわずかの子供達は過分に社会から保護されすぎた。我が物顔にふるまい、私達大人を省りみなかった。彼らに怖いものは何もなかった。学校へも行かず、勉強もせず、じっと二階から私達を見下してはほくそえんでいた。彼らの共通した唯一の楽しみ、それは殺

人である。彼らは自分の楽しみのためには手段を選ばなかった。押えのきかない欲求の前には己れの肉親にさえ手をくだした。私達は彼らのたった一言を恐れるあまり処罰することができなかった。事実、彼らはそのとおり何のこだわりもなく死ねる人種だった。彼らはいっさいを許されていた。

私に何ができるだろう、あいつは許されているからこそ、自分の手を汚しているのだ。誰もあいつを罰せないのを知っているのだ。あいつ自身が地球の未来であることを振りかざしているのだ。しかし、あいつが生存しているからといって、私達には本当のミライがあるのか、果して人類には明日が来るというのか。

私はいま、静かに息を殺して奴の部屋の前に立っている。右手にきつく握ったナイフを振りあげて、次の瞬間自分の未来を、人類の明日を自らの手で終結してしまうために。

二階のあいつ、私のたった一人の息子よ、地球の滅亡はもうすぐはじまる。

不条理な夜にしどけなき猫

呉　芳景

その夜はまさしく夜という名に相応(ふさわ)しい夜で、それを昼だと思った人は、まさか何人もいなかったはずである。

トントン……、窓を叩く者が居た。それはそれで一向に構わないのだが、ここは地上十数メートル、マンションの七階なのだ。器用というだけでできる芸当ではない。

「どなたですか、こんなに遅く」

窓の外の者が答えた、

「……夜ですが……」

私の理性はねじまげられた。しかし、確かに窓の外には闇より他に何もないのだ。まんざら嘘ではないのかもしれない。

「その夜が、私に何の御用ですか」

「申し訳ありませんが、窓を開けて外を覗て下さいませんか」

最近の夜は口を利くようになったのか、うっかりできないな。とにかく私は、窓を開けて空

を見上げた。そして、そこに私が見たのは一匹の猫の顔であった。少し頭痛がした。そのうすらでかい顔は、パノラマばりに空一杯に拡がっていたし、その上、気に喰わない事にそいつはいやらしくも、ニッと笑っていたのである。

「まともな返事が聞けるとは思えないけれど、あれは何ですか」

夜はひどく慇懃な調子で答えてくれた。

「見た事がありませんか、これは猫という物です」

私は力任せに窓を閉めた。あれが猫くらい見ればわかるわい、何が悲しゅうて夜なんかに莫迦にされにゃあならんのだ。私はその上、カーテンも引いた。しかし、そんな事は何の妨げにもなり得なかったのだ。再び窓を叩く音がした。私はできる限り無視しようとしたが、無視しようとすればするほど、窓を叩く音は激しくなっていった。なにしろ夜はしつこいのだ。結局、根負けしてしまった。

「何だい」

「窓を開けて外を観て下さい」

「猫だろ、わかったよ、もういいよ」

「窓を開けて下さい」

「何故、俺が見なくちゃあならないんだ」

「……」

怖ろしい事に、理由などないのである。しかもその上、夜はしぶといのである。

「外を観て下さい」

またしても私は根負けしてしまった。そのせいで、私はもう一度頭痛に襲われなければならなかった。闇の中からニュッと猫の手が出てきたかと思うと、目の下にあてがい力を入れた。と同時に、口の中から舌が飛び出した。

「やれやれ……」

私はひどく情ない気分になって、深い溜め息を一つ吐いた。一体どうやったら、いつになったら猫は消えてくれるのだろう。猫は元の様に、ニッと笑っていた。その顔を見ていると、私の不安定な情緒はついに爆発した。

「さっさと消えちまえ！　ニッタラニッタラ笑いやがって、まったく仕末に負えぬ奴だ」

すると突然、猫は真面目な顔付きになって夜と相談を始めた。ひょっとしておこらせてしまったかな、変に弱気になってしまった。部屋の中に這入ってこられたらやばいなぁ、圧し潰されちまうぞ。おどおどしながら見ていると、相談は済んだようである。

「猫の云うには、これはニッという笑いでニッタラという笑いはこんなものじゃないそうです」

気づいていながら、私は夜と猫のペースに完全にはまってしまっていた。

「じゃあ一体どんなもんだいっ！」

私は叫んだ事に後悔した。しかしもう遅かったのだ。猫はサービス満点にも、まさにニッタ

ラと笑ってみせた。そのきたならしい歯ぐきまではっきりと見せてくれた。私は抵抗する気概を失くして、すっかりその状況に諦めてしまった。

「酒でも飲めば眠れるかな」

何の酔狂でこんな目に合わにゃあならんのだろう。答えの得られない疑問に頭脳を廻らしながらグラスにウイスキーを注ぐと、私は一息でそれを飲みほした。しかし運の悪い事は続くのである。一向に酔えそうな気配がなかった。二杯三杯、立て続けにグラスをあけたが状勢は変らない。窓の外には依然としてニッと笑った猫が居たし、酒によって眠気が催されるような事もなかった。それどころかますます頭が冴えてきたといっていい。それが五杯目を飲みほした時だ、パラパラと音がしたかと思うと、ザーと雨が降り出した。どうなる事やらと、その頃にはようやく虚ろになりかけた目で外を見ていると、やがて猫の顔が消え始めた。やっ、これで大丈夫かなと、私はグラスをテーブルに置いた。猫の顔は、まるで消しゴムで消すかの如くに、五分もすると、すっかり見えなくなった。私は嬉しくてたまらなかった。鎖から解き放たれたかつての奴隷のように、自由という言葉を改めて認識した。そして、ひどく大仰なものだったが、私は篠突く雨に精一杯感謝の念を表わした。

「雨よ、有史前より存在する雨よ、今の気持ちを完璧に表現しうる言葉がどこにあろう。しかしそれは少なくとも感謝なのだ。お前に対する感謝なのだ、ありがとう……」

「……いいえ、どういたしまして……」

ダンチ論争

久保建樹

「最近数多く発掘されるこの建物群の遺跡は、間違いなく当時の刑務所である。その理由は要約すれば、第一には、当時の都心から遠距離に建設されていることである。これは言うまでもなく治安上の理由からである。第二には、建物自体も、その内部の居住ブロックもまったく画一的である点をあげたい。これは今も同じだが、犯罪者のためには金をかけた施設は不要だからである。第三には、娯楽・文化・スポーツ施設が皆無であること、これも犯罪者を罰するための措置であることは自明の理である。第四には、『管理人』が置かれていたことが文献上判明している。これは説明不要であろう。最後には、これも当時の文献上うかがい知ることができるのだが、犯罪の激増に伴い各地に刑務所が必要であった点である」

「刑務所説は一応の定説として聞くべき点も多いが、不自然なところもあることを忘れてはならない。第一は、刑務所にしては一つの建物群の規模が大きすぎる点である。先年発掘されたセンリ遺跡には、全部独房としても数万人が収容されていたことになる。この建物群が当時の

大都市の周辺に集中的に発掘される点も、いくら都市犯罪が多かったと言っても、刑務所説では説明しきれない。それに当時の経済力から推測して、これだけの人間をただで食わせるのは困難であったと考えざるをえない。第二には、画一的な居住ブロックと言っても『無気味なほど』という形容をつけざるをえない状況にあり、そこに何か別の意図を考えさせるものがある。第三は、『管理人』については古代語の分析から犯罪者の監視をしていた者にしては語感が弱いと思われる。これはむしろ組織上の地位を示す語だと考えたい」

「それでは君はこの遺跡を何んだと考えるのか。新説があるなら提示したまえ」

「これは当時の宗教団体のキャンプであると考えざるをえない。つまり〝平等〟を教典とした或る宗教勢力が、当時の政治権力の迫害を受け、都をのがれ難民キャンプをいたる所に急いで設けたと考えている。画一性は平等主義のあらわれであり、種々の施設不足はこの教団が禁欲をもう一つのテーゼとしていたからである。文献上、当時の都市生活者に不安が高まり、宗教団体が大きな勢力を形成したことは充分説明できる」

「それはあまりに文学的な解釈だ」

「それでは、この建物群を『ニュータウン』と居住者が呼んでいた点をどう思うのか。新しい都の建設——これこそ宗教的迫害をのがれてきた者が必ず夢みる社会事業ではないか」

「いや受刑者が劣悪きわまる居住地を反対にそう呼ぶことはありうることだ。それでは居住者がすべて手にしていたテイキをどのように考えるのか。これこそ、受刑者の釈放の日を記した証明書以外には考えられないではないか」

「私はテイキは暗号を記した身分証明書だと考える。磁性テイキはキャンプ入口の自動検問所、を通過する際に使用されたものに違いない」

「まだある。この地の居住者を当時の人々はダンチ族と呼んでいたが、これは蔑称（べっしょう）だと考えられている」

「それは迫害の一つのあらわれにすぎない。当時、各地の旧来の居住者と新参のダンチ族との争いがかなり拮抗した形であった点をどう考えるのか。相手が受刑者であれば、力関係は一方的であったはずだ」

「遺跡から発掘、復元されたツーキン・フーケイと題される例の一枚の写真をどのように考えているのか。首に布きれをつけられた男達が一室にとじこめられ、あわれな顔をして外を見ている写真だ。これが受刑者達でなく何んであろう」

「我々はそれは宗教的迫害そのものだと思う。残酷にも当時の人々は、ダンチ族をつかまえると一室につめこめるだけつめこむという拷問を加えたに違いない」

「刑務所説と宗教難民キャンプ説が対立しているが、私の新説も簡単に述べたい。この遺跡は大規模病棟だと思う。我々の知らないある伝染病が当時大流行し、為政者が大あわてで患者隔離のため病棟建設を行ったに違いない。都心から遠く離れていること、建物の無計画な配置、画一性もそこに由来している。あのコンクリート群が周囲とまったく異質であった点や、ダンチ族という特有の呼称があったことも説明がつく。

患者の多くは軽症であったらしく、他への感染のおそれのなくなった者は、テイキという証明書を所持の上、居住地外で勤務することを許されていたに違いない。テイキの数字は疾患の軽重——症度を示すものと考える。

ツーキン・フーケイの写真は彼等が勤務する前に、つまり居住地以外に出る前に念のため消毒室で紫外線でも受けている有様と推測している」

「議長から突然の発言をお許し下さい。今決定的な資料が見つかったそうです。それは当時の日本に関する論文ですが、何んと皆さん。そうだ、あのような非人間的な建物に人間が本当に住んでいたのかどうかから議論すべきだったのです。

皆さん、あの建物群に住んでいたのは人間ではなく、『うさぎ』という家畜だったのです。あの不可思議な遺跡はうさぎ小屋だったのです」

主役(ヒーロー)

木村俊行

テレビのニュースアナウンサーが叫ぶ、
「たいへんです。只今、猟銃を持った男が四井銀行新宿支店に押し入りました。中では人質で二十人の人々がいるもようです」
俳優の渡大介は、そのニュースを夕食を食べながら聞いていた。
「まるで、オレの番組のようじゃねえか」と、ポツリと言った。
彼はTTVテレビの九時からの番組「大新宿」に、黒沢卓也の鬼刑事役でレギュラー出演している。彼の番組は大きなアクションが呼びもので、たいへんな視聴率を上げている。その中の黒沢卓也刑事は、刑事チームのリーダーとしてカッコイイ役だ。たとえば今までの番組の中で、一人だけで暴力団の中に飛びこんで行ったり、拳銃を持った男の前へ、素手で出て行ったり……。もちろんドラマだからカッコよく解決する。
テレビはまだ、銀行強盗のニュースが続いている。
「機動隊員、約五十名が銀行の周りを完全に包囲しています。これなら犯人の逮捕も、時間の

問題でしょう」
大介は、次の日曜日、十時ごろ目がさめた。彼はいつもの習慣で起きるとすぐ、テレビのスイッチを入れた。すると昨晩のアナウンサーが目の下を黒くし、声をからし喋っていた。
「犯人の名前がわかりました。犯人の名前は桜川宏という二十三歳の男です。しかし銀行の様子は昨夜と同じで一向に変りません。では、コマーシャルを」
パチン。大介は、まだ仕事が続いているみたいで、テレビを消してしまった。今日は久しぶりの休暇で、何をしようかと考えている所を、疲れるようなニュースで、大介は少々腹が立った。
「チェッ。早く解決してくれないか、そうしないとオレは気が変になってしまいそうだ」
彼の俳優の良さ、人気の秘訣は、役の人物になりきってしまう自己催眠を、習得していたためであった。そのために、悔しい時には真の悔しさ、つらい時には真のつらさを、からだに表すことができた。そしてその効果は、視聴者まで伝わってくるのであった。
大介は、家に居ると気が変になってしまいそうなので、外にぶらりと出て行った。しかし、そのままの姿で出るとすぐにファンの人々に取り囲まれてしまうので、サングラスと、スポーツ刈りの頭に長髪のかつらをかぶって外出した。
町に出て、朝飯兼昼飯ということで、大衆食堂に入ってみた。大介は、高級レストランが主なので、大衆食堂には入ったことがなかった。

食堂の中は、ランチタイムとあって、ワイワイガヤガヤとして、とても活気があった。しかし活気がありすぎて、そのワイワイガヤガヤはむしろ騒音に近かった。彼は、トンカツ定食を注文して、下の世界を味わった。すると、あるトラックの運転手らしき男が、パチリとテレビのスイッチを入れた。そのとたん、その騒音は、ピタリと止ってしまった。そんな中で大介は、突然立ちすくんでしまった。目はうつろになり、ボーッと上を見つめているだけだった。実は、大介の自己催眠のキーワードは、連続音が突然とぎれるものだった。だから普段は自分でワーと叫んでフッと止めて行なっていた。こんなキーワードを選んだのは、都会で連続音がとぎれることなど、まずないという考えからであった。が、今、ガヤガヤがとぎれたために、大介はどんな暗示でも受け入れる態勢になってしまった。

さっきのアナウンサーが叫んでいた、

「事件発生からすでに十二時間がすぎました。しかし、まだ犯人の動きはわかりません。あっ！　今、今、今、銃声が聞こえました。どうしたのでしょう。私どもにもわかりません。では、その事態がわかりしだいお伝えいたします」

トラックの運転手らしい男たちが、「早く解決してくれねーかなあ」「犯人は、いったいどんなヤツなんだ」というような会話で、もちきりになった。そんな中で大介の目は燃えていた。

「そうだ！　この事件を解決できるのはオレしかいない。みんな、オレの力を必要としているのだ。そうなんだ。急げ、急ぐんだ、黒沢刑事！」

彼はそう思って、すばやく食堂を出て、タクシーで、例の四井銀行に急いだ。タクシーの中でも、事件のニュースがかかっており、大介は、タクシーの運転手に、急げ、急げとせきたてた。

三十分後、大介を乗せたタクシーは、四井銀行の近くについた。大介は役で使っている警察手帳を見せた。運転者は「なあんだ、刑事か」と、思った。

大介、いや、黒沢卓也刑事は走った。かつらとサングラスは捨てた。燃えた瞳は、あの「大新宿」の第二十五話、「銀行人質事件」の表情そのものだった。彼は走った。周囲で、「あっ、あれは渡大介じゃない」とかいう声が聞かれたが、彼の耳には、そんなものはいっさい入らなかった。彼は上着を脱ぎ捨てた。彼の肩にはピストルが下っていた。彼は、外出するとき必ず、緊張感を持つためと、役を意識してか、モデルガンを携帯していたのであった。

彼は人ごみを押し分けて、ヤジ馬の一番前まで来た。しかし周りの人々はそれが渡大介だと気づいても、話しかけたり、サインを要求したりはしなかった。彼は黒沢刑事そのものであり、もはや渡大介ではなくなっていたのであった。

彼は、囲いのロープを乗り越えて、ゆっくりと銀行の入り口まで歩いて行った。誰も止めようとはしない。なぜなら、それは、いつも事件をかっこよく解決する信頼のある人だったからである。黒沢刑事は、モデルガンを捨て、叫んだ。

「オイ、桜川！　人質をみんな解放しろ。オレは素手だ。二十人の替りにオレが人質になろう

じゃないか！」

周りのヤジ馬、機動隊、警官、報道陣そして、テレビを見ている日本中の人々は「大新宿」の第二十五話を思い浮べた。――「この次、黒沢刑事は身をかがめて犯人に突進して、格闘し、犯人に肩を打たれる。しかしそれにひるまず、犯人を殴り、手錠をかける。……ああ、これでこの事件は解決だ。よかった」――と、皆思った。犯人さえこう思ったのだった。しかし犯人だけが現実にもどることができた。なぜなら彼は、冷静さを失い、第二十五話もあまり覚えていなかったからだ。

黒沢刑事が入口二十メートル前まで来て突進した時、犯人は、引き金をそっと引いた。その瞬間、黒沢刑事のからだに数十の鉛の弾がめりこんだ。彼はそのまま五メートル後ろへ飛んで行き、頭から地面に落ちた。空中に鮮血が弧を描いた。そして黒沢刑事はウ、ウ、とうめいて、最後に「ゆ、ゆ、由紀さん……」と言って息絶えた。由紀というのは第二十三話から出てきた、ドラマ上で唯一の黒沢刑事の恋人の名であった。

周囲の人々、機動隊、警官、テレビの視聴者は、この事態に涙を流した。そして、銀行の周りの人々は、去って行き、テレビの視聴者はスイッチを消した。満足そうに……。だがBGMは流れなかった。

――ポツンと残された犯人も、どこかへ消え、最後に残った一つの死体だけが、いつまでも、ヒーローだった。

移り気な男

石上信治

山田文雄は、内気でおとなしい高校三年生であった。彼の家のとなりに、小野令子というものすごい美人の女子高生が住んでいた。文雄が、初めて令子の姿を見たのは、令子が引越ししてきたときである。彼が中学一年生のときであった。そのとき以来彼は、令子のとりこになってしまった。俗にいう一目ぼれというやつだ。だけど文雄は、いままでただの一度も令子とことばを交わしたことはなかった。というのも文雄は、きわめて気が弱く、令子が目の前にいるときでさえ声をかけることができなかったからであった。それでも文雄は、令子と話し合ってみたいという望みを持っていた。しかし、いざ話しかけようとして彼女に近づくと、彼の口と舌は、コンクリートで固められてしまったかのように、自分の意志に逆らって動かなくなってしまうのだった。だから文雄は、自分の恋心を令子を遠くから見つめることによってしか満足させられなかった。そんな文雄にとって、とてもうらやましいものが一つあった。それは、令子のペットの白いペルシャ猫であった。奴は、いつも彼女にかわいがられ、ときどき彼女の豊かな胸に抱かれて満足そうに目を細めていた。そんな奴に文雄は、ジェラシーさえ感じてい

た。

それは、あるうららかな春の夜のことであった。そのとき文雄は、自分の部屋で勉強をしていた。家の外では野良猫の通称ミケが、陽気に誘われて雄を求めるラブコールに余念がなかった。文雄は、勉強が一段落ついたので風呂に入ろうと、イスから立ち上がって入口のドアの方を振りかえった。すると彼の目に予期せぬものが飛びこんできた。なんとあの白いペルシャ猫が、ドアの前に座っているではないか。奴は、文雄の驚いた顔を見ると、ニヤリと笑った。その次の瞬間信じられぬことがおこった。奴が、人間のことばをしゃべったのだ。

「あんた、オレのことをうらやましいと思っているようだね」

「……」

文雄は、びっくりして声が出なかった。

「そんなにびっくりすることはあるまい。オレは、人間社会で十五年も生きてきたのだから、人間のことばを話すようになっても当然だと思うがね」

文雄は、自分の目の前でおこっていることが信じられず、ほっぺたを力まかせにつねってみた。すると、やはり痛かった。

「ぼっぼ、ぼくに、な、なんの用だ」

文雄は、震えながらも、やっとの思いで声を出した。

「オレは、一度でいいから人間になってみたかった。そして、あんたは、令子様の胸に抱かれ

てみたいと思っている。そこで、オレは、思いついたのさ。一日だけあんたとオレと体を、交換しようとね」

「どうして一日だけなんだ」

「一日が、すぎてしまうと、もう元の体に戻ることができなくなってしまうのだ。オレだって一生人間なんかでいたくないからね」

文雄は、令子の大きなボインを思い浮かべた。彼は、どうしてもそれに触れてみたかった。

「一日だけなら、いいだろう。やってくれ」

文雄が、そう言ったとたん一瞬にして二人のたましいが、入れかわった。文雄になった奴が、窓から外に出ていこうとする猫になった文雄に、くどいように念を押した。

「必らず二十四時間以内にここに帰ってこいよ。さもないと一生元の体には、もどれなくなってしまうんだぞ」

そのあくる夜、文雄の部屋で奴は、じりじりしながら文雄の帰りを待っていた。そのころ文雄は、帰ることなどすっかり忘れて愛するものと楽しい時をエンジョイしていた。と言っても、彼の相手は、令子ではなかった。今の彼は、令子にはなんの興味もなかった。文雄が、今狂おしいほどに愛しているのは、ほかならぬあの野良猫のミケであった。

見知らぬあなた

森　文夫

朝もやの濃くたちこめる公園をひとまわりした老人は、湖のふちにすえてある白いベンチに腰をおろした。

ふかい木立ちを、ゆっくりと朝もやがわたってゆく。

老人は厚手のカーデガンのポケットからワインの小壜とグラスをとり出し、湖面をながめながら、静かに飲みはじめた。それは、彼のかわらない日課のようなものだった。

「すわってもよろしいですか」

ふいの声に老人はふりむいた。若い男が立っている。

「どうぞ」と、老人は腰をずらせた。そして、すこしとまどいながら、つけ加えた。

「よろしかったら、ひとついかがですか」

「これはどうも。ここにすわらせてもらえるうえに、こんな上等のワインにありつけるなんて」

若者の精悍にひきしまった顔が、ほころんだ。

老人は小壜で、若者はグラスで、二人は深紅の光をたたえた同じ飲み物を、おもいおもいに口にふくんだ。

湖面には、たくさんの落葉がただよっていた。

「わたしぐらいの年になりますとね。ああ、いいでしょうか、こんな話をして」

「どうぞ」

「妙に人が恋しくなるんですよ。そのくせ、人とつき合うのが、もうわずらわしいという気持もありまして。妙なものです」

「若くとも、そんな気になるときがあるものですよ。とくに秋には」

「そうですか。それでつい、見知らぬあなたに酒をすすめてしまった」

「わたしも、つい、隣にすわらせてもらった。見知らぬあなたの」

二人は、ひくい声でわらった。

「不思議なものです。長いこと生活をともにしてきた者どうしが憎しみ合うこともあれば、見知らぬ者どうしが、こんなふうに同じ酒を飲みかわすこともある」

「見知らぬ者どうし、か」

若者はおうむがえしに言って、手の中のワインをみつめた。

「ええ。おや、ずい分ふとい指だ。腕もすごい。体育の先生というところかな」

「いや。でも、そんなふうに、この男は何者だろうとさぐるのも仕事のうちです」

「ほう。すると警察官」
「私立探偵です」
「そうですか。それじゃ、いろいろおもしろい依頼があるでしょう。それとも案外、つまらない事件ばかりかな」
「ええ、たいていはね。でも、今あつかっている事件は、ひどく奇妙なんです」
「奇妙な、と言いますと」
「ある男の一日の行動を見張り、報告してくれと言うのです。金は依頼のあったその日のうちに振り込まれました。そして、毎日報告する室を指定してくるのです。同じホテルですが、室は毎日ちがう。その室にいると同じホテルのどこか別の室から電話がかかってきて、そこで報告するわけです。翌日、金が振り込まれる。それが、もう一ヵ月もつづいています」
「すると、つまり依頼者は、あなたと顔をあわせたくないわけだ」
「たぶん、そうなのでしょう」
「しかし、そういう依頼者も……」
「そこを奇妙だとは思いません。調べるように言われた男の日常が規則的すぎるのですよ。午前中は書斎にこもり、午後は図書館へいき、途中のレストランで食事をして帰宅する。ただ、それだけです。それをくりかえす。毎日毎日。一人者の金持ですけどね」
「学者ですか」

「アマチュアの文化人類学者らしい。図書館で読む本が、その関係ばかりですよ」
「規則的な生活をおくることが、そんなに奇妙でしょうか」
「規則的すぎます。まるで人間じゃないみたいだ」
老人の口もとが、かすかにひきつった。
「それに何が奇妙かと言って、そんな男の日常をみはらせて、報告させ、一ヵ月も大金を払いつづけるという事ですよ」
「なる程。なる程、奇妙だ」
「それで今度は依頼者をしらべました。フロントに金をつかませ、わたしの室をとった男が入っていた室を、出ていった後、すぐに見せてもらいました」
「で、わかりましたか」
「ええ、すぐに。深紅のワインが飲みのこしてありました。ああ、言いわすれましたが、調べるように言われた男は、毎朝、早く、公園で深紅のワインを飲むのが習慣なんですよ」
周囲の空気がこわばった。老人は、湖をみつめたまま、体を動かさなかった。
白い朝もやが、緊張した時の流れを示すかのように、ゆっくりと高い樹々の間をながれてゆく。
湖面が静かにざわめいた。しかし、老人を凝視する若い探偵は気づかなかった。
「……おもしろい話だ」

「孤独なあなたにとっては、ね」
「わたしが、わたし自身の調査を依頼した、と言いたいわけですね、君は」
「ええ」
若者は短かく言い放った。その顔は、こみあげる怒りに紅潮していた。
「いったい、何故」
老人は、ぞっとするような薄笑いをうかべた。
「孤独にふかく蝕ばまれると、人はそんな事を思いつくのかも知れない。金はある、好きな事には誰にもじゃまされず打ち込める。でも、誰もあなたを見てやしない。世界中の誰ひとりも、あなたに関心をもたない。あなたは金持らしく金で解決しようとした。きっと、このベンチでワインを飲みながら、ふと思いついたのでしょう」
「金持の気まぐれな遊び……」
「そのとおり。すこし病的なね。だが、俺はたくさんだ、そんな金持老人の遊びにつき合わされるのはごめんだ。浮気の調査のほうが、ずっとましさ。たった今で、調査は打ち切らせていただく。それを言いに来た」
若者は、腹だたしそうに、老人の足もとにパッとつばをはいた。
「しかし、あなた」
「それから、日本中の仲間に言うさ、バカな遊びにまきこまれないようにってね」

若者は歩き出そうとして、息をのんだ。
「それは、困る。困る、実に困る」
老人は、ぶつぶつと呟やきはじめた。
湖水からツタのような触手がむすうにのびてきており、地を這い、つぎつぎに彼の足にからみついた。若者は声すら出なかった。
「困る。そんな事をされたら、ほんとうに困る」
蒼白の若者は、おそろしい力で地面に倒された。身体じゅうにからみついた緑色の触手はズルズルと、男をひきずりはじめた。
「静かにひとりずつ侵略したいのだよ。〈われわれ〉は。人間に気づかれないように人間と同じ生活をおくりながら静かに、この地球を無傷のまま、手にしたいのだ」
湖水が足もとにせまってきた。地にたてられた若者の指は、十本の長い筋を砂地にひきつづけるだけだった。
「だけどそんなふうにやっていけるかどうか。形は似せたが、おかしい所はないかどうか、それで人間の君に人間の目でわたしを調査してもらったわけだ」
足を冷たい水が、あらいはじめた。
「君さえいなければ、〈われわれ〉は自信をもって好いわけだ。毎日、君からうけた報告によれば、ね」

ほとんど水中に没しかけた若者に、老人はやさしく語りかけた。
「最後の一人になった時の恐怖にくらべれば、ずっとマシさ」
水面に最後まで出ていた手は、むなしく空をつかみ、幾重もの波紋を広げ、水底に消えていった。
朝もやを赤くそめて、陽がのぼりはじめた。湖は静まりかえっていた。
陽を映して輝やくグラスをひろいあげ、老人は小壜のワインをうつした。
湖面に光の帯を走らせながらのぼる陽をながめながら、老人はグラスをかたむけた。
いつもと何のかわりもない、老人の一日が始まった。

公園で……

関谷　碧

ある夕暮れ。
公園の片隅で少年が一人泣いていた。
そこへ学校帰りの女学生が通り、少年のそばへ駆けよって彼を抱きしめ一緒になって泣き始めた。
しばらくすると買物をすませて帰る途中の少年の母親が、泣いている二人の姿に胸を打たれて二人に駆けより一緒に泣きだした。
またしばらくすると、今度は会社帰りの少年の父親が公園を通りがかり、抱きあって泣いている三人の姿に感激して、自分もその輪の中へ入っていった。
そしてしばらくすると、すすり泣く女学生と少年の父親はよりそって夕闇の中へ消えていった。
残された少年と母親は、薄暗い公園でいつまでもいつまでも泣いていた。

いまに分る

成松良一

いつも立寄るたばこ屋がある。といっても一週間ばかり前からである。街角に新しいたばこ屋ができたと友人から聞いたからであるが、ただそれだけなら別にどうということはない。だがそこには驚くほどの美人がいる、というので、つい行ってみる気になった。

きちんと座っているその美人は、二十五歳前後で、私を満足させるに充分すぎるほど美しい女であった。私は彼女が独身であると直感した。肌の初々しさや恥じらいを秘めた視線に熟すまえの女を見た気がした。

私はその女に、当然のことながら夢中になった。三十を過ぎた私は今だに独りであった。結婚しない理由はこれといってない。ただその気になる相手がいなかっただけである。

私は、この女こそ探し求めた女だと思った。そう思いはじめると、夢にまで見るようになった。何か誘いの言葉をかけようと思いながら今日まできてしまった。

今日こそは何が何でも彼女を口説こう、そう決心した私は、夕方の店が閉まる前を狙って、勇ましくでかけた。今まで一寸した世間話はしたことがある。そのたびに私は輝くような彼女の顔を数秒と見られなかった。あまりに美しすぎたからである。

「やあ……」

私は慄えそうになる言葉を呑み込むように深呼吸してから声をかけた。

「いつものですね」

彼女はいつも優しく笑いかけてくる。私はその場でゆっくりとたばこを一本抜いて口にくわえた。

「どうぞ」

彼女が私にマッチを手渡した。その手が触れた。

「ありがとう。ところで店が終ってから逢ってくれませんか」

意外と落着いて喋れたことに、私は自信を持った。

「……」

が、彼女は急にうつむいた。

「いえ、今日じゃなくてもいいんです。それとも結婚してるのですか」

「いいえ、独りですわ」

眼が一瞬、光った、ように私は思った。

「よかった……」
思わず気持が言葉となって口からでた。
「でも……、やはりお逢いできませんわ」
「なぜです」
「いまに分りますわ」
「えっ」
私は、おもわず聞きかえしていた。
「もう閉めますから」
彼女は頭を下げた。私も慌てて頭を下げると、仕方なしに歩き始めた。
その時である、待っていたかのように後ろから声をかけられた。
「どういうつもりか知らないが、妹をからかっては困る」
私と同じ年頃の男であった。やつれたというより風化している感じが、その顔にあった。
「別にからかったりはしてない。あなたが兄さんなら聞いてほしい。私はあなたの妹さんに夢中になったようだから」
「遊びじゃないだろうな」
「もちろんです。でも断られました」
「そうだろう、悪いことはいわん。諦めるんだな」

「なぜです。私にはよく分らない。彼女が言った、いまに分るという意味が何なのか」
「他人には関係のないことだ。とにかく、これ以上妹に近づかないでくれ」
それだけ言うと男は私に背を向けた。
私は何かあると思った。彼女の態度といい、今の男がすぐに出てきたということが、妙に私の心にひっかかった。
「待って下さい」
私は、男を追っていた。
「是非とも私の気持を聞いて下さい。ここではなんですから」
私は傍の喫茶店に男を誘った。
私はそこで、彼女と真剣に交際したい旨を精一杯に表現した。さらに、できれば結婚まで考えていると言った。
「妹は君と交際もしなければ結婚もしない」
「決った人がいるのですか」
「いや、いない」
「じゃ、何故」
私はコーヒーに口をつけながら男の顔色を見た。その表情には動きがなかった。
「私ではいかんということですか」

「いや、君はいい人らしい。妹も好意を持ってるようだから……」
「じゃ、何故」
私は同じ質問を繰返していた。何があるというのだろう、伝染病を持ってるとでもいうのだろうか。
「教えて下さい。何があるのか知りませんが私は彼女を幸せにして見せます。初めて逢った時に、私が探していた伴侶は彼女だと感じたのです。私がいやでなく、彼女も好意を持ってるのなら交際させて下さい」
私は夢中であった。
「分りました。でもここだけの話しにしといて下さいよ。又、話しを聞いたあとで、君の気持が変わったとしてもごく当然のことなので、責任を感じる必要はありません」
「分りました」
私は手が汗ばむほど緊張していた。

五年ほど前、彼女は妻子ある男と恋をしていた。彼女は妊娠した。男は堕胎を強いた。それだけでも彼女はショックであった。ところが同じ時期に男の妻も妊娠しており、奥さんもおろすならと彼女は言ったが、結局男の妻だけが産むことになった。男は仕方ないと言ったが、彼女にとってこれ以上の屈辱はなかった。彼女は衝動的に列車に飛び込んだ。発見が早く一命は

とりとめたが、代わりに両足を切断してしまった。

「……」
私は顔をあげることができなかった。それに何と言ってよいか言葉さえ見つからなかった。
実際、私は動顚(どうてん)していた。
「そういうわけなんですよ」
男はゆっくりとたばこをくゆらせた。その煙りが私と男の空間に拡がった。
「かわいそうに……」
私はそう言って大きく息を吐いた。
「でも私の気持は変わりません。明日もう一度逢って下さい」
「いや、あなたが無理をして犠牲になる必要はありません。どうか忘れて下さい。このままそっとしておいて欲しいのです。私達のためにも」
私は一礼して席を立った。がふと気になって尋ねた。
「ところで、相手の男は今どうしてるのですかね」
にわかに、男の顔に複雑な翳(かげ)りが走った。
「今、彼女の兄として一緒に暮らしてます。亭主にはしてもらえませんので……」
「えっ」

一瞬、殴られたような痛みを胸に感じた。
〈いまに分りますわ〉
女の寂しそうな眼が、急に思いだされた。

食料危機

杉山昌善

「ハラガヘッタ」
今世紀最大の発明《動物語翻訳機》が伝えて来た第一声であった。
一見初期の蓄音機を思わせる、大きなラッパの付いたこの機械の前で、仔牛が「モウ」と鳴いたその翻訳である。
そして、この世界的な出来事は明日の朝刊の第一面を飾ることは、まず、まちがいなかった。
ＣＩＡより資金援助がされていると噂されている「動物語研究所」が、十五年の歳月を費してこのほど完成したのが、《動物語翻訳機―Ｘ１》である。
急きょ、記者会見の場となったこの研究所のロビーには、ＡＰ・ＵＰＩ・ロイター・ＡＦＰ・タスの記者をはじめ、世界中の新聞・雑誌・テレビ・ラジオの取材陣が、この世紀の発明を報道するために、押合い、へし合いを展開していた。
「皆さんお静かに」

研究所長のベルヌ博士が、記者会見の開催をおもむろに告げ、まるで照明弾を爆発させたようなフラッシュライトを浴びながら、偉大なる発明《動物語翻訳機》は、人々の前にその姿を現わしたのである。

「お待たせいたしました。百聞は一見にしかず、皆さんの目の前で、実験をごらんに入れます」

ベルヌ博士は仔牛の頭をなぜながら、翻訳機のスウィッチを入れようとした。

「ちょっと待ってください」

記者の一人が発言を求めた。

「その機械が本当に動物の意志を伝えるという証拠は、どう証明なさるんですか。牛がモウと鳴いたからと言ってそれが、確かに〝ハラガヘッタ〟だと、どう確認できるんですか？」

「今、それを証明しようとしているのではないですか。君は、せっかちな人だ。どうやら東洋の人らしいが、日本人かね」

博士は皮肉いっぱいの視線を彼に投げつけると、人差し指をボタンに近づけた。

「さあ、仔牛ちゃん、君から人類へのメッセージをどうぞ」

すると仔牛は、つぶらな瞳を記者団に向けて「モウ・モウ・モウ・モウ～」と語り出したのである。

牛の鳴き声に合わせて、《X1》からは、テレタイプの様に文字がハジキ出されて来た。

「博士、彼、いや彼女かな、は何と言っておるのですか？」

《X1》から文字のロールテープを引きちぎると博士は声高に読み上げた。

「タベナイデクダサイ、タベナイデクダサイ、タベナイデクダサイ」

「何だこりゃ？」

そして、また、モウ、モウ、モウが始まった。

「ワタシノママモ、ニンゲンニタベラレタ。ワタシノパパモ、タベラレタ、ワタシノアニモ、タベラレタ、アネモ、タベラレタ、オジモ、タベラレタ、オバモ、タベラレタ。

ニンゲンノエサニナルノハイヤダ、コロサレルノハイヤダ、ニンゲンハ、ナントイウレイコクナ、アイノナイ、ドウブツナノダ。

コロサレタクナイ、コロサレタクナイ」

当惑する研究所員や博士達を置きざりにして《タベナイデクダサイ》のニュースは、あっという間に世界中を走り抜けた。

そして、世界中の動物愛護団体（インドは別であるが）が、いっせいに牛を食べる事に反対の、のろしを上げたのである。

それからも《動物語翻訳機―X1》は、羊のメッセージを、豚の泣事を、馬の願望を、鹿の言い分を、にわとり・七面鳥・ホロホロ鳥・あひる・鴨・雀の発言を次から次に人類へ伝え続

けた。
「ワタシヲタベナイデクダサイ」
「ワタシヲタベナイデクダサイ」と。
そのころ、KGBから資金援助されているという噂の「植物意志伝達器官研究所」では、小麦と人類の対話に遂に成功したのである。
そして、所長のドイル博士が読んだ小麦からのメッセージとは、
「ワタシヲタベナイデクダサイ」

頭の上に光る電球

山下成司

「で、具合はどうだい?」俺の顔を覗き込むようにして、友人Tは言った。
「芳しくない。ひどくなる一方だ」
彼の頭の上に出現した白い雲のような形のふきだしを見ながら俺は答えた。
ふきだし? そう、例の漫画になんか出てくるやつ、そいつに、で、具合はどうだい? と書かれている訳で、Tが何か喋る度に、それが彼の頭上で浮んでは消え、浮んでは消えするという訳だ。
「近頃は音という音は一切、聞こえなくなった。総て文字として俺の眼に飛び込んでくる。それればかりか、風景や人物の動きがコマ送りのように見え始めた。眼がチカチカしてしようがない」
「やっぱり医者に診てもらった方がいい」
心配そうに、それでも不可解な表情は隠さずにTが俺に言う。
「有難う。そうするよ」俺は力なく笑ってみせ、飲みかけのコーヒーを啜り、カップを皿の上

に置いた。カチャという文字がカップと皿の隙間から飛び出した。

昼時で、その喫茶店は混んでおり、あちらこちらで白い雲状のふきだしが所狭しとひしめき合っていた。

ギイという文字が椅子と床の間から飛び出してくるのを見ながら、俺は立ちあがり、笑みが顔に貼り着いたようになっているレジの女の子に金を払い、レジスターがガチャガチャという文字を吐き出しているのをチラッと見、ありがとうございましたと書かれたふきだしが女の子の頭上に現われるのを確かめながら、俺達はその喫茶店を出た。

「早く良くなるといいな」Tはそう言い、それから〈……〉と記されたふきだしを現わし、考え深げな顔をした。俺達はそこで別れた。

街は静かだった。道路の上はあらゆる形の文字で氾濫していた。ブーッブーッだの、キキーッだの、ヴルルンヴルルンだの、そして道行く人はコマ送りのように歩き——時にはまったく静止して——、駆けてゆく人は一目でわかる——彼には何本も足があり時には腰から下が渦巻状の輪になっている事もある——。道路工事の人夫達は顔から水玉を飛び出させつつシャベルをふるい、交通整理の警官は腕の周囲に何本か線を出現させ、彼の腕が右に左に動いているかのように見せている。街角の電気屋の店頭に置かれたステレオからはたくさんの四分音符や八分音符が路上にばらまかれている。

都会にしては珍しく青空の眩しい日で、風が細い線状に描かれ、そのうち何本かが俺の髪を

そよがせる。太陽はその周囲に放射状の線が見え、その横に〈サンサン〉と書かれているのを見つけるに至って、俺は病院に行く事を決意した。

「平たく言えば、漫画で描かれる情景が具体化して見えると、そう仰しゃるわけですな」

例によって医者の頭上のふきだしにそう書かれてあるのを見て俺は言った。

「やはり働き過ぎが原因でしょうか。漫画を描くのが私の仕事ですから、漫画の事ばかり考えているんで……」

「まあ、そういう事になりますかな。とにかく充分、休養して、一切仕事の事は考えず、むろん漫画を読んではなりません。当分の間」

俺は医者の指示に従う事にした。俺の家で安静にしていてもいいのだが、それだとどうしても仕事が気になってしまうので、症状が快方に向うまで俺は入院する事に決めた。

一ヵ月程、俺は医者の言いつけを守り、仕事の事は一切考えないように努め、安静にしていた。毎日検診に来る看護婦の頭上から、例のふきだしが消え、言葉として俺の耳に飛び込んで来るようになるには、さほど苦労せずに済んだ。病室のベッドの傍に置いてあるラジオからは、もう音符はこぼれて来ず、音楽として耳に入ってくるようになった。コマ送りだった人や物の動きも、アニメーション並になり、それから現実の動きと同じになった。そろそろ退院しても良さそうだと思っていた頃、友人Tが見舞に来た。

「だいぶ、いいようだな」Tが嬉しそうに俺に言う。

「ああ、もう大丈夫だ」
「ところで、もう描けるか？　おまえに穴をあけられて、実のところ弱っている」
Tは俺の友人であると同時に俺が連載していた漫画雑誌の編集長でもあるのだ。
仕事の事を考えると、又病気が再発するかとも思えたが、その徴候はない。
「そうだな、何か新しい企画でやってみるか」
「そいつはいい。新しい企画、新しい企画……」
Tはしばらく腕組みし、考えにふけっていたが、やおらポンと手の平を打ち、勢い込んで俺に言った。
「SF物はどうだ。おまえは結構その辺に詳しいし、その辺の読者層も広がっている。やるなら本格的なやつがいい。どうだい、おまえとしては……、どうしたんだ顔色が急に悪くなったぞ……」
俺は苦々しい気持ちで言った。
「おまえが手の平をポンと打った瞬間……」
「えっ、俺が手の平をポンと打った瞬間？」
「おまえの頭の上で電球がピカッと光るのを見た……」
もうしばらく病院に居る必要がありそうだと、俺は思った。

夕焼け

林　承徳

ザー。
外には鉛色の空が垂れこめていた。
「ああ、今日も雨か」
今日で雨は三日も降り続いている。
カーン、カーン、カーン。
家は建てつけが悪く、雨もりするためその下に置いた、なべ、やかん、洗面器が音をたてている。
言い忘れていたが俺には今年で五歳になる息子がいる、息子は俺の横で安らかな寝息をたてて眠っている、まだ昼間だというのに。
目尻には涙がにじんでいた、雨の日はいつものことである。
日やとい労働者で雨の日は仕事に出られず家でゴロゴロしている俺を見てまだ五歳とはいえ悲哀を感じるのだろう。

窓にはテルテル坊主がつるされていた、息子が自分で作ったものだ。
雨は降り始めて三日目だというのに衰えるようすも見せず、やっと夕方になって雨は止んだ。
俺は外に出た、西にはきれいな夕焼けが出ていた、俺は思わずつぶやいた。
「明日は晴だ、ガンバルぞー」
「パパ、夕焼けが出ると次の日晴れるの」
いつのまにか息子は起き出して俺の隣にいた。
「そうだよ」俺は答えた。
翌日は案の定、晴だった。
「パパ、晴でよかったね、きっとテルテル坊主のおかげだよ」
「ああ、そうだ。じゃあ行って来るよ。おとなしくしてるんだよ」俺は言って歩き出した。
後をふり返ると息子は手を振っていた、いつまでも。
うれしそうな中にもわずかな寂しさを隠しきれずに。
長い一日の労働を終えて家に帰った。
息子はいつものように一人、家でテレビを見ていた、妻は苦労の余りに子供を産むとすぐに死んでしまい、今はいないのだ。
しばらく晴れた日が続き、一週間程もたったある日。

朝出がけにラジオの天気予報を聞くと明日は雨であるということだった。
息子の顔がわずかにゆがんだ、その顔は寂しそうで哀れであった。
俺はいつものように、
「行って来るよ、おとなしく待ってるんだよ」と、言って家を出た。
今日もいつものように長い一日の労働を終えて家に帰ってみると息子がいない、いつもならいるはずなのに。
俺は必死になって心あたりを探し回った。
もっとも心あたりとはいっても息子といっしょにいる時間がほとんどないのだから近所を虚しく回るだけであった。
俺はあきらめて家の中で待つことにした。
カシャカシャカシャ。
三輪車の音がした。
外に出て見るとやはり息子だった。
「どこに行ってたんだ、おとなしくしてなきゃだめだって言っただろ」俺は息子をしかった。
「……」息子は何も言わない。
「どこへ行ってたんだ」
「あっち」息子は指さして言った。

息子の指さしたのは西町の方だった。
「パパ、きれいな夕焼けだね」
今まで息子のことが心配で気付かなかったが実に鮮かな、まるで火のような夕焼けだった。
(おかしい、天気予報では明日は雨というのに)俺は思ったが天気予報ははずれるものなのだ、不思議なことではない。
でも空を雨雲がおおっていたような……。
俺はともかくほっとして家に入りテレビをつけた。
「西町で大火事が発生しました。消防車が消火にあたっていますが、いっこうに火の勢いは衰えを見せません」アナウンサーが告げた。西町といえば息子の指さした方だ。
(あの夕焼けは、火事の炎が空の雲に写り夕焼けのように見えたものだったのか)俺は思った。
二時間もテレビを見ていると字幕で、火事は無事消されたが、火元が火気のない所のため放火のうたがいがあると発表した。
息子の服の肩のあたりが少し焼けこげていた、さっきは暗かったので気付かなかったのだろう。
(まさか……。いやそんなはずはない)
俺は一瞬脳裏をかすめたことを打ち消した。
いつの間にか息子は安らかな寝息を立てて眠っていた、寝顔はまるで天使のようだった。

未来へ行った順

池田信義

「明日、未来へ行くんだ」順は、カクテルを振っているマスターに、声をかけた。
「いつ帰って来るんだい?」人の良さそうなマスターが訊ねた。
「さあね、飽きたら、帰って来るさ」
順はビールを、三本程飲み終え、ウイスキーを注文した。
「あんまり飲むと、明日、二日酔ですよ」とマスターが、やさしく声をかけた。
「なあに、酔わなくっちゃ、寝れそうにもないよ。マスター、もう一杯作ってよ」
それから順は五杯程のウイスキーを飲んだ。
順の友人、勇次が店にやって来た時には十二時をまわっていた。
「なんだ順、先に酔っぱらっているのか。おまえは、いつも先に酔っているな」
「俺は、明日、未来へ行くんだど。勇次、未来だど」
「わかっているよ順、未来へ行くんだよな」
勇次は、順が酔っているのはなれっこだった。

順は急に席を立った。
「勇次、乾杯だ」
勇次も、立ち上った。
「じゃ、すばらしい旅行と、すばらしい未来のために、乾杯！」
「乾杯！」
マスターや、店の客も、順に乾杯してくれた。
順が、未来へ旅立っても、客の連中は噂していた。
勇次も、毎日、この店にやってきては、順の帰りを待った。
順の噂話も、数年で、する者もいなくなった。
それから、数十年、過ぎて、店の客は、ほとんど変った。
勇次は、老人になっていた。それでも、杖をつき、時おりやって来た。
ある日、勇次が店に入ると、一人の老人がウイスキーを飲んでいた。それは、まさしく順だった。
勇次は順に声をかけた。
「おめいさん、順じゃないか？」
順も、勇次に気がついたようだった。
「おお！　勇次。ずいぶん遅かったなー」

「順よ、いつ未来から帰って来たんだ？」
「なにを、言っているんだ勇次よ、おまえが過去から、やって、来たんだろうさ」
勇次は、呟いた。
「順よ、おめいは、いつも先に酔っぱらっているな」

奥様は魔女

深里茉莉子

「君の奥さんは、魔法使いだというわさを聞いたんだがね、ほんとうなのかい」
「え。まあ。なに。うん」
「なんだかはっきりしない返事だな。さあもう一杯いこう。それで何かい。どんなことができるんだい」
「たいしたことじゃないんだ。別に。たとえば料理を作るときなんかに、一流レストランのコック長を連れてきて、うまいものを作るといったことだ」
「ほほう、そんな知り合いがいるのか。そうすると、晩酌のさかなは、この店の煮こみなんぞよりは、かなりましなものがでるんだな。いやなに、こっちの話だよ、親爺さん」
「あのね、うちのやつは別に知り合いが多いわけじゃないんだ。文字通り、魔法の力でよびよせるんだ」
「ほほう、やっぱり魔法か。こりゃおもしろくなったぞ。さあ、もう一杯」
「魔法というとオーバーだがね。詳しくはわからんが、なんでも催眠術のようなものだそう

だ」
「なるほど。それなら科学的だ。おおい、親爺さん。熱いやつをもう二本追加だ」
「料理人に催眠術をかけると、自分でうちまでやってきて、うまいものを作って帰っていく。もちろん、本人はそのことはまるで覚えちゃいない」
「そうすると、何だな。相手は料理人でなくてもいいわけだな。やきとり、もう一皿もらおう」
「その通り。この間は、オペラ歌手の□□に来てもらって、独唱してもらった。ピアノ伴奏は、あの□□だ」
「ふうん。だけどまてよ、君のところにピアノあったかな。お、きたきた。さあ熱いやつをいこう」
「それから、クラシック・バレエの□□が来て踊っていったこともあるんだ。オーケストラの伴奏つきだ」
「オーケストラだと。おいおい、本当の話かい。あれ、こっちはもう空だ。あと二本たのむ」
「そればかりじゃない。詩人の□□をよんで、自作を朗読してもらったときは、ほんとうにすばらしかった」
「だって君、彼が死んだのは、もう七、八年前だぜ。まだ君は一人者で、よく例の店で飲んだじゃないか。あそこに比べると、ここの酒はちっとはましだな。親爺さん聞いてるかい」
「どうも飲みすぎたらしい。まあ、うちの奴が使う魔法なんて、この程度のもんさ」

「しかしね君。そうすると、世界中の美女をよびつけて、ハレムに侍らせるなんてことだってできるんじゃないのかね。ほら、□□化粧品のモデルやってる子なんか、いいなあ。え、どうなんだい」

「まあね。そういえば、去年オスカーとった女優の□□といっしょに……。まあいいじゃないか、そんなことは」

「どうも君の話は、高尚な相手ばかり出てくるんだね。おや、飲んでるのは俺だけじゃないか。けしからん。さあ空けて空けて」

「奥様は、なんでも魔法をお使いになるんですってね。宅の主人が、ゆうべよっぱらって帰って、そんな話してましたわ」

「いえ、学生の頃心理学やってまして、ちょっと催眠術に興味もったものですから」

「そうそう、催眠術でどんな人でも思いのままにあやつれるとか。何とかいう下品なモデルなんかも」

「とんでもございませんわ。私が催眠術をかける相手は一人だけですの。うちの主人ですわ。いろいろ想像していることが現実のように思えるらしくて、いつもごきげんになりますの。夫くらい扱いやすいものは妻にとってありませんものね。どこのお宅でも、多かれ少なかれ、似たようなものだと思いますわ」

不可解な死

三谷志乃夫

——失礼いたします。いえ、債権者ではございません。私、K研究所の者です。奥様のご依頼でお伺いしたのですが……。はい、それはもう、これだけの会社をお作りになって倒産ということは大変残念なことだとは存じますが、ただ自殺されたのでは、それこそ犬死に、あとに残された者がたまりません。自殺では生命保険はおりません。その点、当研究所の開発したこの薬をお飲みになれば、死因が他殺に見え、生命保険の全額受け取りはまちがいございません。……生命保険には……先日ご加入なさった……最高額で……。それだけの金額なら、負債をお支払いになっても、奥様とお子様の生活費に十分でございます。あとは、もうこの薬をお飲みになるだけです。はい、飲みやすい糖衣錠になっております。白い粒が、絞殺、黄色が、刺殺、赤が、……はあ、もう説明はよい。それでは、代金は契約通り、成功報酬で保険金の一パーセントということで、はい、ここにご署名ください。

なお、一言申し添えさせていただきますが、お死にになる際には、くれぐれも自殺だと周囲に悟られないようにご注意ください。薬の効果は絶対ですが、保険会社の調査は厳しいもので

す。行きずりの人間による不可解な死であることが一番です。
どうもありがとうございました。あなた様のご冥福をお祈り申しあげます。
最後に一言、どうせ死ぬなら、罪人も出さず、安らかに死ねるK研究所の他殺に見える自殺薬・スグシネール……スグシネール……もう一回、いい——

三回目の倒産だもんなぁ。何やってもダメなんだな、俺。まぁ、生きてもしようがないけど、女房が、あんなに俺が死ぬのに積極的になるとは——何が、子供のために死んで——だ。やっぱり、あいつ、隣の亭主とできてやがるんだ。畜生！　今ごろ、アリバイ作りに、友達集めて麻雀してるんだろうなぁ。あーあ、人生の敗北者か。何を言っても愚痴になる。さて、K研究所のセールスマンからもらった薬でも飲んで、この世におさらばするか。
倒産なんかにくじけないぞ——と金策にかけまわるポーズをとってきたし、まぁ、不可解な死といえるだろうな。
たくさんあるね。十二色か。どの錠剤にするかな。まったく、他殺に見えるなんて、奇妙な薬だ。自然死に見せるには、日ごろが丈夫すぎるし、事故死では自殺とまぎらわしいし、保険金を確実にせしめるには他殺しかないな。
色のきれいな赤いのにするかな。白いのもおいしそうだ。黄色は、おっ、レモンの味か……。残せば証拠になるかもしれないな。ええい、面倒だ。全部、飲んでやれ。うわぁ、変な味、

きもちわりぃ。飲み込んじゃえ、ゴックン。

ヤマダ刑事、まったく不可解な死ですね。すべてが致命傷で、凶器はまるでなし。
頭部は鈍器でめった打ち、額に銃弾、目玉はえぐられ、奥歯ガタガタ、頸部を絞められ、心臓を一突き、手足は縛られた跡があり、電車にひかれたようにバラバラ、腹部に大型車と中型車のタイヤの跡、おまけに、首すじに吸血鬼に吸われたような跡があり、全身の血はなし……

黄金色の瓶詰

清水信之

僕の友人にとても広い家に住んでいる男がいる。別に広い家に住む事は必ずしも不可能な事じゃないけど、彼は一人暮らしなんだ。一人で部屋が何百もある家に住んでいるのはちょっと普通じゃないだろう。ああ勿論彼は金持ちさ。富豪といってもいいかな。昔からそうなんだ。それに彼も遊んでいる訳じゃないし。彼の仕事？　うん何ていったらいいのかな。食品を加工しているんだよ。ほら、ジャムとかマーマレードとか葡萄酒とか。おそろしく高価いんだよね。それでも買い手がいっぱいなんだ。

僕は友人のよしみで、よく食べさせてもらうけどね。本当は金持ちの注文をたくさんかかえているそうだ。とにかく、彼の所の食べ物は絶品なんだよね。ああ彼の家の部屋も大部分はその倉庫に使っているんだ。何百もの部屋に、いろんな瓶がぎっしりつまっている。それはちょっとした圧巻だよ。彼はぶ厚いノート（スタッドブックって本人は呼んでた）をもとにして一人で、一人でだよ、それらを全部管理してるんだ。超人的だよね。超人なのかもしれない。しかも時々僕らのような友人が味見におしかける。

でも彼はそれを気にしないんだな。僕らの感想や批評を聞きたいそうだ。とっても参考になるんだって。ぶくぶく太った老人の食通は、彼に言わせると何にも解っちゃいないんだとさ。もち論、彼が僕らを歓迎するのは、そんな実際的な理由からじゃない。

僕らだって彼のジャムの為につきあってるんじゃないぜ。

うん、その日も僕は彼の家に行ったんだ。彼は僕らが遊びに行く時、仕事をしている事は滅多にないんだ。いつ仕事をしているんだろうね。でもその時、僕が彼の部屋に入ると例の記録帳が開いてあった。記録帳は一冊じゃないんだよね。棚にいっぱいつまっているんだ。彼は言うんだ。すまないけどこれからちょっと仕事があるんだ。よかったらついて来るかいってね。もち論、僕に異存はなかったよ。前から彼の仕事をする所を見たかったし、どうして彼の作るジャムやマーマレードや果実酒があんなにおいしいのか不思議だったしね。本当においしいんだよね。彼のを食べたら他のやつなんか食べられないほどおいしいんだ。何というのかな、味が複雑で自然で精妙で。他のやつは何が入っているか一口食べると解っちゃうんだよね。ブドウ糖何パーセント、果糖何パーセントってな具合にね。彼のは成分は同じでも何かが違うんだ。何かがね。

彼は四段になったキッチンワゴンに、小さな瓶を何十も乗せて長い廊下を歩いていった。それから旧式なエレベーターに乗ると地下へ向かって降りていった。エレベーターを降りると又廊下があって、両側と突きあたりにドアがあった。彼はワゴンを押して突き当たりまで行って

ドアを開けた。そこは広い部屋だった。そして大きな直径一メートルほどもあるガラス瓶がたくさん並んでいた。

瓶の形は（普通、瓶というのはみんなそうだけど）上へ行くほど細くなっていて、口にはコルク栓がはまっていた。下があまりに巨大だから、何だか滑稽で太りすぎたあひるを思い出させたね。瓶の中には口のそばから底までの長さのガラス管が入っていた。きっと上を押さえてピペットみたいにして使うんだなと思った。これは何の瓶なのって僕は聞いた。ここまで見せてくれた以上聞いても失礼になるとは思わなかったからね。でも聞き方は失礼だったかもしれない。好奇心を押さえきれない言い方だったから。でも彼はそんな僕の態度を咎めるようなそぶり、普通は無関心だけど、も見せないで、にっこり笑いながら言った。よく見れば解るよってね。全部違うのと僕が聞くと、大部分はねと彼は答えた。そして自分は仕事があるから勝手に見ていいよといったんだ。

彼は大きな瓶から、さっき僕が想像したやり方で小さな瓶に何かを移していた。ちょっと離れて僕はそれを見てたんだけど、何だか解らなかった。もっとそばへ寄ろうと思ったけど、彼が仕事をしてるだろう。じゃましちゃ悪いと思ってね、端の方から順に見て行く事にしたんだ。最初に見た瓶にはコバルトブルーの液体が入っていた。最初はただの水に見えたんだ。でもよく近づいてみると、表面がキラキラ輝いている。何だか解らなかったけど、すごくきれいだったので僕はじっと見ていた。そして突然気がついたんだ。僕はびっくりしたね。それは海

なんだよ。海が瓶の中に入っているんだ。海の瓶づめ、ちょっとしゃれてるじゃないか。それは、おだやかにゆれて潮風が匂ってくるようだったよ。いや、実際栓を抜いたら部屋中が潮の香りで満ちたと思う。

僕はしばらくそこを動けなかった。海はたとえようもなく美しく、僕は不覚にも涙がこぼれてきた。でもそれはほんの一部だったんだ。僕を驚かせるものが次々と出てきた。次の瓶もちょっと見た目には緑の霧にしか見えなかった。でも目を近づけて見ると、それは夏だった。樹々の葉が風にそよいでいた。緑が光を反射して光っていた。白い壁と、くっきりした影、静かな優しい午後だった。次の瓶には嵐が入っていた。その次には闇が。僕は時を忘れて瓶をのぞき込んだ。そして僕の足はある瓶の前で釘づけになった。

その瓶には太陽が入っていた。太陽の光、黄金色の油が。それは瓶の中で濃縮されてるらしくって、液体とも気体ともつかない動きをしていた。なつかしい暖かい光、太陽、僕は目が痛くなるほどそれを見つめていた。ふと気がつくと彼がそばに立っていた。太陽の光が気にいったみたいだねと彼はいった。気に入ったなんてもんじゃなかったけれど、僕はうんと答えた。少しあげようかと言われて僕はびっくりしたよ。僕は聞いてみた。もうこれっきりしかないんだろうってね。彼はうんと答えて続けた。でも何時かは無くなるものだしね。ここの瓶の中身が全部無くなったら僕の仕事も廃業さ。聞けばここにある瓶の中身は彼の祖先が貯わえたものなんだって。そして彼の作る食べ物のおいしい訳もここにあったんだ。

彼は毎日、ここの瓶から色々なエキスを運んで彼の食品の中におとして行く。それには順序があっていい加減にやるわけにはいかない。今日夜の闇を一滴、あした冬の霜を一滴というふうにね。食品の種類によっても違うし、順序の変え方で味も変わる。

それらは全てあの記録帳に書いてあるそうだ。大変な仕事だよね。彼はいつも快活だったけど、ひょっとすると仕事に疲れていたのかもしれない。それでそんな気になったのかもしれない。とに角、僕は有頂天だった。もちろん断わったさ。でも一度、口にした以上、彼がくれる事ははっきりしてたからね。彼は小さな瓶にいっぱい詰めてくれた。僕はいろいろ考えたよ。朝起きたら、これを一滴部屋にまく。黄金色の光が部屋中を満たして一日中陽気に、僕はいつだって陽気だけどね、暮らせるだろう。それから朝のコーヒーに一滴入れようか。

僕は夢中だった。彼の家を出ると、飛ぶように道を走った。もち論、心はうわの空でだ。今考えるとまずかったよね。もっと慎重に行動すべきだったと思うよ。君も知ってるように道はかなりでこぼこだからね。でもあの黄金の光を見た人なら、僕の興奮も解ってくれると思うんだ。そう、君が考えてるように僕は転んだ。全くドジな話さ。でもそれでいいのかもしれない。

あれは一人じめにしちゃいけない物なんだ。彼は仕事だから仕方ないけどね。あっと思った時、瓶は空中に飛んでいた。ああいう時は妙に時間が長く感じられるものだね。実際、長くなっているのかもしれない。僕は瓶が割れてガラスが飛び散るのをはっきり見たよ。黄金色の液体が静かに流れ出した。僕はそばへ寄ってそれをすくいあげようとした。でもそれは煙みたい

に両手の間からすりぬけるだけだった。音に驚いて何人かの人が僕の方を見た。わりと人通りは多かったんだ。黄金色の液体は少しずつ蒸発してゆくようだった。液の広がった上の空間が黄金色の光で満たされ始めた。それは太陽の光だった。人がだんだん集まってきた。肩と肩とがふれあうくらいだった。

太陽の光は僕らの心と体を暖かくした。

それは僕らの部屋についている人工太陽燈の光とは全く別のものだった。僕らの見る太陽はスモッグを通して輪郭のぼやけた、赤褐色の不気味なものだからね。そうしているうちにも光はどんどん上の方へ上がっていって、うす暗い空を突き抜ける、光の柱のようになって来た。皆はその光の柱の中に入って立ちのぼってゆく光をじっと見つめていた。僕はその中に彼がいるのを見た。きっと家から光の柱を見て駆けつけたんだと思う。彼も僕に気がついた。僕は、ごめん落としちゃったと言った。彼はいいんだよと静かに笑って空を見上げた。彼も又、幸福そうだった。ずいぶん長い時間に思えたけれど、たいした時間じゃなかったんだろう。やがて光の柱は、どん帳が上がるように足下から消えていった。あの黄金色の液体がもう無くなってしまったんだろう。僕らの足下が暗くなり、うす暗い闇が胸、顔と順に上がっていって、とうとう光の柱の底は僕らの頭のずっと上になってしまった。それは下から見るとまるで光の球のようだった。いま光は元の場所、太陽へ帰って行くのだろう。皆はその黄金色の気球が小さく小さくなるまでそこを動かなかった。

特技

西谷慎一

世間の風は、学歴のない能なし男には、氷どころか、ドライアイスのように冷たかった。

大都会に憧れ、東北の片田舎から勢いよく家を飛び出した若者も、わずか数年で、職を転々とする間にたちまちその若さを失っていった。今夜も、職探しに疲れた男は、共同トイレの臭(におい)がプンプンする安アパートの一室で、酒を飲みながら、トロンとした目で、天井のシミなどを眺めていた。

男は溜息をつき、煙草に火をつけた。煙を天井めがけて吹きつける。隙間だらけの部屋へ、晩秋の冷えきった夜風が吹き込み、煙草の煙が、アッという間に流され消えてゆく。

まるで俺みたいなもんだなと男は思う。

事務が大の苦手で、車の運転が出来ない。その上、口下手で力がないときている。運の方も特別誂(あつら)えの悪さで、何をしてもドジばかり。何か特技があればなと男は思う。殺虫剤があれば、貧乏神にぶっかけてやるのに。

男はブツブツ呟(つぶや)きながら立ち上がり、フラフラと大きくよろめいた。この寒さと酒の所為

で、尿意がひんぱんに起きるのだ。隣にトイレがあるのに、共同の為に一度、廊下に出なければならない。男はすでに、酒を飲む段階を越え、酒が男を飲む状態に達していた。男にとって残念なのは、こんな状態の時にいつもすることを、酔いが醒めても思い出さないことだ。

男は無意識で、壁を抜けて、トイレに入った。

パーティーにて

斎藤文彦

「おかしな所ね」
パーティー会場に当てられたその部屋に入るなり、エリーはそう言った。
「何か異様な雰囲気を感じるわ」
「へぇ、それに気がつくとは、さすがだな」
びっくりしたような顔で、エリックはそう答えた。
彼は今日のパーティーに、エリーをエスコートしてきたのだ。
その部屋は、ほかの部屋に比べて、特に変わったような所は見られなかった。縦が十メートル、横が二十メートルといった広さのフロアには、丸いテーブルがいくつも並べられていて、色々な料理や飲み物がその上に置かれてある。別に異様な像や絵が飾ってあるわけでもない。
パーティーに集まっているのはみんなカレッジの仲間で、奥で演奏しているアマチュア・バンドの音楽に合わせて気ままに踊っている。
あたりまえのパーティー風景だ。

「へんね。どうしてこんな感じがするのかしら?」
「それは君の神経が繊細だからだろう。実を言うとね、この家にはおかしな言い伝えがあるんだ」
「言い伝え? この家はレストランじゃないの?」
「今はね。ここの持ち主がそういう風に改造してしまったんだ。でも昔は、何んとかいう伯爵の持ち家だったそうだよ」
「へぇ、それで?」
「うん。で、その言い伝えなんだけど、伯爵の奥方というのが実は魔女だったらしいんだ。そして今でも、その呪いはこの家にこもっているんだそうだ」
「わぁ、恐い」
その時、急に二人の後ろから声がした。
「女の子を恐がらせて楽しむというのは、悪趣味だな」
二人が振り向くと、ラフな格好をしたジョンがニヤニヤしながら立っていた。
「何が悪趣味だ!?」
エリックはジョンの顔を見ると、表情をかたくした。
「つまらない伝説なんかを話すからだよ。女の子の前に立つと、すぐ知ったかぶりをしたがるんだからな」

ジョンは相手を小馬鹿にするような笑いを浮かべてそう言った。
「あれは単に、伯爵の奥方が美人だったということだけだよ。多分、奥方をめぐって多くの男たちが色々騒いだんだろうな。そういったウワサが時代を経ることにより、一つの魔女伝説を作りあげるに至ったというわけさ。どうだ、わかったかね」
「それこそ知ったかぶりじゃないか。そう言いきるだけの根拠があるのか」
エリーの手前もあって、エリックはいささかムキになってジョンにつっかかった。
「民俗学の方法論を使ったまでだがな。だけどエリック、お前、本当に魔女がいるなんてこと信じているわけじゃないんだろう？　そこまで幼稚じゃないよな」
ジョンの言葉は、ほとんど冷笑に近かった。
「断言はできないだろう！」
なかば叫ぶようにしてエリックは答えた。
しかしジョンは、そんなエリックの顔を見て、大声で笑い出した。体をくの字に曲げて、しまいには苦しそうにセキまでしながらだ。
いつの間にか、パーティーに来ているカレッジの仲間たちは、二人を取り巻くようにして立っていた。どうもケンカが始まるのじゃないかという期待を胸に抱きながら。
そしてその期待はすぐにかなえられた。ジョンの高笑いにカッときたエリックが、ジョンをなぐりつけたのだ。

見ている連中の間からかん声があがる。
「そこだ、行け！」
「右アッパーだ。後ろにさがるな、馬鹿！　前に出てぶんなぐれ」
次々に浴びせられる声援と野次。その声にもだんだんと熱がこもってくる。
その中で、エリー一人がおろおろしていた。
半泣きの声で、
「やめてジョン、エリック。お願いだからやめて……」
しきりにそう言うのだが、却ってその声は二人の争いをいっそう燃えたたせてしまう。
二人とも、エリーやみんなの手前、もはや引き下がるわけにはいかないのだ。
テーブルがけ倒される。料理や飲み物がフロアに投げ出され、皿の割れる音が部屋中に響きわたった。
しかし二人ともなぐり合ううちに、不思議に頭からエリーのことは、だんだんと薄れていった。残ったのは、相手を倒すことだけである。
あいつを倒すのだ！
倒すのだ！
倒すのだ……そう、二度と立てないようにするんだ……ふたたび俺の前に現われないように……殺すんだ！

二人の手は、自然とフロアに投げ出されてあるナイフやフォークの方に伸びていった。
二人を取り囲んでいたカレッジの仲間たちのかん声がいっせいに止んだ。
一瞬、不気味な静寂が部屋を支配する。しかしそれは、やがて言葉では言い表わしようのない大きな興奮となり、部屋全体をおおいつくしてしまった。
二人を取り囲んでいるカレッジの仲間たちの目は、もはや二人以外のものに向けられようとはしなかった。
だからその時にはもう、部屋の隅にぽつんと一人で立っているエリーに注意をはらう者は誰もいなかった。
エリーの顔は歓喜にあふれ、目は妖しく輝き、その口は耳もとまで裂けていたというのに……

カーニバル

井口健郎

孤立した小さな島があった。島の中央にはなだらかな丘があり、そこには、島民たちが古代から「神の軌跡」と呼ぶ二本の鉄路（レール）が横切っていた。鉄路（レール）は、海から来て、海に姿を消していた。

この島に年に一度のカーニバルの日がやってきた。この日は、神が姿を現わすという。どこからか流れてくる情熱的なリズムに乗って、男たちは輪になって踊りはじめた。やがて、女たちもやってきた。女たちは、手に手に、赤ん坊の入ったバスケットを抱いていた。男たちの踊りの輪は、女たちを取り囲んで、さらに熱狂的に踊り続けた。そのとき、島に鐘が鳴り響いた。やがて、女たちは、踊る男たちの間をすり抜けて、ゾロゾロと丘に向って登っていった。男たちは、なおも熱狂的に踊りを繰り返していた。

赤ん坊の入ったバスケットは、鉄路（レール）の上にズラリと並べられた。女たちは、何度も何度も丘をふり返りながら、男たちのいる踊りの輪の中に帰っていった。やがて、遠く汽笛のような音とともに、黒いものが、丘の上を通り過ぎていった。丘の上の鉄路（レール）には、赤ん坊の姿も、バス

ケットも、あとかたもなく消えていた。
踊り狂っていた男たちも、女たちも、地面に頭をすりつけて、その瞬間を見おくった。不老不死の薬ができて以来、毎年訪れるこのカーニバルのおかげで、今年も島の人口は不変だった。

DOY(ドゥーイ)

早島　悟

地球とそっくりの星だった。文明も、地球と同じ様な発展段階を経過して来たに違いない。しかし、やたらと人が多く、しかも大気もかなり汚れている。町の上空を走りながらそう思った。

とにかく燃料の補給をしなくては。俺たちは、広場らしい空間を見つけて着陸した。

すると、さっそく住民たちが集まって来て、俺たちの宇宙艇のまわりを取り囲んだ。

「ドゥーイ、ドゥーイ」住民たちは、口々にこう叫びながら俺たち二人を歓迎してくれた。

「へへ、凄いね。俺たちはまるで英雄扱いだぜ」同僚はすっかり有頂天だった。

「そうかね」そう言いながらも、俺は悪い気分ではなかった。住民たちは好意的だし、気候も俺たちの風土と合っている。悪くない。

やがて、住民たちの中から一人の男が現れて、俺たちの前に歩み出た。男は両手を前に突き出し、それをゆっくりと開きながら体を前に傾けて「ドゥイ、ドゥイ」と言った。

「こんにちはって意味かな。奴ら何て言ってるんだい」俺は同僚に尋ねた。

「さあね。まだまだデータが足りないよ。今のところ、翻訳機にも同じことを言っているようにしか聞こえんらしい。お前、奴らにもっと他の言葉を喋らせてみろよ」

俺は頷いた。

〝ドゥーイ〟という音は弦を弾いた様な小気味のいい響きがする。だが、舌打ちと同時に喉を鳴らせば俺に出せない発音ではない。そこで俺は、口真似をして、挨拶のつもりで「ドゥーイ」と言った。

「ドゥ――！」

男は目をむいてのけぞった。俺はさらに「ドゥイ、ドゥイ」と言った。すると男は、どもりながら「ドゥーイ」と言った。そして住民たちに向かって振り返ると大声で叫んだ。

「ドゥーイ、ドゥーイ！」

いつの間にか倍以上に膨れ上っていた群衆は、一斉に「ドゥーイ」と言って応えた。

「おい、なんだ、なんだ、なんだ」同僚はびっくりしたように言った。「お前の言った事、奴らに通じたみたいだぞ」

「ああ」俺は呆気に取られていた。「ただの挨拶だと思ったら、あれで立派な言語だったんだな。しかも偶然に、何かもの凄い事を口走ったらしい」

「ここの言葉を知ってる訳じゃないだろ」

「当り前じゃないか。全くどうかしてるよ」

それから俺たちは男に案内され、広場の中央にある塔に登った。展望台らしき所にでっぱりがあって、そこから広場全体が見渡せるのだ。俺は、そこに立たされた。

俺は案内人の様子をうかがった。彼は俺と視線を合わせると、そばに来て両手で俺の頭をつかむとぐいぐいと引き寄せた。そして、耳元に口を近づけて、小さく「ドゥイ」と囁いた。

「え？」驚いて男の顔を見ると、彼は無言で頷いている。

「ここで何か喋れっていうのかい」と尋ねたが、通じるわけもなく、男は不思議そうな顔をしただけだった。

だが、まあいい。これだけの大観衆。彼らの期待に応えてやるとしよう。といっても、でたらめを喋るだけだが。

まずは一言。俺はマイクに向かって「ドゥイ、ドゥーイ」と言った。

「ドゥ――イ」

大歓声が起こった。一人一人が、手を振り上げて絶叫している。

「お前、いったい何を喋ってるんだ」と同僚が訊いた。だがそれは俺だって気になっている。しかし俺の言う一言一言が、これほどの反響を呼ぶのだ。俺は気分が良かった。

続けて「ドゥーイ」と言うと、住民たちは一斉にひざまずき、両手を上に挙げて体を前後に揺さぶり始めた。案内人も同じポーズをとっている。どうも俺への敬意らしい。

いつの間にか俺は、この町の最高の地位へ登りつめてしまったようだ。

なにしろ、でたらめが啓示に聞こえるらしい。空からやって来て、民に啓示を宣えば、俺が神に見えても極めて自然なことだ。しかも、一度神であることを信じ込ませれば、今度は何を言っても奴らはありがたく思うだろう。俺はいたずら心を起こした。

「見てな、今から大演説をぶつからさ」俺は同僚に言った。

「大丈夫か。何を言っても通じるなんて、ちょっとおかしいぜ」

「まかしといてくれ」俺は胸を張った。「おかしいのはちょっとどころじゃない。それは判ってる。だけど、何を言っても通じるんだ」自信があった。

俺は息を整えてマイクの前に立った。

「ドゥイドゥーイ、ドゥイドゥイドゥイ、ドゥイ、ドゥーイドゥーイドゥイ」本人も何を喋っているのか判らない。だから、俺の舌は快調に滑った。「ドゥイ、ドゥーイドゥイ、ドゥイドゥイドゥイドゥー」

俺は適当に高低強弱をつけてまくしたてた。住民たちの反応を見ていると、通じているらしいことがよくわかる。

「ドゥーイ、ドゥイドゥイ、ドゥイドゥーイ、ドゥドゥーイ、ドゥイドゥイドゥイドゥイ、ドゥーイドゥーイドゥイ」

一息つくと、住民たちは俺に熱狂的な支持を見せた。俺は笑って彼らに手を振ってやった。すると彼らは「ドゥー」と言って腰を曲げた。何をするのかな、と思ったら、奴らは穴を掘り

始めた。

「どういう意味があるんだい。この星の風習かな」俺は同僚に尋ねたが、彼は首を横に振った。

「知らないよ。翻訳機にも違いが判らない言葉が、俺に判ってたまるか。それより何とかしろよ」同僚はあごで広場の様子を指した。

俺はマイクに向かって「ドゥイ」と言った。

とたんに大爆笑が起こった。全員腹をかかえ、崩れるように倒れ、のたうちまわり、涙を流し、そして非常に苦しそうだった。笑いはなかなか止まらず、しかも依然として彼らは必死で穴を掘っている。

本当に何とかしなくては、と思った。足の裏がかゆくなってきたのである。

「ドゥーイ、ドゥーイ」俺は大声で叫んだ。

すると住民たちは急に穴掘りを止め、奇妙な旋律で「ドゥーイ、ドゥーイ」と合唱をし始めた。そして、広場全体にそれが拡がると、歌に合わせて踊り出した。いや踊りというよりも、無茶苦茶に手足をばたつかせているだけだ。まるで、壊れて止まらなくなった機械仕掛けの人形の様である。それは悲痛な光景だった。

先ほどから同僚は、「何とかしろ」を繰り返していた。

しかし、「ドゥーイ」と言ってこれほどの事態を起こしてしまったのだから、解決する時も同じ方法でいくしかあるまい。俺は再び「ドゥーイドゥイ」と言った。

すると、今までの騒々しさが嘘のように、住民たちの動きがぴたりと止った。だが、平常通りに戻ったかというと、そうではなかった。彼らは、一斉にばたばたっと倒れたのだ。

俺はあわてて、そばでぐったりしている案内人の肩を揺すった。「死んだのかな」と、同僚は心配そうだったが、脈はある、息もしている、大丈夫、眠っているだけである。

それにしても、俺の力は想像以上にもの凄い。我ながらびっくりした。

俺たちは塔を降り、群衆の中に入った。もし催眠状態なら、眠っていても人の声は聞こえるはずである。そう思い、各々の住民に直接「ドゥイドゥイ」と説いてまわった。しかし結果は芳しくなかった。頬を張ったり無理矢理まぶたをこじ開けようとしたが、全く効果がなかった。

町が死んでしまった。俺が殺したのだ。

「他の町へ行って人を呼んでこようか」同僚が言ったが、俺は反対した。

「呼んで来たってどうしようもないだろう。それに、俺たちは捕えられるかもしれないじゃないか。もし、この事態を解決できる者がいるとしたら、それは俺以外の誰でもないぞ。何といっても、俺は神なんだから」

同僚は納得した。

しかし俺は、この現象が単なる偶然の連続であるとは信じ難くなってきた。確かにこれは俺のやったことだ。だが俺の力量を遙かに越えている。

俺は精神を集中した。果たして出来るか。もちろん俺はエスパーではない、神でもない。だ

から、たとえ俺が「何とかなれ」と思っても、そのままの意志がまかり通るなんてことは思ってもいない。ただ、俺の言葉で何かが起こることを期待しているのである。

「むむむむむむむむむむ」俺はうなった。そして、息を整えると空に向かって大声で叫んだ。

「ドゥ――――イ！」

すると、大地が音をたてて揺れ始めた。見上げると、空が墜ちて来た。

俺たちは悲鳴をあげ、反射的に逃げ出していた。

次第に空気が重くなり、空が黒くなっていった。我々を押し潰そうというのか。

この星はきっと死滅するだろう。確信できた。

「もう知らないぞ」同僚が言った。

「俺だって知るもんか」

やっとのことで宇宙艇に乗り込むと、後も見ずに飛び出した。

全く俺はひどいことをしたもんだ。

いや、俺のせいではない。俺は何者かによって神に仕立てられ、そしてこの星に最後の審判を下させたのだ。

同僚がその星の消滅を告げた。

これで俺の役割も果たされたことになる。

ロボテイジの進展

前田恭二

某新聞の社説欄より　1

このような事件の起こったことについては残念としかいいようがない。すでに旧式となった銀行強盗という犯罪が起こり、警備員が殴殺されたことには、まだまだ多くの疑問が残っている。

しかし、今だに犯人が捕えられぬことを遺憾に思う。

非常ベルの故障・モニターテレビの故障などのアクシデントがあったのだが、犯人がいまだに町を徘徊しているとは許しがたい。

2

とはいえ、犯罪者がロボットだったということに我々は大きなショックをうけている。

この気違いロボットは現在、警備員によって検査されているが、原因など詳しいことは不明

である。

3

しかし、動機が、古くなったボディの新調資金欲しさだとは。このことに我々は強いダメージをうけている。

警備員の検査により、ロボットに異常がないことが認められ、その供述からこのことが明らかになったのである。

4

いずれにしろ、共犯者が非常ベルとモニターテレビだったとは。我々は深い絶望を味わっている。

我々は間違いなく身動きとれなくなっている。そろそろ首ねっこを洗っておくのが賢者の道ではなかろ

（これ以後、新聞社輪転機の労働拒否のため、印刷発行不能）

ある日突然

赤松秀昭

ある日突然、ぼくは一人の少女に出会った。
「すみません、この住所わかりますか……？」
少女は、少しなまりのある声で、そう言った。お下げ髪の、まだ十二、三歳くらいの少女。手には、小さな紙切れをもっている。住所のようなものが書いてあった。
「えーと、この住所は……」
少女のもっていた紙切れの住所を見た時、ぼくはそれに似た住所をどこかで聞いたような気がした。でも、どこで聞いたか思い出せない。少女は期待に満ちたような目で、ぼくを見ている。ぼくは、少女のために何かしてやりたいという気になった。
「ちょっと分からないけど、……いっしょに探してあげようか……」
少女の顔がパッと明るくなった。おじぎをする姿が可愛い。
少女は、ぼくとともに歩き出した。何か珍しいものを見るたびに、ぼくに質問してくる。ぼくは、できるだけ親切に答えてあげた。少女の目はいつも輝いていた。

少女の探している住所は、どこに行っても見つからなかった。交番にも寄ったが、分からないという。明るかった日射しも、だんだん薄れていった。
やがて、すっかり夜になった。少女の求める住所はまだ見つからない。
「夜になっちゃったね……」
「うん……」
一日じゅう歩きまわって、ぼくはくたくただった。少女はもっと疲れているだろう。それにもう暗い。
「ひょっとしたら、この住所はどこにもないのかもしれないわ……」
少女が心細い声で言った。目の輝きも消えている。
「そんなことはないさ。その住所は、きっと見つかるよ」
ぼくは力強い声で言った。不思議に、ぼくの心に力があふれてきた。
「また明日、探そうよ。今日はもう遅いから……そうだ、ぼくのうちに来ないかい？　狭いところだけど、二人ぐらい寝られるよ。どうだい……」
少女の目に輝きがもどった。ほんとにうれしそうな表情で、何度も頭を下げる。ぼくも気持ちよくなった。
少女を家に案内する間、ぼくは自分のことをいろいろと話した。少女はいちいちうなずいて聞いていた。気のせいか、少女がだんだん可愛らしく思えてきた。

幼い少女を男一人の部屋に泊めることに、抵抗はないでもなかった。でも、少女は全く気にしている様子はない。もちろん、ぼくの頭の中にも変な気持ちはない。

やがて、アパートに着いた。

「ここが、ぼくの住んでるところだよ。家族から離れて、ここから大学に通ってるんだ。あまりいい大学でもないけどね……」

古びた階段を、音をたてて昇った。

「ぼくの部屋は二階にあるんだ。窓からの景色はけっこういいんだよ。足もとに気をつけてね。……ほら、ここさ」

さびた蝶番がきしんで、ドアが開いた。

「ここがぼくの部屋だよ。狭いだろう。四畳半一間だからね……ぼくは、押入れの中ででも寝るから、心配しなくてもいいよ」

粗末な勉強机と、形ばかりのたんすや本だな。何のかざりもない、殺風景なぼくの部屋。でも今は、心もち明るくなったようだ。

少女は、素直に上がってきた。

「おなかすいただろう。昼も夜も何も食べなかったものね。何か作るよ。インスタントラーメンしかないけど、いいかい……？」

「はい」

少女はうなずいて、勉強机兼食卓の前にちょこんと座った。野原に咲いた小さな花のようだった。

ぼくが、たなからインスタントラーメンを二つ出してきた時だった。

「あら、これ何ですか？」

「ああ、それか……」

少女はキラキラ輝く目で、机の下に重ねた原稿用紙を見ていた。

「じつはね、……ぼく将来、作家になりたいと思ってるんだ。……それでまあ、ちょっと試しに書いてみたんだよ……つまり、……ぼくが書いた小説なんだ……」

「まあ、小説なの！」

少女の顔が、驚きの表情の中で明るく輝きはじめた。ぼくは苦笑して答えた。

「小説といっても、途中までしか書いてないんだ。それに……あまり、面白くないんだよ」

「でも、小説なんでしょう。読ませて下さい」

「うん……」

少女の顔は、あまりにも無邪気だった。

「まあ……いいよ」

ぼくは、ポットの湯をなべに注ぎ、火にかけた。その時、少女の明るい声が響いてきた。

「ふうん、……『ある日突然』……って、これが題名なんですか。変わってるんですね」

「う、うん……題名は、変わってる方がいいんだよ……」
ぼくが他人に小説を見せるのは、これが初めてだ。相手が幼い少女といえども、やっぱり恥ずかしい。お湯が十分沸騰したので、ラーメンを入れた。
「……『ある日突然、ぼくは一人の少女に出会った』……わあ、面白い書き出しですね」
「う、うん、まあね……」
ぼくは、背中を向けたまま軽く答えた。
「……『少女は、少しなまりのある声で、そう言った』……」
少女の可愛い声が、後ろから聞こえてくる。ぼくは、照れくさくて、なべの方ばかりを見ていた。
「……『ぼくは、少女のために何かしてやりたいという気になった』……へえ、この主人公は優しいんですね」
「うん」
ぼくは、ぶっきらぼうに答えたが、少女は気にしてないようだった。話は、主人公がその住所を探しはじめるところに移った。
「……『やがて、すっかり夜になった』……フフ、このあとどう続くのかしら」
ラーメンは、だいぶほぐれてきたようだ。ぼくは、調味料の準備にかかる。少女は、少しずつ読み進んでいた。

「……『やがて、アパートに着いた』……」
ぼくは、食器だなから丼を二つ出した。形は違うが、まあいいだろう。
「……『少女は、素直に上がってきた』……」
小説の中の少女は部屋にはいり、主人公はラーメンを勧める。そんな少女の声を聞きながら、ぼくは丼を洗った。やがて、小説の中で、少女が原稿用紙を見つける。ラーメンは、かなり柔かくなってきた。
「……『ふうん、……『ある日突然』……って、これが題名なんですか』……」
ぼくは、冷蔵庫をあけてみた。野菜が少し残っていたので、それを取り出し、ついでに卵も二つ取った。
「……『ぼくは、照れくさくて、なべの方ばかりを見ていた』……」
ラーメンができかけたのを確かめ、卵を割って入れた。だいたい半熟ぐらいになるだろう。すばやく包丁とまな板を出し、野菜を軽く刻んだ。
「……『ぼくは、調味料の準備にかかる』……」
野菜を刻み終えたころ、ラーメンと卵がちょうどいい具合になった。ぼくは、少しかきまぜてから、火を消した。
「……『ぼくは、冷蔵庫をあけてみた』……」
ぼくは、ラーメンを丼に移した。二つの丼の量が、だいたい同じになるようにした。

「……『それから野菜を入れた』……」

それから野菜を入れた。卵を丼の中央にもってきて、できるだけきれいに盛り、適当に調味料をかけた。

「……『ぼくは両手に丼をもって振り向いた』……あれ、ここでとぎれてるのね。この先はどうなってるんですか？」

「ああ、その先はまだ書いてないんだ。まあ、考えてはいるんだけどね……」

卵のからと野菜くずを捨てながら、ぼくは背中で答えた。しばらく沈黙があった。それから、少女が明るい声で言った。

「すみません。この続き、わたしが書いてもいいですか？」

ぼくは少し驚いたが、すぐに答えた。

「いいよ、鉛筆ならそこにあるだろう……」

どんなことを書くんだろうな、ぼくはそう思ってほほえみながら、割りばしを探した。鉛筆が紙の上を走る、サラサラという音がした。その音はすぐに止まり、鉛筆がコトリと転がった。割りばしが見つかった。

「おまちどー。さあ、できたよ」

ぼくは両手に丼をもって振り向いた。

……『そこにはもう少女はいなかった』……

電話

田代武夫

ジーコ、ジーコ、ジー、ジコ、ジコ、ジー、ジー。これは電話のダイヤルを廻す音だ。静かと云うより狭い俺の部屋には、真夜中のダイヤルの音はやたらに響く。

ツー、ツー、ツー、

話し中だ。別に珍らしくない。アイツはいつも話し中なんだ。俺がこうして電話をかける時、決ってアイツはどこかへ電話をしてやがる。俺もそれ程の用事もないので、こんな酔っ払った真夜中にしか電話をしたことがないんだが、決ってアイツも淋しいと見えて、どこかへ電話してやがる。

俺は普通のサラリーマンだ。今の会社で三ツ目、勤めて五年、口下手と云うか、不器用と云うか女の子の前で恰好良く、

（どう、ちょっと付き合わない）なんて云えないもんだから、今だにデイトする女も居ない。せいぜい、国電のY駅を降りた所で、パチンコで指の運動をして、焼き鳥屋の暖簾をくぐり、ホロッ、ときたところでカラオケバーに寄る。終始一貫、（カスマプゲ）を声高らかに張り上げ

て、（もう一本ボトル、キープして置きましょうか？）って云うマスターの声を朧に聞き、こうして我が部屋にたどり着く毎日だ。

（おいおい、こんなことでいいのかなア）

なんて、たまアに自己嫌悪に陥るのが、決ってこんな夜更けだ。大した望みも無く、すれ違った女の子を見るたびごとに、（抱いてみたいなア）なんて考えているこんな男が日本中、どんなに一杯居るんだろうと思うとアイツを思い出すんだ。

ジーコ、ジーコ、……

ツー、ツー、ツー。

あい変らず話し中だ。出来る事なら、出向いて行ってアイツに、（おい、電話を切れ）って云いたいところだが、まあ動くのも面倒な事だし、こうして受話器を耳に当て天井の縞模様を数えている。

ガチャリ。

ぼやっとしている俺の耳元に、いきなりアイツの受話器を取り上げる音がした。

「モシ、モシ、こんばんは、げんきかい」

俺はびっくりしてベッドから身を起こした。何も、自分からかけておいてびっくりすることもないと思うだろうが、まさか、アイツが出るなんて。

「どうしたんだい。はなしがあるんだろう。モシ、モシ」

俺は言葉がつまってしまっていた。

「まあ、そうびっくりしないで、おちつけよ、つもるはなしがやまとあるじゃないか」

俺は、身体中にたっぷりと滲み込んでいる今飲んだアルコールが、ざわざわ足元へ流れ出る音を聞いた。

かけ間違いじゃない。確かにアイツの声だ、今、耳元でヘラヘラ笑っている小馬鹿にした様な、特徴のあるあの笑い声も間違いなく俺の知ってるアイツの声だ。

でも、これはいったいどうしたってことだ。アイツが確かに居る。でもアイツは電話に出れる筈はないんだよ。絶対出れっこないんだよ。だって俺は、この俺の電話にダイヤルしたんだから……。

茶の間にて

窪田京雅

茶の間にいたのは、祖母と父と私の三人だった。日曜の午後、暑くも寒くもない穏やかな昼さがりで、いつもよりやや遅めの昼食後、けだるい雰囲気の中で、テレビの音が空しく響いていた。日曜の午後などはこれといった番組もなく、昼のニュースの終ったあと、皆チャンネルをまわすのさえ億劫で、たまたまやっていた番組をなんとなく見ているのだった。

その番組は外国のスパイもので、これといった変った趣向があるわけでもない平凡なものだった。ロープで杭にくくりつけられた数人の男女が、兵士の姿をした男たちに銃をつきつけられているのが、その時のシーンだった。銃口がいっせいに火を吐き、撃たれた男女がぐったりとなったところで祖母が言った。

「あらあ、ひどいことするわねえ」

すると、煙草を吹かしながら寝ころんで新聞を読んでいた父は、テレビの方もけっこう筋を追っていたらしく、鬱陶しそうに答えた。

「いや、あれは芝居なんだよ」

それを聞いた祖母は、老人斑の浮き出たこめかみを一瞬ぴくっと動かしたが、依然、画面を見たままさらに言った。

「いやだ、残酷だこと」

画面は、その殺戮を目撃した主人公の女スパイが冷や汗を垂らしながら逃げるところに変っていた。父は、うるさそうに、

「いや、あれはね、芝居だから、あの人たちは死んではいないんだよ」

と言って、煙をふーと吐き出した。祖母は憤然とした口調でこう言った。

「お前、いくらあたしが明治生まれだからって、テレビでやってることが芝居だってことぐらいわかってますよ」

父は、それを聞くと、煙草を揉み消して、あわてて言った。

「お母さん、ちょっと待ってくださいよ。いくらなんでも、テレビでやってることが芝居だということを、お母さんが知らないなんて思っちゃいませんよ」

そして、新たにもう一本煙草に火をつけると説明をはじめた。

「僕が言ったのはね、このドラマの中でさらに芝居が行われているってことなんです。敵の一味が、あの主人公の女スパイに、反乱が起ったと信じ込ますために芝居をうっているんですよ。だから殺す方も殺される方も実は仲間で、あの男女は死んではいないんですよ」

それを聞いた祖母はまっ赤になって怒りだした。

「馬鹿にするでないよ！　あれは役者が芝居してるんだからほんとに死んでるんじゃないに決ってるじゃないかっ。あたしゃ、そんなことは知ってるよっ」
「いや、そうじゃないんだ。そうじゃないんですよ」
父は心外きわまるといった感じで、ちゃぶ台の上に身を乗り出して、真剣になって説明しなおした。
「ちょっと構成が複雑なんです。いいですか。そりゃ、テレビドラマは芝居ですよ。そのね、芝居であるドラマの中で、そのドラマの話のはこびの中でね、登場人物がさらに芝居をする場面があるということなんですよ」
「登場人物が芝居してるなんてあたりまえじゃないかっ。複雑だとかいって、あたしがよっぽど馬鹿だと思ってるんだね」
怒り狂った祖母は、ちゃぶ台の上を、どんと叩いた。
「そりゃ、あたしゃ無学な女さ。小学校しか出てませんよ。学校を出るとすぐ女中に出されたんだ。昔の女中の仕事なんてそれは辛いもんだよ。広いお屋敷に電気掃除機も洗濯機もないで、その頃は皆手でいちいちやったもんさね。下男だったお爺さんといっしょになればなったしゃ、女手ひとつでお前を大学にやるために働きづめだったんだよっ。勉強したくたって、する暇なんざこれっぽっちもありゃしなかった」

祖母は袂を顔にあてて泣きじゃくりはじめた。
「けど、けど、テレビが芝居だってことぐらい知ってるんだ。あーん、あん、あん」
父はどうしていいかわからずにオロオロして、それでもなんとかわからせようと必死の体だった。
「あのねえ、お母さん。よわったなあ。だから、違うんですよ。芝居の中でね、ドラマの筋書きの中でさらに芝居が行われていて、それは芝居だということを主人公は知らなくて、でも実は役の上で知らないだけなんだけど、それで、えーと……、その芝居の中でのそのまた芝居が、いや、芝居に主人公が芝居と知らずに、いや違う、芝居……えーと、芝居の中で……あれ……」
「いいんだよ。どうせね、あたしゃ無学な老いぼれさ。あーん、あん、あん」
茶の間は騒然となっていた。騒ぎを聞きつけたらしく、台所で昼食の後片付けをしていた母がとんできた。
「どうしたの、いったい。騒がしいわねえ」
「あっお前、困ってるんだよ」
父は助けを乞うように母を見た。
「どうしたんですの、お母さん」
母は、涙と鼻水でぐしょぐしょになったちゃぶ台につっ伏して泣き続ける祖母をいたわるように抱き起しながら尋ねた。そして、祖母の泣きじゃくりながらの説明を聞き終ると、同情と

怒りとを同時に表情に出して父に向かって言った。
「まあ、あなた。いくらなんでも人を馬鹿にしてるわ。今どき、テレビを芝居と知らずに見ている人間がいるかしら」
父は、頼みにしていた母が祖母側につくのを目前にして、あわてて説明を開始した。
「違う、違う。お母さんのは誤解なんだ。じっくり説明するよ。芝居の中でね、芝居が役者の……、いや、役者が芝居の中でその又芝居が……、いや、そうじゃなくて、芝居の……、あの……芝……。そうじゃないんだ、違うんだあっ！」
父は、事態の思わぬ発展に、筋道立ててゆっくり説明するだけの落ち着きを完全に失くしていた。
「芝居、芝居って、テレビが芝居だなんてわかってるって言ってるでしょっ。だいたいあなたは女だと思って馬鹿にしてるんだわ。なにかというと、女の考えはとか、女にわかるまいとか、女性蔑視の傾向があるようね。いいですとも。女は馬鹿よ。馬鹿だから、御飯の焚き方も、ワイシャツの洗い方もわからないわ。炊事も洗濯も賢い御自分がおやりになればいいんだわ」
母はまたたく間に怒髪天を衝いてしまった。
「あーん、あん、あん」
祖母は両手両足をばたつかせて仰向けになって泣き続けている。

「違うんだっ。そうじゃないんだあっ！」
父は、頭髪を掻きむしりながら、ありったけの大声で怒鳴った。表情を見ると泣き出す寸前である。その時、父の目が私の方に向けられた。父は、頭髪を掻きむしる手を止めて、私を見た。なぜ今まで気付かなかったのかと自嘲するように、そして、最後の砦の門前に辿り着いた敗軍の将のような顔で私に言った。
「おい、もう俺の手におえないよ。替わりに説明してやってくれ」
泣くとも笑うともつかぬ顔で父は私に助けを請うた。
「わかりました」
私が承知すると、父は、味方を得たせいか、
「ほんとにわからずやの女どもだ」
と、自信と余裕をやや取り戻したような言葉を吐いた。
「いいですか、おばあちゃん、お母さん」
私は説明しだした。
「あれはね、テレビドラマなんです。芝居なんです。だから本当に死んでるんじゃなくて……」

嘘つき少女

高橋裕司

彼とその妻は、食卓に差し向いで腰を下ろしていた。妻のいれた紅茶の香りがあたりに漂い、日曜の昼下りは穏やかであった。

音をたてずに茶碗をもちあげて、彼が口を開いた。

「おまえの家での躾が悪いんだ」

砂糖壺を引きよせていた妻は、眉をひそめた。

「責任のなすりつけはやめましょう。私達は相談しているのよ」

もっともないい分に、彼は口をつぐみ紅茶をすすった。

頭痛の種は、七歳の娘と三歳の息子の二人の子供のうち、娘のほうにあった。長く伸ばした黒髪の美しい少女は、いつ覚えたのか嘘をつき始めたのだ。それは、大人が困っているのを楽しむという、悪質な嘘であった。

彼らは娘の口車にたやすくのせられ、否応なく生活を乱されていた。たとえば彼は、妻の交通事故の知らせに職務を放棄し、急ぐあまりにスピード違反でつかまえられ、妻は妻で、スー

パーでの買い物に専念しているところを、わが家の火事という場内放送で失神させられる始末であった。

しかし彼らがこうも単純にだまされるのも、善良なればこそであり、また娘は、嘘の才能にあまりに秀でていたのである。タイミングの良さ、悲痛な声の調子、涙に疲れた表情、体のこきざみな震え、それらを器用に使いわける少女は、生まれながらの嘘つきだった。

もちろん彼らが、嘘をつくたびに娘をひどく叱ったことはいうまでもない。長い時では、二時間も説教したことだってあるのだ。しかし少女はまったく意に介さず、それどころか、嘘はだんだん巧みになりスケールを増していった。ごく最近の嘘は、まさにアカデミー賞ものの熱演であった。

なんとなくもの寂しい黄昏時を選んで、少女は泣きながら、しかも裸足で町内を歩き回った。善良であることをかたくなに信じこんでいる人々が、痛ましい少女をほうっておくわけがない。早速人々は少女に駆け寄り、やさしい声をかけた。少女はおびえた瞳で人々を見つめ、水鼻をすすりながら絶叫した。

「パパとママが死んじゃった」

刺激の少ない生活をしているだけに、人々は息をのんだ。少女はその反応を、ちゃんと確認してから言葉をつづけた。

「怒ったパパがママの首を絞めたから、ママも手に持っていた包丁でパパを刺したんだわ。血

がたくさんでて、何もかも血まみれに……」

仕上げた少女は、肩を震わして泣いてみせれば、それで充分であった。ひとかけらの疑惑も浮かべずに、人々は少女の家目指して走りだした。

彼ら夫婦はその人々を、皮肉にも健康な体で迎えねばならなかった。

町内の家を、一軒々々頭を下げて回った日のことを思いだして、彼は顔をしかめた。妻が大きくため息をついた。

「本当に困ったものだわ。あのままじゃ、下の子にも悪い影響を与えてしまう」

彼は右手で握りこぶしを作ると、吐きだすようにいった。

「いっそのこと、殴ってやったほうがいいんじゃないか」

「なんですって」

妻は勢いよく立ち上がり、彼を見下ろした。

「あなた、よくそんなことといえるわね。私があの子に、どれだけ暴力はいけないっていいきかせているか御存じないの。殴るなんて、あの子にはマイナスしかならなくてよ」

彼女は良識のある妻であった。そして彼も、良識を尊ぶ夫だったので、素直に頭を下げた。

「ごめん、つまらんことを口走った」

妻は椅子に座り直すと、残り少ない紅茶を飲み干した。彼はタバコを口にくわえた。

「すみませんでした。私ったら、つい声をあらだてたりして」

視線を落して妻がいった。何もいわずに、彼は妻の手を握りしめた。彼らは思いやりの深い夫婦であった。

「ねえ、あなた」

顔を上げた妻の瞳が、知性的に光った。

「いま私思ったんですけど、あの子には、お説教よりもお話しがいいんじゃないかしら」

「お話し……」

「そう。嘘をついてはいけないという教訓に満ちたお話し」

「あの、狼に食われた嘘つき少年の話しのことか」

「ええ。特にあの話しの、狼に食べられるところを強調して話してやるのよ。あの子は想像力が豊富だから、きっとおびえるわ」

「おびえて嘘をつかなくなるわけか」

妻はゆっくりうなずいた。

それはありふれた、しかしそれだけに効果のある方法であった。今頃になって、やっとこの方法を思いついた彼らを、馬鹿にしてはいけない。概して人というものは、お話しを子供の睡眠薬としか考えていないのだから。

「嘘をつくと狼に食われてしまう、それをあの子が本気にするかなあ」

彼は思慮深げにそうつぶやいた。

その時、玄関の戸が勢いよく開かれる音がしたかと思うと、少女が飛びこんで来た。少女は両親の顔を見比べながら、荒い息づかいでいった。

「パパママ、大変よ。進が池に落ちちゃった」

彼はタバコをもみ消した。妻は呆れ返って肩をすくめた。

「何してるのよ。早く助けに行かないと、進死んじゃうじゃないの」

彼は苦笑して、娘を諭した。

「陽子、ちょっとパパの話しを聞いてごらん」

少女はだだっ子のように体をゆすった。

「そんな暇ないわ。早くパパ、進を助けにいってやって」

「ああ、わかった。わかったから、その椅子に座ってパパの話しを聞くんだ」

少女はつまらなそうに鼻を鳴らすと、父親のいう通り椅子に座った。彼は娘の顔をまじまじと見つめながら、あの嘘つき少年の話しを語りだした。最初少女は、何気なく父の話しに耳を傾けていたが、話しが中盤に入り、いよいよ最後の件りに近づくと、息をひそめて身を乗りだした。

物語が終わった。

声を震わして少女は父親にたずねた。

「狼って、そんなに怖いの」

「ああ、とても怖いんだよ。形は犬に似ているけど、大きさは犬の三倍ほどもあって、眼はらんらんと輝き、年中腹ぺこでよだれをたらしているんだ」

少女は脳裏に、本物以上にすさまじい狼の姿を描いて、体をひくつかせた。

「ねえ、食べられるとき血はでたの」

「バケツに二、三杯はでたね。おかげであたりは、血の匂いがぷんぷんしたものさ」

生つばをのんだ少女は、救いを求める目差しを父親に向けた。

「嘘をつくと狼に食べられるの」

彼は乾いた声で答えた。

「そうだとも」

少女は椅子の上で、両の手を堅く握りしめて身をすくめた。体が小きざみに震えている。

彼が妻のほうにふり返ると、妻は片目をつむってみせた。彼は口もとで笑い、娘のほうへ向き直った。そして、黒髪を撫でつけながらやさしくいった。

「わかったね。もう嘘をついちゃいけないよ。陽子は、嘘はつかないね」

少女はしっかりうなずいた。

「陽子は本当にお利口さんだね。それじゃあ、また遊んどいで。日暮れまでには、進を連れて帰ってこないと駄目だよ」

少女はあたかも狼に追われているかのように、あわてて走っていった。それを見て彼は、声

をたてて笑った。妻が彼に身をすりよせ、耳もとにささやいた。
「あなたは、りっぱな父親ね」

少女は池の側に来ると足を止めた。そして首を伸ばすと、弟が石を積み上げて遊んでいるのを確認した。ハミングしながら少女は、何気なさそうに池の縁まで足を進めた。いまだに弟がひとり遊びに熱中しているのをかすめ見て、うれしそうな声をあげると、水面を指さした。
「ほら進ちゃん、あれを見て」
好奇心に目を輝やかせて弟は駆けより、水面をのぞきこんだ。すかさず少女は、その背中を強く押した。声もあげずに弟は池に落ち、少女は安堵のため息をついた。
「これで狼に食べられなくてすむ。だって嘘は、もう嘘じゃないんだもの」
少女はさわやかにほほえんだ。

白い黄昏（たそがれ）

大野隆之

さすがに出発前ともなると、不安が募った。なんといっても、二百万年後である。十年や二十年の未来とはわけが違う。もちろん毒ガスの渦だろうと、放射能の海だろうと、対処すべき設備はあるものの、今まで人類が歩んできた道程よりも遠いかなたへ行くのだから、不安にならない方がおかしい。

もし、タイムマシンが出来たなら、翌日の新聞をとってきて株式市場を見ようとか、競馬の勝馬を調べて来ようとか考える人間がいるが、そんな人間にタイムマシンが発明できようはずはない。その点俺は、ガキの頃から未来にあこがれていて、はるか何億年の過去からおくられてくる星の光に、ぼろぼろ涙をこぼし、長くてもせいぜい百年ほどの自分の命にいらだちを感じていたくらいである。そんな俺だからこそタイムマシンを製作するのに成功し、もっともちょっとした原理に気付けば製作自体は、バイクよりやや複雑な程度だったが、ともかく完成して、こうして出発にまでたどりついたのである。

目的地は我がタイムマシンの未来への限界即ち二百万年後である。大きく三回深呼吸をする

と、俺はおごそかにスイッチをいれた。二百万年後についていた。時間の中を移動するのに時間はいらないのである。測定してみると、温度や大気の組成は二百万年前と変らず、まあ地球にしてみれば二百万年など大した事はないが、恐れていた人為的現象、核戦争による放射能や公害による汚染などが全く無いのが助かった。おれは逸る気持をおさえきれず外にとびだしてしまった。

そこは、公園だった。

核戦争による焼け野原でも、巨大な未来都市でも、昆虫の支配する世界でもなく、なんのへんてつもない公園だったのだ。黒い犬をつれた老人がベンチにすわっている。俺はあまりのことに、しばし茫然としていた。すると老人が声をかけてきた。

「お若いの、やっと来なすったか、ま、今日来る事は前々から知っとったがの」

日本語だった。テレパシーなどでなく、もろに日本語だったのだ。俺はしばらくの沈黙の後、息もつかさずまくしたてた。

「あんたは、いったい何なのですか、人類はいったいどうなったんですか、どうして俺の事知ってるんですか、本とうにこれが未来なのか」

「ま、そう怒鳴らんでも聞こえるわ、あわてるでないぞ、ひとつひとつ答えてしんぜよう。まず、わしはただのおいぼれじゃ、お前の事は歴史の本で見た。人類はつまり、こうなって、これが未来じゃ」

「ぜ、全然答えになってない。どうしてこれが、未来なんだ」

「それじゃ、おまえさんは、どんなものが、未来じゃというんじゃ、白い公園と犬とおいぼれ、この他にどんな未来が、あるというんじゃ」

そう言うと老人は笑いはじめた。笑って笑って顔がとれるまで笑った。顔がとれても、まだ歯車が笑っているようだった。

犬は、

「ワオーン」

と勝ちほこったように吠えるとそれきり動かなくなった。あたりには白い靄がたちこめ、どうやら日没が近いようだった。

傘

牧野浩子

「今日あたり、降りそうね」

とノリコが言った。あたしが彼女といっしょに防音ガラスの窓をとおして空を見ると、東の空からむくむくと、色とりどりの傘雲がわきあがってきた。

「急いで帰らなくちゃ。バス停に着くまでに降り出すわ」

あたしたちは学習フィルムの入ったカバンをかかえて、学校を出た。コンピューター・バスのバス停までは、走っても十分かかる。それまでにあれが降り出したら……もちろんぬれるわけではないが、気持ちのいいものではない。

ちょうど半分くらい来た時、ぱさぱさと音をたてて降り出した——赤や、青や、紫や、緑や、水玉や、花もようの傘が。ノリコが、くすくすと笑った。

「今日の傘はいちだんとバラエティに富んでるじゃない？」

あたしは笑えない。傘が降るという事実には、どうしても慣れないのだ。

傘はパラソルチョコくらいの大きさで、あとからあとからいくらでも降ってきた。いったい

何でできているのか、それは地面に落ちると一分もしないうちに溶けて、しみこんでしまった。地面の低いところに、まだ溶けないでいる傘が、傘だまりをつくっていた。

いったいその傘が、どうやってつくられているのか、どうやって降らせているのか、だれも知らなかった。ただわかっているのは、何が傘を降らせているのか、ということだけだった。何が？　地球連邦のメイン・コンピューターが。はじめにA国で発明されたそいつは、すごいコンピューターだった。記憶バンクも、思考力も世界一で、おまけに感情を持っていた。世界中のコンピューターがそいつに連結された。メイン・コンピューターは、世界中の事務を、経済を、政治を、教育を、食物の供給を行なった。雨を自由に降らせたり、局部的に地震をおこしたり、ホーム・テレビやホーム・テレフォンに用事があればいつでも顔を出すことができた。

コンピューターは、つくられてから五十年、おとなしくしていた。しかし、そいつはだんだん退屈してきた。不幸にもそいつには感情——ユーモアのセンスがあった。世界中でいちばん優秀なコンピューターはいたずらを考えはじめた。そしてそれが仕事なんかよりもおもしろいことに気がつき、しまいにはそれに全力を注いだ。

世界のあちこちでおかしなことがおこりはじめた。X国では、三ヵ月間毎日毎日ジャムパンばかりを食べさせられた。ジャムパン以外の食べ物は、どういうわけか、X国まで絶対にとどかないのだった。しかし、ジャムパンだけは、ありあまるほど供給された。三ヵ月ののち、X

国人はみな、ジャムパン・ノイローゼになった。

Y国では、トイレットペーパーがこつぜんと消えた。それはいまだに続いている。もう、そのころにはコンピューターのしわざだということがだれにでもわかったが、手も足も出なかった。Y国人は抵抗しなかった。何をトイレットペーパーの代用にしているかは、さだかではない。

コンピューターにさからうことが、世界の破滅につながることは、みんな知っているので、すこしくらいのいたずらには目をつぶることになった。そのうちに、めったなことではだれもおどろかなくなった。コンピューターのいたずらは、日に日に手がこんできたが、生きていくのにさしさわりがあるほどではないし、これからもそうひどくはならないだろう。

このごろでは、コンピューターは雨のかわりに傘を降らすのだ。雨が降らないからといって、飲料水は供給されるし、別に生活に不便はない。しかし——しかし、傘が降っているところを見た人ならわかる。あんな光景は正常な人間にはたえられるものではない。それでもしだいにみんな慣れた。あたしは——どうしても慣れない。

雨のように（もちろん雨のかわりだから雨のようだが）傘が降ってくる中を、あたしとノリコはバス停まで走り、ちょうどやってきたコンピューター・バスに乗りこんだ。入口のそばの椅子に深々と沈みこんで、窓を見た。傘の降りはしだいに激しくなってくる。前の席の男の人二人が話し合っている声が聞こえた。

「そろそろ台風が来るころじゃないか？　アパートの補強をするように、うちのロボットに言っとかなくちゃ」

「早くした方がいいぜ。コンピューターは気まぐれだからな。いつ来るかわかりゃしない」

あたしは、暴風と共に飛んでくる傘を想像して、死ぬほどうんざりした。

あなた

釜田雅彦

あなたはいつものように、いつもの街を、いつもの会社へ行くために歩いている。あなたはその日、何故か体の調子が良くなく、時々生あくびをしたり、目をこすったりしている。しかし会社へは急がねばならない。あなたはだるい足の歩調を少し速めて会社へ急ぐ。やがて見なれた会社のビルが見えてくる。見なれたビル。見なれた街。見なれた景色。そこであなたは立ち止る。自分でも何故立ち止ったのかわからない。わからないがとにかくあなたは立ち止る。そしてつぶやく。

「どうも変だ」

体の調子が、でなく、見なれた会社のビルがどうも変な事にあなたは気づくのだ。しかし、しばらくは何が変なのかさっぱりわからない。わからないが確かに変だ。あなたはいつも見なれたその会社のビルをもう一度、よく目をこすって見る。

「わかった」

思わずあなたはつぶやく。ないのだ。

「ないぞ」

とあなたはまた、つぶやく。何がないって、それは知れた事だ。いつも会社のビルのむこうにそびえ立っている、見慣れて、見あきた「東京タワー」がないのだ。あなたはもう一度注意深く、別の方向から「東京タワー」のあった方角に目をこらす。こらしてはみるが結局、肩がこるだけでないものはないのだ。東京タワーがない。あなたは腕を組んで考える。

『これはどうも目をやられたらしい。そういえば、今朝から体の調子が悪いと思った』

あなたは会社へ行くのをやめて、急いで病院へ行く。もちろん眼科医のところへだ。白い椅子のおかれた、ガランとした室であなたは医者に目を見てもらう。医者はさんざんあなたの目をいじり回したあげく、いんぎんに言う。

「これと言って悪い所は見あたりませんが、いったいどうされました」

「いや、たぶん疲れ目だと思うんですが、どうも目がかすむんですよ。あるはずの物が見えないんです」

「ほう。いったい何が見えなかったんです」

あなたは少し頭をかきながら照れたように、答える。

「東京タワーなんです。いつも、その、会社のむこうに、はっきりと見えるんですが、今朝はかすんで全く見えなかったもんですから……」

医者はそばに立っている看護婦と顔を見合わせて、しばらくしてから、なおいっそういんぎ

んに、あなたに尋ねる。
「東京タワーって何です」
あなたはあきれる。そしてこの医者に何を言っても無駄な事を知る。そうだ、自分は狂っているに違いないと考えたからだ。あなたはその眼科医を出ると、急いでかなり大きな精神病院へ行く。そして日あたりの良い、明るい病室に通されると医者にむかって言う。
「先生、私は狂ってるらしいんです」
医者は笑って、あなたに答える。
「それでは、あなたは狂っていないでしょうな。ほんとうに狂った人は、自分は狂っていないと主張するものですからね。それにしてもどうしたんです」
あなたは医者の顔をじっとのぞきこみ、決心したように尋ねる。
「先生、先生は東京タワーをごぞんじですか」
あなたが予期したように、医者は変てこな顔をして首をひねり、眼科医と同じように、看護婦と顔を見合せてから尋ねる。
「それは何かのビルですか」
あなたは、がっくりと肩を落す。そして医者に言う。
「先生、私は今の今まで、その東京タワーというものが会社のビルのむこうに、高くそびえ立っているものとばかり思いこんでいたんですよ。どうです。私はまちがいなく、狂っているでしょう」

医者はなーんだ、という顔をして笑って答える。
「君ねえ。今まで、ある、ある、と思いこんでいたものが実はないなんて事は、いくらもある事だよ。金だってそう。女房の愛情にしたってそうだよ」
あなたはこの医者こそ、まちがいなく狂っていると思いながら病院を出る。とぼとぼと、又会社目ざして、歩き出す。いつもの道、いつもの会社……。しかしあなたは又立ち止る。あなたの会社のビルが、取り壊されているのを見たからだ。あなたは、呆然とする。その時、うしろからあなたの名前を呼ぶ声が聞えるので、振り返ると、そこには、同じ会社にいるあなたの恋人が立っている。あなたは急いで彼女に尋ねる。
「こ、これはどうした事なんだ」
彼女もまた、浮かない顔をして、あなたを見て言う。
「そうなのよ」
あなたは彼女が、どうでもいいような言い方をしたのが気に入らない。
「そうなのよっていうのはどういう意味だ」
「ねえ、お茶でも飲みにゆかない」
こんな時に何がお茶だと思う気持ちをじっとおさえて、あなたは黙って彼女の言葉に従う。そしてあなたは彼女といっしょに、いつもの道を通って、いつもの喫茶店に入り、いつものよ

うに大きな窓の窓ぎわに座って、コーヒーを注文する。
「おい、うちの会社はつぶれたのか」
あなたの彼女は、コーヒーをすすりながら、困った顔をしている。あなたは、だんだんイライラしてくる。
「どうなんだよ。なぜ黙っている」
「ごめんなさい。わたしあなたをだましていたの。あなたに近づくために、あの会社の社員のふりをしていたの」
あなたは又呆然とする。ああ、今日はどうも体の調子がおかしい。
「すると、おれを愛しているというのは、全部嘘だったのか」
「ごめんなさい。だけどそうなの。それからあの会社の人達も、みんなあなたをだましていたの」
「それはどういう意味だ」
「つまり、その、なんて説明したらいいのかしら、簡単に言うと、だましていたのは会社の人達だけでもないの。つまりみんながあなたをだましていたって言う訳なの。あなたの御両親はあなたの親のふりをしていたし、あなたの先生も、友達もみんなそのふりをしてあなたをだましていたの。わたしはあなたの恋人のふりをさせられたわ。その他にも、通行人のふりをした人や、満員電車であなたと乗り合わせた人のふりをした人や、いろんな人があなたをだましていたの」

あなたは驚きの余り口もきけない。しかしコーヒーを一気にすると、気を取り直して叫ぶ。
「これは陰謀だ。地球上のどっかで、だれかがたくさん人を雇って、おれをよってたかってだましているんだ」
あなたの彼女だった人は、コーヒーカップをいじりながらあなたに尋ねる。
「地球って何？」
あなたは又しばらく何も言えない。彼女のほうが、ハッとしたように又言葉を続ける。
「あー、思い出したわ。あなたがその上に住んでるって信じこまされていたものね。確か丸いんだって教えられてたわね」
「そ、それも嘘なのか」
「だって、あなたの住んでいる所は、小さな舞台みたいな所ですもの。きっと、あなたにこの世界はどうなっているんだ、なんて疑いを持たれると困るから丸いっていう事にしたんだと思うけど……」
「し、しかし、おれはアメリカにも行ったんだぞ。確かに、地球を半周もして……」
「東京のセットをニューヨークのセットに変えただけよ」
あなたはすべてに疲れて、ため息をつく。
ああ、今日はどうも体の調子がおかしい。

「もう芝居は終ったみたいね」
彼女が大きな窓の外を指差しながら言う。
見ると、あなたの見なれた東京の景色から、次々にビルや車や、道路のセットが取り除かれてゆく。そして、ついには何もなくなってしまう。それをあなたは黙って見ている。
「わたしもうゆかなくちゃ」
彼女がいすから立ち上る。あなたはあわてて、彼女の手を取る。
「お、おれはどうしたらいいんだ!!」
「ごめんなさい」
彼女はドアをあけて、何もなくなった外へ出てゆく。やがてこの喫茶店のセットも取り除かれ、あなたは何もない場所に立たされる。そこへ黒い衣装を着た舞台係がやって来る。そして、
「失礼します」
と言いながら、あなたの体のセットを、手、足、首、胴、の順に取り除く。あなたは、ほんとうに失礼な奴だと思いながら、結局なすがままにされるしかない事を悟る。ああ、今日は体の調子がどうもおかしい、とつぶやく事もできず、あなたには意識だけが残る。最後に照明係が、
「おつかれさまー」
と言いながら照明を消すと、あたりは全くの闇になり、何もなくなった。

なわばり

阿部龍一

趣味ではじめたカード占いであったが、今やどっぷりと道楽の域に浸り込み、友人、知人、親兄弟と手当たり次第に占いまくり、とうとう占うべき対象が見あたらなくなってしまった。
かくなるうえは、縁もゆかりもない、通りすがりの人々に頼るしか……。
ぼくはアルバイトも兼ねて、街頭に店を出す決心をした。
思いついたが何とやら。その日のうちに椅子やら机やら、なんたらかんたら持ち出して、近くの繁華街へと繰り出した。
人通りの多そうな場所に店を出すこと数時間。手相や人相と違い、西洋のカード占いを街頭でやれば、ぼくの魅力も手伝って、きれいな女の人が長蛇の列——なんて皮算用もむなしく、往きかう人は皆旅人なり。誰一人足を止めようとしない。
はじめの一時間。少々悪いカードが出てもよく言ってやろう、なんて思いつつ客を待った。こなかった。
そして次の一時間。どんなに悪いカードが出ても、幸福な未来を約束してやろう、なんて思

いつつ客を待った。こなかった。

さらに次の一時間。どんなに良いカードが出ても、死神の引導をわたしてやるぞ、とそう考えながらイライラしていると、ついに客が現われた。

男だった。それも見るからにガラの悪そうな。こりゃあ、死神の引導はやめとこうかな、なんて思いながら、

「な、何を占いましょうか」

ちょっと声が震えてしまった。しかし男はそれに答えず、恐い顔をして、両手をぼくめがけて突き出してきた。ぼくは手相見じゃない、と言う間もあらばこそ、男の手はぼくの胸ぐらをむんずと摑んだ。

「やい、てめぇ。いったい誰の許しを得て、俺のなわばりで店を出していやがんでぇ」

数分後、ぼくは裏通りの淋しい場所で、数人のチンピラさんたちにどつかれていた。最初の客がこいつらだから、落し前が払えない。それで、どつかれているのである。

それにしてもこのチンピラさんたち、それなりにプロ根性に徹しているのか、持ち前の考えのなさを十分に発揮して、よってたかって手かげんもせずに、頭、顔、胸、腹、背中と所かまわず殴るわ蹴るわ……。

そのくせぼくが動かなくなると、「やべぇ」、なんて言いながら、一目散に逃げてった。

くそ～っ、店出す前に占っときゃよかった、なんて思ってみても後の祭り。意識は次第に遠

のいていく。

そしてそれっきり、ぼくは死んでしまった。

しかし、これではあんまりじゃないか。死んでも死にきれない。くやしくてたまらない。何とかあいつらに復讐しなけりゃ浮かばれない。

かくなるうえは化けて出るしか……。

ぼくは好奇心も手伝って、幽霊になる決心をした。

善は急げ。あいにくと、最初に胸ぐらを摑んだ男の顔しか思い出せないが、まぁいいか、代表であいつをいじめたろ。なぁんて、全く、死んでもいいかげんな性格は直らんらしい。

便利なもので、頭の中でちょっと考えたとたん、ぼくはあの男の目の前を漂っていた。もちろん奴には見えない。ぼくの意志ひとつで調節できるのだ。うふふ、なるべきものは幽霊である。何だか楽しくなってきた。

男はと言えば、まだ何も知らないらしく、のほほんと街中をうろついてやがる。いい気な野郎だ。化けて出るには都合がいいが、警察はいったい何やってんだろう。前途有望な若者が、見るも無惨に殺されたっていうのに。

いろいろと不満を抱きながらも男のまわりを漂っていると、やっと出番がやってきた。

奴が繁華街から裏通りへと足を向けたのである。それも一人っきり。

おあつらえむきに、少し先には手頃な木が植えてある。柳でないのはちと残念だが、先回り

してあそこから化けて出ることにした。
何だかセルフサービスの仇討ちという気がしなくもないが、ともかく敵は目前に迫ってくる。うー、ぞくぞくしてきた。やるぞ。出るぞ。お化けだぞ～。
よし、今だ！
タイミングをはかって、木の陰から奴の前へ現われようとした時、ぐいっと誰かがぼくの肩を摑んだ。驚いて思わず振り返ると、そこにはいかにもガラの悪そうな男が浮いていて……。
次の瞬間、ぼくの頭の中には、ドスのきいた低い声が響きわたった。
「おい、にいちゃん。おめぇ誰に断って、俺のなわばりで幽霊やってんだよ」

羊を飼う日

M

今日僕は羊を飼っていた。だから、ひげなど剃りながら机の足にくくりつけてある羊を散歩に出してやることなどを考えている。
僕は今、ワイシャツの袖口のほころびをうまく隠そうとしながら、羊に向かってこんなふうに訊くことができる。
「孤独の反対語知ってる？」
「メエ」
だから僕は、こんなにも綺麗な無知をついつい撫でなでしたくなる。
僕は机の足から紐をほどくと羊といっしょに外へ出た。ゆっくり歩けるだろう。
「実は、ぼくだって孤独の反対語なんて知らないんだ」
「メエ」
僕は羊にしてよかった、などと思う。思いっきり蹴り上げても「メエ」やさしく撫でても「メエ」机のひきだしに前足をはさんで、そのひきだしをギュウギュウ締めたときも、

「メエメエメエメエ……」

僕は時々紐を強く引いた。公園にやってくると大きな池があったので羊が少し後ずさりしたからだ。

「そんなことしないよ」

「メエ」

この間、この池に蹴り込んだことをちゃんと覚えているのだ。

「もうしないよ」

「メエ」

羊はそれでも池の方に行こうとする僕に抵抗して後ずさりをする。この間、岸へあがろうとして岸へ顔をあげるたびに、僕が足の裏でその顔を池へと押し戻した。

「そんなことしないって」

「メエ」

あの時、公園に散歩に出かけてきていた人たちが僕のまわりに集まってきた。みんなも僕がやっていることをしたそうに、じっと見つめるのだ。僕は池に沈みそうな羊を、ちゃんと紐で引っぱっていたので、見物人のうち何人かを選んで紐を差し出してやった。

「どうも、うまくいかんね……」最初の紳士然とした中年は、紐をたぐると足を突き出したが、羊の顔をそれて口やら首やらを蹴るしまつだった。

「むずかしいな」その男が少してれてみせたので、僕は「きっと皮靴のせいでしょう」と言って慰めてやった。

「あたしもっとうまくやれるわ」突然、見物人のなかからそんな声がした。そこで運動神経の鈍い中年の紳士は、その少女にしぶしぶ紐と場所を譲った。きっとその中年はまだやりたかったのだろう。しかしその少女といったら！　まるでアクロバットだった。両足で、しかもそのリズム感といったら！　あとで話を聞いたところ二歳の頃からドラムをたたいていると言っていた。

「すごいすごい」見物人のほとんどが拍手を贈っていた。

「あたし、じょうずだった？」彼女は僕に紐を差し出しながら言った。僕は感激して何も言えなかった。

結局、僕は羊を連れて公園から外に出た。僕と羊を見て、この間のことを知っていたのだろう、近寄ってきた人たちはがっかりして散歩を始めたようだ。

しばらく歩くと道端に太い丸太が積んであるのが目に止まった。僕はそこまでいくと丸太に腰をおろした。

僕はその羊の頭をやさしく撫でた。

「メエ」

「愛してるよ」
「メエ」
「あはは……」
「メエ」
道の両側は二メートルくらい下に畑が広がっていた。きっと近くに製材所があるのだろう、こんなふうに丸太を積んで置いているのは。
僕は突然立ち上がって、その丸太を足で下の畑に向かって蹴落とした。ふたつ、みっつと畑に落ちるたびに鈍い音をたてた。
それから僕は歩き出した。ひとりだった。さっき羊に話しかけながら、そっと羊の首に縛ってある紐を、丸太のひん曲がった節にくくりつけていたからだ。
ぼけっとして歩きながら、丸太の落下音にまじって聞こえた骨の砕ける音を思い出して、僕は気分が良かった。
「孤独の反対語は『メエ』じゃないんだ」と言いたい気分だった。それから僕は、急におとなになったみたいに堂々と胸を張って歩いた。

逢魔(おうま)ヶ時

松林由美

今日は残業も無く工場も早仕舞だったので、マーケットに寄っても、いつもの電車より早目のに乗ることが出来た。学生達が帰るのには少し遅く、サラリーマン達が帰るには少し早い奇妙にからんとした車内。乗客は十人もいない。こんなに空(す)いた電車に乗ったのは何ヵ月振りだろう。そして窓の向うは素晴しい夕焼けが盛りを迎えていた。赤と朱とバラ色と金色が西の空で交り合い透き通った光を車内に投げ掛けていた。
真向いに坐っている男の姿は両頬が赤く透けて見えるのに、逆光のため真っ黒に塗り立てられていた。(誰だったろうか。確かに知っている男だ)昔、僕が小学生だった時、家に押し入った強盗がいた。とっさに振り上げた僕のバットに呆気(あっけ)なく倒れたあの男。それは夢の中の出来事の様にリアリティの無い思い出だった。男の顔よりも玄関に転がったリンゴの赤さの方が鮮かに目に焼きついているからだろうか。あの男はどうなったのだろう。あの男が今眼の前にいるのではないだろうか。
(え？　朝日町？　しまった二つも乗り越した)

あわてて立ち上った僕の膝からマーケットの袋が転がり落ちた。赤いリンゴがコロコロと転がってゆく。顔が赤くなってゆくのが自分でも判るが、仕方が無い、拾ってやるよ僕のリンゴどもめ。

リンゴをかかえて戻って来ると、黒い男はいなくなっていた。ほっとした。やっぱり違ったんだな。そうだとも十七年も前の事だったんだから。安心したら戻るのが面倒臭くなってしまった。あと四つ駅をすぎれば夕日ケ岡町。僕の生れた町。このまま乗って行こうか。時間はあるし、アパートには待っている人もいない。あの古い家々はどう変ったのだろう。こんなに近いのに引っ越してから一度も訪れた事が無い。

生々しい朱色の夕陽は沈んでしまったが、西の空はまだバラ色の雲に彩どられている。駅を出た僕の影は長く、妙な寂しさが僕を包んだ。逢魔ヶ時……街は黄昏の中で、ひっそりと静まりかえっていた。野良犬一匹通らない裏通りを影を踏みながら歩いていると段々不安の部分が大きくなってゆく。あの角のタバコ屋はまだ在るだろうか。自動販売機に変わってしまったりして……父の使いでよく来たのだが、三度に一度はおばさんのかわりに長い髪のきれいなお姉さんが出てくるので子供心にも心をときめかしたものだった。あの人はもうとっくにお嫁にいってしまったのだろう。何人か子供を作って一番上の子はもう中学生くらいになっているだろう。悲しい事だけれど、時の流れというのはそんなものさ。

タバコ屋は古い看板もそのままに在った。窓口には誰も居ない。呼び鈴のボタンを鳴らそう

と思ったが、やめた。

夕闇が迫ってきたので僕は駆け足で家に向った。(ヤッホー！　帰って来たんだぜ。十七年ぶりにしちゃあ、この辺は全然変わっちゃいないぜ)一気にそこまで行くと、家は昔の通りだった。古くて小さい僕の家。ノブを回すと鍵がかかっていなかったので小さな声で「こんにちは」って言って入ってしまった。小さな声でいったのは今住んでいる人が出て来なければ良いと思ったからで、何の用ですかなどと聞かれたりしたら困ってしまう。

玄関のフロアはピカピカに磨かれていて、タタキの角には下駄がきちんと揃えられている。父の下駄もそうだった。脇の下駄箱の上には季節の花がつつましく活けられている。母も、いつもそこには花をたやさなかった。花弁が一枚ひらっと落ちたので僕はついそれをうけとめた。その結果マーケットの袋はタタキに落ち、リンゴがまたもや飛び散り、いっしょに買った包丁がいやに金属的な音を響かせた。(刃が欠けたな)いそいで袋を開けてみると案の定、柄に近い所が小さく欠けていて、僕はがっかりした。

「ただいまー」少年が声といっしょに飛び込んで来た。野球帰りかグラブとバットを持っていた。「あ、お客さん?」

僕は呆然としてその少年をみつめた。まるで十七年前の僕とそっくりじゃないか。しかし、少年の方は僕の顔を見ないで右手を凝視していた。右手には鈍く光る包丁があった。(やばい！)僕は何とか説明しようと顔を上げた時、少年のバットがゆっくりと弧を描いて打ち降ろされた。

ひも

宮下ふみ子

何かにつまずいて思いっきりころんだ。見るとひもが落ちている。これに足をひっかけたのらしい。ひもを持ってぐいと引っぱってみると、片方の端は案外簡単にぼこっといって抜けてきた。短い木片のようなものに結びつけてある。もう片方を引っぱってみると、ぴんと張っているが、まったく抜けてこないわけでもない。地面にごく浅く埋まっているらしい。片方の端に結びつけてあった木片に巻きつけていってみると、少しずつ巻けることは巻けて、なかなか終わりにならない。あいかわらずぴんと張ったままで、ずるずると抜けてくるということはなく、深さも変わらない。地面のすぐ下、というよりも、地面そのものというくらいの感じだ。方向はほぼ一直線である。ぐるぐると巻いていくうちに、しだいに手の中のひもの玉が大きくなってくる。持ちきれなくなったので、地面に置いて雪だるまの要領でころがした。雪だるまならぬひもだるまはまるで雪だるまのようにどんどん大きくなってゆくのに、ひもは一向に終わらない。しかたがないからころがし続けていくうちに、目の前を横切ろうとした猫を巻きこんでしまった。犬も巻きこんだ。人も巻きこんだ。家も電柱もポストも巻きこんだ。山も川も

海も巻きこんだ。地面の上には何にも無くなってしまったがそれでもひもは終わらない。しかたがないからころがし続けていくうちに、ひもだるまの方が残りの地球より大きくなってしまったので、今度はひもだるまに乗っかって、地球の残りの方をころがした。そのうちに地球の方が手に持てるくらいの大きさになり、やがてひもの終わりが出た。初めて一息ついて、ひもの端を持ってあたりを見回してみると、まんまるの、真新しい、まっさらの地球である。そこに薄汚れたものが一つだけ乗っている。しかたがないから、今度は自分のへその穴からひもの端を引っぱり出すと、地球のひもの端と結びつけ、自分自身を巻きつけ始めた。やれやれ。

彼は死んで私はどうなる

平田暁

八月二十四日、三日前である。私の友人が突如死んでしまった。その二日前、私は或居酒屋で彼と会っていた。彼とは或女性との三角関係のもつれで、仲が絶えていたので会ったのは久し振りであった。だが彼は過去のことなど忘れたかのように元の親友として振るまった、そして、しきりに私の手首なんぞを摑んで金を貸してくれと懇願したりした。あの彼が死んでしまったとは、余りに唐突で今だに信じ難いような気さえする。

八月二十四日、午前二時、残暑のくすぶる夜、マンション五階の開け放した窓から彼は墜死したのであった。遺書はもとより、それらしき走り書き一つない。第一、動機が全く見当らないのである。警察は結局、寝ぼけて窓から落ちたのであろうと云うことで事故死と断定した。実際窓はしまいまできちんと開けられていたし、私としてもそう信じる他にない。

今し方小包みが一つ届けられた。差し出し人は死んだ彼からである。消印は八月二十三日、中は彼の日記帳である。私は彼の死に付いて何か分かるかも知れないと云う期待を抱きつつ、表紙と扉とを一気にめくった。原稿風になっている頁の半分近くが切り取られ、いきなり八月二十二日になっている。

八月二十二日　午後十時記

今日は面白いことがあったので一つ物語り風に書くことにする。内容も物語りかも知れないし全く事実かも知れない。判断は読む者に任せる。

男の顔は青白く、目は血走るがごとく充血して、唇は乾き切っていた。髪は真白と云ってよく、体全体骨ばった感じで年は分らない。この男と会ったのは、いつもの居酒屋の裏手にある喫茶店、「滅」であった。何の気なしに歩いていて出っくわした店だ。名前が変っているので暇潰しに入ることにした。中は煙草か何かのけむでボウッとしていて、暗がりの中に客が意外といるようであった。空いている一等奥の、ボックスになっている席に座った。メニューを手に取ったその時、後から肩をポンと叩く者がいる。振り向くとその男が立っていて、陰気な声で話しかけてきた。

「あなた、完全殺人のたねを買いませんか？」

「え？」

「絶対にあなた自身に罪が及ばずに、あなたの殺したい相手をこの世から消し去ってしまう方法ですよ、いや、高いことは言いません、モカを一杯、御馳走して下されば充分なんですから。本当です」

何やら訳が分らないが、その容貌に圧倒されたのと、何よりモカ一杯で退屈しのぎの面白い話が聞けそうなので、その方法とやらを聞いてみることにした。モカがやってくると、男は時間をかけて飲み干し、

「私が言うのは催眠術の一種と考えて下さい、ですからあなたは相手に事前に会うことになる、その時、他人に疑われるような態度をとらずに、ごく自然にやって下さい、後で疑いをかけられないとも限らないですから。やり方は、例えば相手に明後日の午前二時に死んでもらいたい場合は、こう云う具合に相手の両手首をしっかりと摑んで、心の中でこう唱えればいい……」

と言って彼は私の手首を摑んで、

「地獄の使者よ、この者の魂を捧げます、明後日の午前二時にこの者をお連れ下さい。私は四二二一九です。と、そして大切なのは、指定の日時は一週間以内と云うことです、一週間以内であればいつでも思う通りになります、あ、四二二一九はあなたの個人番号です、忘れないで下さい」

半信半疑ながら私は今日、一人の男に試みた。結果がどう出るか楽しみだ。君、死ぬ前にその相手に教えてあげるのも面白いかもね。この日記を誰かに見られたところで証拠は何もないことだし。

私は顔から血の気が引くのを感じている。何と彼は教えてもらっているつもりで、自分がかけられたのを知らずにいたのだ。自ら四二二一九、などと唱えて。そして本当に彼の術に効果があるとすれば、私は……。

花のみち

山本　唯

その路地の奥まったところで、夕暮れ、一人の少女が両ひざをつき、チョークで、いっしんに花の絵を描いていたことを、とりたてて気にとめる人は、いなかったに違いない。車もほとんど通らないその路地のアスファルトの上には、だいぶ以前から描いていたのだろうか、白い線でかかれた花が、少女の後方をいっぱいに飾っていた。それは、やわらかな曲線を持つ五枚の花弁と、中心にある雄しべ、雌しべの類、それと、しなやかに伸びた葉を持つ奇妙な花であり、それは今までに見た花のどれとも似ていながら、微妙に少しずつ異った印象を与える、いわば、〝花〟と呼ぶのがいちばんふさわしく思われるものだった。黒い路面に数多くの白い花が、見ている間にも、少女の息づかいにも似た腕の動作のうちに、生みだされ、咲きはじめた。少女は顔をあげることさえなしに、倦むことなく、同じ動作をつづけ、花は彼女の手から咲きこぼれ、やがて、その路地のほとんどを埋めつくした。そのころには、ときおり通りかかる人も、驚いた眼を向け、なかばあきれながら振りかえったりもしたが、やはり、薄暮れの道いっぱいに、白く浮きあがるように描かれたその花々の絵は、人目を引くものであったろう。

それから、その路地が、少し大きな通りと交叉するところまで、少女は花を描きつづけ、つと、立ちあがるとうしろを振りかえり、ひざをはたいて、どこかに向かって歩きさった。

つぎの朝、同じ道を通った人は、路地から大通りに、大きくはみだして昨日の花が描かれているのを見ることになった。川が海に流れこむように、大きな通りにまで押しながされたような花々……。数多くの人々が、朝、それらの花々の上をいぶかりながら、あるいは驚きつつも歩いていったが、もし、小一時間でもとどまり、それらの絵を観察したなら、なお、不思議なことに気づいたにちがいない。チョークで描かれたその〝花〟は、まるで、ほとんどそれとわからない微風でもあるかのように、花弁を揺らし、蕾を開き、茎を曲げていたのだから。陽ざしが高く、強くなるにつれ、あたたかい陽を受けた場所の花々は、ゆるやかに、その繁殖の速度を増し、昼すぎには、大通りを埋めつくして、道を左、右に別れて進みはじめていた。絵で埋った道路の上を、車が走り、人が歩き、あるいは家なみの影が斜めにかかっても、その花々は速度をゆるめることなく、ふえつづけ、その日の夕暮れには、じゅうぶんに、人々の興味の対象となった。ただし、その花は、摘むことさえできず、手をのばしても、ひいやりした固い路面に触れるだけだったし、チョークの粉で、手がかすかに白くなるだけだった。

花は細い、曲りくねった道にも伸びてゆき、数日のうちに、その街のほとんどの道は、花で埋めつくされ、それぞれが、眼に見えないほどゆるやかに揺れているのだった。そこを歩くときの不思議な感じは、どう言ったらいいのだろうか。足には、何の抵抗もないにもかかわら

ず、歩きはじめるたびに、その奇妙な花を、足の裏に感じる……。静かな道をまがるときには、茎と茎、あるいは葉と花弁のすりあうような音が聞こえてくる感じさえして、ふと足を止めることさえ、しばしばあった。それでも、道いっぱいの花の絵が、興味や好奇心の対象となっても、実生活のうえでは、車が走り、いそがしい多くの人々が足ばやにすぎてゆくことは、しかたがないことなのだろう。しかし、そんな人たちでも、夜、眠るときに、自分の街全体が、花の道で包みこまれているのを想像すると、奇妙な感慨にとらえられるのだった。そして、そのことを考えはじめると、「なぜ」とか、「なんのために」とかを問う以前に、やさしい沈黙がどこからか生まれ、花弁の曲線にでも沿うように、いつの間にか、眠ってしまっていた。じっさい、こまかく入りくんだ細い道でさえその花で埋まっていて、花の道を通ることなく、外に出ることは、もう、できなくなっていた。人々は毎日、それらのどれかをたどることで、名づけることのできない感じを体験として受け、それは、無意識のうちに、言葉や、動作や、感覚として表われているのかもしれなかったが、それは、ずいぶん後になって、このことを思いだしたときに感じたことだった。

花が人目を引きだしたのとおなじように、実際に多くの人々が、花の消えてゆくのに気づいたのは、徐々に消えはじめてから、だいぶ後のことだった。そのころには、その道を歩くことに、ほとんどの人が、不自然な感じを持っていなかったのだろう。白いチョークの花々が、それが来たときとは逆に、あの大通りに、そして、少女のいた路地に向かって、姿をしだいに消

していった。花々は、まるで、そこに吹いていた風が、急に強くなったとでもいうように、揺れながら、ふいに、チョークの白い粉となって、アスファルトや、コンクリートの上をすべっていった。それは、道を埋めたときと同じような速度だったろうが、消えてゆくときには、早く感じられて、そっけないとさえ思われた。数日のうちに、花は、大通りからも消え、最初の路地にもどり、そのころになると、名残りおしいような気持ちで、立ちよる人も、数多く見ることができた。そして、花は、いま、最初に少女がうずくまっていた奥まった一ヵ所に、わずかに一叢あるきりだった。一輪、一輪、花がその姿をくずし、わずかに白い粉となって消えてゆくのを、そこにいた誰もが、無言で見送った。そして子供がしゃがむと見えなくなるぐらいになり、両手でかくせるほどになり、やがて、最後の一、二本が揺れると、誰かが手を伸ばしてそれに触れようとしたが、その瞬間、かき消すように、その形をくずし、花は消え、あとには、冷えびえとした黒い路面だけが残されていた。

その後、誰かが思いだして道路にチョークでその花を描いたことがあったが、似ているようで、やはり、どこかあの花とは違っていると、それを見た誰もが思った。

成就

小林聡幸

一人の少年がいた。

詩を書くのが好きだった。彼はいつもノートを持ち歩き、いつでも、どこでも、思いついた時に、詩を書きつけた。一冊のノートが詩でいっぱいに埋められ、次の一冊もまた、感傷的な言葉でいっぱいに満たされ……、やがて、ノートは厚く積み上げられるようになった。

少年は書きためるだけでは飽きたらず、詩のノートを友人に見せるようになった。が、はじめは好奇心から読んでくれた友も、すぐにうんざりし、少年がノートを持ち歩くのを見てあざ笑うようになった。

そこで少年は、雑誌や新聞や、コンテストに原稿を送りはじめた。だが、それも芳しくなかった。彼の詩を取り上げてくれるものはどこにもなかったのである。それでも、彼はせっせと送り続けた。自分の作品が悪いのではなく、見る者に目がないのだと確信していた。一年たち、二年たった。実らぬ果実は彼に不満を鬱積させていったが、彼はあきらめなかった。そして、また一年。悲惨な思いである。しかし、あきらめない。何としても詩を発表するということが、ほとんど強迫観念のようになり、目的のためには手段を選ばぬとさえ思う。何としても。それこそ、石にかじりついてでも、悪魔に魂を売ってでも……。

その時である。

少年の眼前に悪魔が現れた。

「だれだ」

少年が問う。

「悪魔だ」

「何をしに来た」

「おまえの望みをかなえてやるために」

少年は一瞬迷う。だが、きっぱりと。

「ぼくの詩集を出版してくれ」

「願いはあと二つ許される」

「これ一つでいい」

「よかろう。そのかわり、おまえが死んだあと、魂はわたしのものだ」

わかっている、というように少年はうなずく。すると、悪魔は懐から、おもむろに一本のロープを取り出し、その一端を手近の柱にしっかりと結わえ、もう一方に輪をつくった。ゆっくりと少年の方を向いた悪魔は、突然、少年に襲いかかり、今つくったばかりのロープの輪を

少年の首に通すや否や、二階の窓から少年を外へ放り出してしまった。ロープはぴんと張り、少年は死ぬ。悪魔はその少年の魂をつかむと、いずこともなく消え去った。

それまで、快活で元気だった少年が突然、自殺した。両親も先生も悲しみのうちに、首をひねる。なぜ、自殺したのだろう。なんとも理解できない。すると、少年が書きためていた詩集が見つかる。彼は人知れず悩みをかかえていたに違いない。彼が何を考え、いかにして自殺の道を選ぶに至ったか、この詩を読めばわかるのではなかろうか。やがて、自殺した少年の詩集がマスコミの注目を集め、ある出版社から、少年の詩集が、思わせぶりな題名で出版される。そして、人々は、不可解な自殺の原因の一端でものぞき見ようと、不毛の活動を開始するのである。

いたい

西　秋生

「あ、いたッ。いたた……痛い」

またはじまった。

こころの奥でする舌打ち。それに被せて、呻く声が聞えてくる。夜ごと繰返される、姉の呻き声。

読んでいた本にしおりをはさんで、ぼくは煙草に火をつける。

本の頁を離れて顔をあげると、見飽きたアパートの室内が目に映る。郊外へ向う私鉄沿線の街、大都会の片隅のそのくすんだ街並みに埋没するモルタル造りの安っぽいアパート。四畳半の狭い部屋にぼくがいて、襖を隔てた六畳間には姉が暮している。そしていま、痛みを訴える姉の声が聞えてくる。

「入るよ」

煙草をもみ消して立上り、声をかけてから襖を開けた。

姉は、カーペットのうえにきちんと正座してすわり、上半身を傍らのベッドにうずめてい

る。見慣れた姉の後ろ姿。近頃ますます肥満してきて醜くなった姉の姿。断続的に聞えるくぐもった呻き声に、時折、突刺すような悲鳴が混じる。

ベッドの隅に腰を下ろして、ぼくは姉の背中をさすった。

「また痛むのかい」

姉は束の間、痛みに歪む顔をあげた。だが、ぼくを認めるとすぐまたベッドに顔を伏せる。

「……ありがとう。でも……いいの。放っといて頂戴」

ベッドのうえの、頭をおおう両手、そのあいだから聞える曇った声。

それきり、ぼくがなにを言っても姉はとりあわなくなった。姉の、痛みに耐えきれずにあげるわめき声と、肩の震え。ぼくはなすすべを思い付かぬまま、背中をさするのもやめてすわったままでいる。——いつものように。

姉の部屋の、若い女の子らしい飾りつけなどなにひとつされていない、むきだしのままの壁紙をぼんやり見ながら、もう一年になるんだな——と、ぼくはおもう。

大都会に就職したぼくを追いかけるように田舎から出てきた姉。彼女は都会で、たぶん生れてはじめて男に惚れた。けれども、じきに男は死んでしまった。姉の見ているまえで、暴走してきたスポーツカーに轢かれて、ごくあっさりと。姉が夜ごとの痛みに苦しむようになったのは、それ以来のことだ。

そこまで考えて、いつもの言葉をぼくは思い出す。

幻肢痛。——たとえば、事故で腕を切断する。すると、傷が治ったあとでも、痛みが走る。切り落とされていまはないその腕に、傷を負ったときの激痛が残っているのを覚える。そんな話をなにかで読んだことがある。治療のしようがない、そんな痛み。

姉がいま襲われているのは、彼女の目の前で死んだ男、かれののこした断末魔の痛みなのだ、という。姉のような痛みは、なんと呼べばいいのだろう。

ぼくは溜息をつき、煙草に火をつける。

姉は、激痛に身体をよじり、泣きわめいている。彼女の片手が摑んだシーツは皺だらけになり、のみならず爪が食い込んで切裂かれている。一年間、ずっとこのような姿勢で過してきた姉。

水をくんできて飲ませ、背中をさすってやると、それでも痛みはいくぶんやわらいだようだった。

「姉さん」

肩に手をまわし、シーツに押付けたままの彼女の顔をのぞきこむようにして、ぼくは言った。

「お酒でも飲まないか。そうしていたほうが痛みも忘れていられるだろう」

だが姉は、顔もあげないまま、大きくかぶりを振った。その姿は、幼児が駄々をこねているかのようだ。

「そうかい」鼻白むおもいでぼくは言った。「じゃ、ぼくはお酒を飲んでくるからね」
姉を放っておいてぼくはアパートを出、私鉄駅前の商店街にある焼鳥屋へ行って、その店が閉るまで酒を飲んだ。
酔った気持ちはしなかったが、帰途、足どりはいくぶんふらついていた。そうしてアパートの階段まできて、ぼくは立止った。——まだつづいている。姉のすすり泣く微かな声は、アパートの外にまで漂ってきている。ぼくは大きく、酒くさい溜息をつく。
部屋に入ると、ぼくは真直ぐに姉のもとへ行く。
灯りを消した暗闇のなかで、姉は相変らずうずくまったままでいる。痛みは薄らいできたようで、ただ泣くことはやめていない。惨めな姉の姿。
ぼくは乱暴に電灯のスイッチをひねる。
驚いたように顔をあげて、姉がぼくを見る。泣きはらして充血した眼。真っ赤になった鼻のあたま。ほつれた毛が鼻梁にこびりついている。
「姉さん。——いいかげんにしたら、どうなんだい」
ぼくは苛立って、とうとうわめいてしまう。
「……だって。だって……痛いの。身体がすごく痛むんだもの……我慢できないくらい」
「嘘をつけ。姉さんの身体が痛むわけないじゃないか」
「ううん、痛いの。だって……あのひと、自動車にはねとばされて……そのうえを轢かれたの

よ。わたしはそのそばに立尽していて……」
よく聞きとれぬ言葉をわめいて、姉はまたベッドに顔をうずめようとする。しかし、ぼくは彼女の両肩をつかみ、無理やりぼくのほうを向かせる。
酔いが突上げてくる激しい感情に身を任せて、ぼくは言葉をつづけた。
「いいか。よく聞くんだ、姉さん。——そのひとは、ほんとうに姉さんのまえで車に轢かれたのか」
姉はぼくの言う意味を理解できぬかのように怪訝な顔をしている。
「思い出せよ。そのひとは、ほんとうに死んだのか」
言葉を切ってすこし躊躇し……でも、とうとう言い放ってしまう。
「——姉さんをだまして、逃げたんじゃないのか」
きょとんとしていた姉の表情が一変した。眼が大きく見開かれ、口が絶叫のかたちをつくる。しかし、悲鳴は出てこない。両手は口を覆おうとして途中で止ってしまい、こわばったまま小さく震えつづけている。
「そうなんだよ」と、感情に押流されてぼくはつづける。
「姉さんは、男が交通事故で死んだと思い込むことで、自分を正当化してきたんだ。でも、もう一年も経ったんだよ。もうそろそろ猿芝居はやめにしてもいいんじゃないか」
姉はひと声もあげぬまま、目の前のカーペットに身体を突伏した。

沈黙。気まずい、長い沈黙。
それを払いのけるためにのみ、ぼくはなにかを言おうとして姉を見た。
しかし。
声は出なかった。
錯覚ではなかった。姉は……彼女の身体は、輪郭からぐずぐずとゆっくり崩れ落ちてゆくように見えた。そしてそれが身体の中心のほうへ徐々に進んでいったとおもうと——刹那のうちに姉の身体は消えてしまった。ちょうどシャボン玉を指で突いたときのように。
脳裡は怒濤が渦巻いたようになってぼくはなにを考えているのだかわからなくなった。惨めな幻影にすがって痛みに耐える、そのことだけが彼女の存在を支えてきたのだろうか——というおもい。それと、幻肢痛という言葉だけが脳裡をぐるぐると駆けめぐっている。
幻肢痛。……それにしても、一体なにがまぼろしだったというのだろう。
突然、胸の奥に痛みが走るのをぼくは覚えた。それは、だんだん激しくなっていきながら、いつまでもつづいていくようだった。

追われる

蓑虫研介

誰かが私を追って来る。いつも私の背中を求めて追って来る。だが、正体はわからない。いったいお前は誰なのか。
足音はしないが、気配でそれと知れるのだ。姿は絶対に見せないやつだ。
やつが追って来る。私は逃げる。知らない街だ。私はまっしぐらに駆ける。やつはまだ追って来る。私は角をいくつも曲がり、どんどん走る。ときどき振り返って見るが、やつの姿はない。それでも、私が歩き出せば、やつは確実に追って来るのだ。
走りながら、私は考える。私に恨みをもつ人間のことを考える。私に恨みを抱き執拗に追って来るやつ、お前はいったい誰なのだ。しかし、思い当たるやつはいない。
やつは諦めたのか、つと気配が消えた。私は速度を落とす。だが、やつは決して諦めたりはしないのだ。こっちの隙を見て、また追って来るにちがいないのだ。私には自分にも不思議なほどはっきりしたことなのだ。それは運命なんだと、私は思うようになっていた。
私は年をとった。このごろではやつが追っているのを忘れる時もある。しかし、そんな時こ

そ危険なのだ。やつはこっちが忘れている時を狙って、じっと息を殺しているのだ。

ふいに私の足が早まる。本能的に早まる。私の隙を見てか、やつはまっしぐらに追って来る。私は、若者の時のように走り出す。まだまだおれは走れるぞ。悔しかったらおれに追い着いてみろって言うんだ。

やつは、不満ながら諦めたようだ。私は、しばらくはゆっくりした足取りに戻る。私はなお考えながら歩く。私が年をとったのだから、やつも年をとっただろう。それにしても、驚いたやつだ。昔と変わらぬ執拗さで追って来るとは。一度その面を見てやりたいものだと思う——どうせ老いに汚れた醜悪な顔だろうが。歩いているうちに、私の追跡者の顔はますます醜悪さを増していくのであった。

長年、私はやつに追われて来た。最近では、夢の中でも追って来るようになった。夢の中では、獣のように息遣いも荒々しく追って来るのだ。

私は夢中で逃げる。見知らぬ街を、ただ逃げに逃げる。やつも一所懸命に追って来る。やつは、私に休む暇を与えずに追って来るようになった。やつは年をとって焦っているのだろう。おれは絶対やつには負けないぞ。闘志を掻き立てて、私はひたすら走るのだった。

私はずいぶん年をとった。逃げながら考える。昔はもう少しましな走り方をしていたのに、近ごろはめっきり足も弱くなったようだ。われながら頼りない足取りだなと思う。相変わらず追って来るやつの方はどうなんだろう。どうもやつは衰えを知らず、したたかに私に迫って来

るようであった。まったく嫌なやつだ。私は捨鉢になっている自分をどうしようもなく思いながら犬のように走っていた。

私は疲れていた。走る気力を失っていた。しかし、私は痛いほど背筋にやつの視線を感じた。やつは追って来たのだ。

私はやっとのことで細い路地に逃れた。続いてやつも路地にはいって来たようだ。私は最後の力をふりしぼって走る。だが、路地は行き止りだった。私は呆然と立ちすくむ。やつの足音はいよいよ高く、私のすぐ後ろまで来ている。

ふと目の前に大きな扉があるのに気づく。私はそっと手を伸ばして扉を押す。扉はきしみながら少し開く。私は急いで体を斜めにしてその隙間にねじ込む。中は暗い。扉の隙間から洩れる一条の光が頼りだ。

私は徐々に足を伸ばす。階段が下に続いている。私は階段を降りる。後ろを振り返る。追手ははいって来ていないようだ。やつは断念したのだろうか。私は少しほっとして一歩一歩ゆっくりと階段を降りる。やつはもう追っては来ないと感じた。いや確信していた。

階段を降りきった。安堵感が私を包んだ。私は初めて前方のうすぼんやりした空間に目をやった。

そこに、ひとりの若者が立っていた。私はしげしげと若者の顔を見た。かれはその青白い顔に気恥しげな笑みをたたえていた。私に対して親しみを示しているまなざしであった。私は、

以前どこかでこの若者に会ったことがあるような気がしていた。だが、はっきりとは思い出せないのである。しかし、この若者こそ、長い年月にわたって執拗に私を追い続けて来たやつにまちがいなかったのだ。しかし、若者は醜悪さとはほど遠く美しかった。

勇気をふるって私は言い放った。

「お前は誰だ。どうして私を追っているんだ」

若者は静かな調子で口を開いて言った。

「わたしですか。わたしはあなたの青春なんですよ」

私はあっけにとられ、体が石のように硬くなっていくのを感じていた。何と言ったんだ。

若者は言い続けた。

「あなたが忘れたもの、だいじな忘れ物を早く届けなければと思い立ち、あなたを追ったのですよ」

私はただ黙りこくって聴いていた。

「あなたはどうして逃げたりしたのですか」

私は眼前が急に暗くなり、力を失った私の体がその若者に覆いかぶさるように傾いていくのをおぼろげに感じていた。そして、意識が消失する直前に扉のしまる音を聞いていた。それからどのくらい時が過ぎたのだろうか。

あの時以来、若者はもう私を追って来ないのであった。しかし、今度は私があの若者の姿を

求めて追う破目に陥っていたのだったが、若者は街のどこを探してもいないのであった。しかし、希望を捨ててはいけない、いつかきっと街角でぱったりあの若者に出会えるかも知れないのだ。私の忘れ物を持つ若者に。

私はすっかり萎えた足をさすりさすりして、弱音を吐くなと叱咤しながら、きょうも若者を求めて街に出て行くのだ——あの若者に負けない執拗さで。

殺人鬼

大月伸平

男は毎晩同じ夢を見た。ナイフを振りかざす殺人鬼の夢だった。

その日の夜もまた同じ夢を見た。不敵な笑いを浮かべた殺人鬼が、断崖絶壁に、男をジリジリと追い詰めた。男の目と鼻の先で、鋭利な刃物が、ブンと唸った。あと一振りで、ナイフは確実に男の心臓を突き刺す。

しかし男は、この夢をもう何十年も見つづけていた。だから、如何すれば殺人鬼から逃れられるか、十分に心得ていた。殺人鬼のナイフが、男の心臓に触れた瞬間、断崖絶壁に飛び込みさえすればよかったのだ。

ナイフが心臓に触れた。男は目を閉じ、谷底めがけて身を投げた。死んでしまうという後悔と、助かったという安堵が交差するなか、男の意識はみるみるうちに薄れ、やがて目覚めた。男は布団の上に身を起こし、舌を出し、殺人鬼をせせら笑った。

「ここまでは追いかけてこられまい」

その日の夜もまた同じ夢を見た。不敵な笑いを浮かべた殺人鬼が、断崖絶壁に、男をジリジ

リと追い詰めた。男の目と鼻の先で、鋭利な刃物が、ブンと唸った。あと一振りで、ナイフは確実に男の心臓を突き刺す。その瞬間、男は思った。もうこの夢にも飽きた、と。男は殺人鬼と相対した。ナイフが男の心臓に触れた。飛び降りるなら今だ！　だが、男はそのままじっとしていた。どうせ夢なのだから、どちらに転んでも助かる、それに一度ぐらい殺されてみるのもわるくはない、半ば覚めかけた意識のなかで、男はそう考えた。

殺人鬼のナイフは、プスッと鈍い音をたて、男の心臓を突き刺した。激痛がはしり、赤い血がドクドクと噴き出し、快楽にも似たなま暖かい感覚が左胸に伝わった。

死んでしまうという後悔と、助かったという安堵が交差するなか、男の意識はみるみるうちに薄れ、やがて目覚めた。男は布団の上に身を起こし、舌を出し、殺人鬼をせせら笑った。

「せっかくチャンスをやったのに」

その日の夜もまた同じ夢を見た。ただ一つ、殺人鬼の顔だけが違っていた。

男は尋ねた。

「いつもの奴はどうしたんだい」

その殺人鬼は答えた。

「奴はもういねえよ」

「なぜだい」

「奴の夢を見る男が、昨夜殺されちまったのさ」

ある遺言

横関洋

父は、流離いのギャンブラーであった。

流浪の果てに大往生を遂げた時、粗方の予想に反して、厖大な遺産を残した。香典さえも、何故か巨額が集まった。今にして思えば、父は死の直前までギャンブラーだったのだ。そして、死後五年になる今でも、ギャンブラーであり続けている。

「あと四十五分になります」

立合人が、機械的な慇懃さで告げた。

「わかってる、いま考えてる所じゃないか」

僕は、少し腹立たしげに言った。ここで失敗をすれば、また一年間待たなければならない。もう五年も待たされているのだ。いい加減に、こんな事は終わりにしたかった。慎重かつ冷静に、そして科学的、心理学的な分析と、宇宙的霊感をもって、決断を下さなければならない。僕は、あたりを圧するような黒檀のテーブルの上に置かれた、三通の封筒をじっと見つめていた。

「あと三十分になります」

今度は弁護士が、職業的な抑揚をもって告げた。

「わかってるって言ったじゃないか、静かにしていてくれ」

僕は、いささか興奮しながら言った。

冷静にならなければいけない。三通の封筒のどれか一通が、遺産相続に関する遺言状なのだ。それを見つけない限り、僕はあらゆる遺産を受取ることができない。そしてその封筒は、一年に一通だけしか開封することができなかった。

「思えらく……」

突然、弁護士が独り言ともつかずに言った。その言葉にはいつもの抑揚がなく、いくらか上擦った様な声だった。

「御父上は、天才だったのではないかと考える様になりました」

「実は……」

と今度は立合人が言った。

「私も、今そのことを考えていました」

その言葉にも、いつもの慇懃さはなかった。

「静かにしてくれ」

僕は、力なく言った。父の才能を一番理解しているのは、他ならないこの僕なのだ。いままで、どう考えてみてもそれとしか思えない一通が必ずあった。しかしその反面、絶対にそれではないという懸念が、いつもつきまとった。そして最後には、どうしてもその一通を開けてしまうのだ。

「あと二十分になります」

ふたたび弁護士が、いつもの抑揚を取り戻して言った。僕は、無言でテーブルの上を見つめていた。

左側の封筒は、厚すぎる。いかにも遺産目録が収められていそうなその厚みが、わざとらしかった。真中の封筒は薄かった。中に何も入っていないかの様なその薄さが、かえって気になった。右側の封筒は、その中間的厚さだった。いかにも遺産相続に関する書類が入っていそうだった。しかしその封筒は、その遺産の厖大さに比べて、いかにも無造作にあつかわれた跡があった。

「あと五分になります」

立合人が、いささか緊張した面持ちで告げた。

「真中の封筒を開けて下さい」

遂に、僕は決断を下した。

「まだ、五分ありますが」

立合人は、声を上擦らせて言った。

「もういい。早く僕の気が変らないうちに開けてくれ」

僕は、興奮していた。

「さあ、早く」

立合人は、いつもの慇懃な動作で真中の封筒を手に取ると、それを弁護士の前に置いた。

「実は」

立合人は、力なく椅子に腰掛けながら、今にも泣出しそうな声で言った。

「私も、これではないかと考えておりました」

「実を申しますと」

今度は弁護士が、感激に瞳を潤ませ、震える手に純金のペーパーナイフを握りしめながら言った。

「私も、この封筒が開けたくて仕方なかった」

息づまる部屋の中、弁護士の手によって厳かに封が切られた。荘重なこの儀式も、今その終(しゅう)

焉を告げようとしていた。封筒の中から取出された一枚の紙には、次の様に書かれていた。

「スカ」

死相

新屋健志

今日、おもしろい話を聞いた。夜中の零時ちょうどに鏡を見ると、自分が死ぬ瞬間の顔が映るというのだ。何年、何十年か先の顔がその時だけ映るのだそうだ。もちろん迷信だろうけれど、ぼくはこんな話を聞くとすぐに試したくなってしまう。

あと十秒で零時。九、八、七、六、五、四、三、二、一……

鏡を見る。いつものぼくの顔が映っている。零時ちょうどのぼくの顔だ。

まてよ。零時ちょうどの？

と、いうことは……

あとがき

星　新一

予選をやった講談社の人も、そのあと三百七十二編を読んだ私も、大変な仕事だった。その苦労については前回の本のあとがきで書いているので、くりかえさない。かなりの日時と精神的な労力を費した。いい作品を見落さない注意と、なぜこれを採りこれを落したか自己をなっとくさせることが必要なのだ。模範答案というものがあるわけでないから、採点も容易でない。

しかし、その一方、ある種の興味というか、楽しさというか、そういうものもある。既成作家の書いていないようなものに、どこでぶつかるかわからない。

予選でどういうのが落ちたのか私は知らないが、聞くところによると、一般的に昨年よりレベルが上っているという。だが、通過作にくらべ、一歩およばずだったのだろう。編集の仕事にたずさわり、小説を読みなれている人たちの判定だから、信用していいというべきだろう。

タテ書きに限ると応募条件にあった。ヨコ書きは規定違反で、失格である。それから、これ

は応募条件ではないが、原稿は中央で折ったりせず、そのまま重ね、右上端をホッチキスまたはクリップでとじるのが常識。担当者が助かります。

今回、ひとり一作に限るという枠をはずしたので、何編も同封してきた人もいたらしい。五十編もまとめてというのもあったとのこと。しかし、そういうのは損である。予選段階で同士討ちとなり、残るのはせいぜい二、三作となってしまう。すごいとは思うが、それだけの気力を一作に集中すべきだ。最後まで残る作は、入魂という感じを持ったものだ。

誤字の多いのには、予選の人たちも私もねをあげた。「お知える」「寝むる」「意気のいい」「公信所」「労れる」「時件」「警視総官」「週間誌」「遇然」など、まちがえやすいとはいうものの、選考関係者にいい印象を与えない。予選の人たちの「辞書をひくように」との声を伝えておく。長編でなく、ショートショートだ。国語辞典ですべての漢字を確認しても、そう手間はかからないはずである。優秀作には、さすがに誤字が少ない。

まあまあの文字で、最後に「乱文乱筆お許し下さい」とあったのには笑わされた。よけいなことは書かないほうがいい。字は読めるように書いてあればいいのである。

今回、目立ったこと。前回の入選作に「最高の喜び」という一枚にもならぬ作品があった。十年に一度といってもいい傑作である。それを読み、こういうのでもいいのかと、その安易な亜流がどっと集った。

一枚以下でもいいのだが、十枚に近い充実さと新鮮さを秘めたものでなくてはならない。そ

の点「最高の喜び」以上の出来のはなかった。私はよく知らないが、深夜ラジオ番組への投稿というのは、そういうのかもしれない。悪くはないが、バリエーションめいていて、軽いのである。といって、選考方針を変えたことを意味しない。あっというアイデアでストーリーとのバランスがとれていれば、一枚の作品でも大歓迎である。

さて、何回も読みなおした末に私のきめた優秀作は、左の十二編。掲載順に並べると。

「人魚の日」
「階段」
「花火」
「可愛い誤算」
「念力」
「不条理な夜にしどけなき猫」
「いまに分る」
「DOY」
「ある日突然」
「あなた」
「成就」
「いたい」

そして、このなかの「花火」と「DOY」の二編を最優秀作とした。

それらに触れながら、選考していて思ったこと、関心を持ったことなど書いてみる。

まず、年齢。若い人が多い。十九歳が最も多く、十代の人のが五一・四%（前回は四七・一%）である。しかし、本書収録の作者についていえば、十五歳から五十三歳まで含み平均二五・一歳。優秀作の平均は二六・一歳。つまり、十代の人のにはコント的な軽いものが多く、それは残らなかったというわけだ。

また、今回は作者の年齢をいちいち記さないことにした。問題は作品の出来である。この若さでというのが観賞の助けになっては、アンフェアである。ごく少数だが、年齢をいつわっているらしい人もいる。あくまで作品本位だ。しかし、この募集が今後もつづき、新人賞的な性格をおびたものとなれば、年齢や職業をあきらかにすることになるだろう。

「人魚の日」

ストーリー、文章ともによく、すっきり仕上っている。人魚というありふれた題材を、うまく進展させている。文句なしに合格。

「階段」

作者は昨年も予選に残った人。異様な話を作りあげたものだ。デパートという近代的なところを舞台にしたのがきいている。

「花火」

なぜこれが最優秀作かとなると、その解説は長いものになる。しかし、第一印象がよく、読みかえすうちに、ますます心がひかれた。私が東京うまれで関西弁に弱いということを割引いても、ぬきんでている。シュールなイメージで、私にはこういうのが書けないということもある。特別に年齢をあかすが、二十六歳である。

「可愛い誤算」

読みとばすと気づかないかもしれないが、ラストの三行、衝撃的である。今回こういうタイプのが目立ったが、それに関してはあとで論じる。

「念力」

どっと集った一枚物のなかで、これは異彩をはなっていた。語り口にも味がある。さりげなく読ませ、あれっと思わせる。今後、こういうのがもっと出てくると面白いのだが。

「不条理な夜にしどけなき猫」

印象は稲垣足穂（たるほ）的である。しかし、亜流ではなく、その影響を受けながらも、独自な世界を作りあげている。十年前だったら、こういうのは書かれることも、読んでうなずく人もいなかったろう。ショートショートの分野は進歩しているのだ。

「いまに分る」

これも今回の特色となっているショッキング物のひとつ。私の好みではないのだが、ひとつの完成を示している。

「DOY」

もうひとつの最優秀作。ファースト・コンタクト（はじめての接触）物だが、こんな扱いがあったとはね。最近しばしば「SFは絵だ」という言葉が使われる。私は全面的にそれを支持していないが、よくできたSFは絵になってしまっているというのはたしかだ。この作も「花火」も、イラストのつけようがなく、ないほうがよく、それでいて情景が伝わってくるのだ。

十八歳。

「ある日突然」

アメリカのミステリー雑誌には、投稿物というべき作品が時たまのる。編集長との往復書簡といった形の短編のことだ。この今回の予選通過作にも、応募物とでも呼ぶべきものが多かった。書いてみたい、だが、なにを書いたらいいのかわからない、そうだ、応募をテーマに書いてみようという心理経過であろう。たいてい、出版社、選者を作中に引き込もうと試みる。うまくいけば面白いのだろうが、あいにくと私はテレビに出演せず、個人的イメージが定着していないのだ。

そんななかにあって、この作品は作者自身を扱うという逆手を使い、成功している。なんでも、ひとひねりしてみることだ。そのいい例である。もっとも、応募物と意識して書いたのではないようだが。

「あなた」

なぜか今回、自分以外すべて幻影テーマのものが多かった。だれも、ふとそんな気になることがあるのだろう。外国の作品に先例がないわけではない。しかし、新しい扱いでもっと書かれていいと思うし、書きたい人が多いとなると、ひとつはとりあげておく必要がある。うまくまとまった作品。次回から、このテーマでは、これを超えたものでなくてはならない。

「成就」

悪魔物というより、冷酷テーマというべきだろう。私の好みではないが、すごい話で、鋭い風刺がある。なぜか私は、三島由紀夫を連想した。作者の狙いがそこにあったのかどうかわからないが。

「いたい」

ひねりのきいた作品である。アイデアも珍しいし、ストーリーの展開もいい。高度な完成品といっていい。

そのほか、コメントを加えたい作品は多い。どれにも私の短評が書き込んであるのだ。しかし、それをやったらきりがない。四つほどにとどめる。

「公園で……」

すごく短い。なにやら、あやしげなムードがある。アイデア・コント的のがあまりに多すぎ、こういうのが引き立って見えたといえそうである。

「食料危機」

年末に私は「現象」という作品を書いた。そのあと、予選通過作がとどけられ、この作品を見て、似た部分があるのに気づいた。書いたのは、この人のほうが先である。つまり、この作品はプロ級というわけだ。

「悪魔講」

昨年、ネズミ講の被害者が話題になったせいか、それにからませた話が、かなりあった。その代表というわけである。そのくせ、インベーダー・ゲーム物はほとんどなかった。

「白い黄昏（たそがれ）」

じつは私、この作品がよくわからないのだ。しかし、なにかあるらしい。そういうのが毎回ひとつは残る。タイムマシン物や未来物をひととおりふまえ、あえてこれを書いたようだ。心象風景か。絵になっているのである。

さすがにSFの代表的小道具、タイムマシン物も多かった。しかし、すでに大量に書かれていることも知っていてほしい。時間を停止させる装置の出てくるのが、いくつもあった。すべての停止だけではだめで、だれかを例外として、はじめてお話となる。しかし、手塚治虫さんが「ふしぎな少年」で、もう各種のストーリーを作ってしまっている。

各宗教いりみだれ混乱テーマというのも目立った。つまり、死後、キリスト教的天国、仏教

的極楽など、各方面から引っぱりだこというたぐいである。日本の神も加わったりする。ねらいはいいのだが、キリストの扱いがうまくない。キリスト以前に天国はなかったのかということになる。天使とすればいいのだろうが。

そのほか、胎児を主人公にしたもの、画一教育や受験を風刺したもの、未来社会で危険やスリルを金を払って楽しむものなどが、三編ずつぐらいあった。そして、もう少しくふうすればよくなるのにという、惜しいものが多かった。たとえば、未来社会の泥棒が「金を出せ」ではおかしいのだ。キャッシュレス社会のはずで、金以外のものを狙うとか、なにか処理されていればすっきりしたのに。

とにかく、本書収録の作品は、みな高水準である。優秀作など、プロにも書けないようなものもある。それはつまり、投稿しようとするからには、いくらかの資質がなければならない。これは最低の条件。そして、これらの作品は、資質プラス運である。いいアイデアを思いついたという、一種のツキも加わっているのだ。

プロの作家はいつもツキに恵まれているわけでなく、資質をもとにし、努力と苦しみと気力とで、なんとか書きつづけているのだ。だから、プロ以上の作品がここにあってもおかしくない。

以前にある大学教授の、ふと口にした言葉を思い出す。「入試で、できる人が合格できないことはある。しかし、できない人が幸運だけで入ることはない」

そうだと思う。収録にならなかった人も、あきらめないで下さい。なにかのかげんでアイデアを思いついたら、優秀作クラスのものが出来ていたかもしれないのだ。また、活字になった人は、自信を持って下さい。才能の証明である。前回につづいて掲載になった人が、二人いる。

ここらあたりで、全体的感想。こういう企画は回を重ねるにつれて型にはまる傾向を示すのではないかと心配していたが、それはまったくなかった。大きなちがいをあげると、前回はどこかおさなさを残しながら、楽しげなムードが支配的だった。

それが今回は、死に関連したものが、むやみと多いのである。あっさりと殺し殺される話が多いのに、読者も気づかれたと思う。しかも、どぎつい残酷さをともなわない、いとも簡単な死。

こういう傾向がいいのかと考えさせられた。正直いって迷った。しかし、小説は社会の反映である。肉親殺しなどの事件が、新聞の社会面をにぎわせた。その延長での作品が書かれて当然だし、完成度を示していれば、残すべきだろう。そのため、本にする時の排列に苦労したが。

生理的嫌悪感を強調した作品があった。まるで救いのない暗い作品もあった。現在の選者の心境では、これらは採らなかった。

いわゆるSF的アイデアが出にくいので、死を扱ってしまうのかもしれない。いちおうショ

ッキングな効果が出せるのである。しかし、これからどうなるのか。昨年度、既成作家も少年の親殺しの話を、何人も書いている。こうなると、もう、またかで、なんとも思わなくなる。それ以上に刺激的となると、よほど新手を考えないとならないわけだし、現実の事件も発生しているとなると、小説でのその方角はゆきどまりか。

考えてみると、前回は賞として海外旅行がついており、死のテーマでは応募しにくかったのだろう。それが今回、あふれ出てきた。望ましいことではないが、いいものはのせることにした。しかし、次回となるとそれらの亜流はだめということになり、さらにくふうが要求されるわけだ。これらの逆を狙う人も出てこよう。

また、前回とのちがいのひとつに、老成ムードがある。平均の二十五歳が若いのかどうかは断言できないが、みな、うまく書いている。いいことだろう。

読者のなかには「星新一の作風とちがう作品が多いじゃないか」とお思いの人もあると思う。しかし、これは私の短編集ではないのだ。前回の入選作「できすぎ」や「最高の喜び」などは、初期の私の作風に似ている。内心では大歓迎なのだが、ああいうのは容易に書けない、書きにくい時代になったことも、私はよくわかっている。

二十年ほど前にある雑誌でショートショートを定期的に募集したら、SF的アイデアのものばかり集った。それが現在では、バラエティに富んできた。前回はムード派が続出したし、今回は死と関連したものが出現し、どう名づけたらいいのか「花火」のような収穫もあった。

なにも私の作風に合わせることはないのだ。自由に書いてこそ、いい作品がうまれる。将来に期待している。

今回で二冊目というわけだが、このたぐいの本は外国にもないのではなかろうか。私も選考のしがいがあったというものだ。最後に進行に尽力いただいた講談社の宍戸芳夫、宇山秀雄、杉山嘉美、矢野透の各氏に感謝します。

——昭和五十五年三月

ショートショートの広場2
昭和五十五年四月二十四日　第一刷発行

編者——星新一

発行者——野間省一

発行所——株式会社講談社
東京都文京区音羽二―三―三　郵便番号一一二　電話東京(九四五)一一一一　振替東京八―一七三〇

印刷所——豊国印刷株式会社　製本所——株式会社上島製本所

定価——八五〇円

© kodansha 1980, Printed in Japan
落丁本・乱丁本はおとりかえします（文1）

0093-168548-2253 (0)

星新一の本●講談社版

ごたごた気流 690
もし未来を予知することができたら……それをいま見ることができたら……知的ユーモアに溢れた12篇

おかしな先祖 690
落語の笑いを、独特の現代的フィーリングのなかに見事によみがえらせた10篇のおかしなおかしな物語

なりそこない王子 790
おなじみの童話の主人公が奇想天外の活躍をみせる表題作のほか傑作11篇を収録

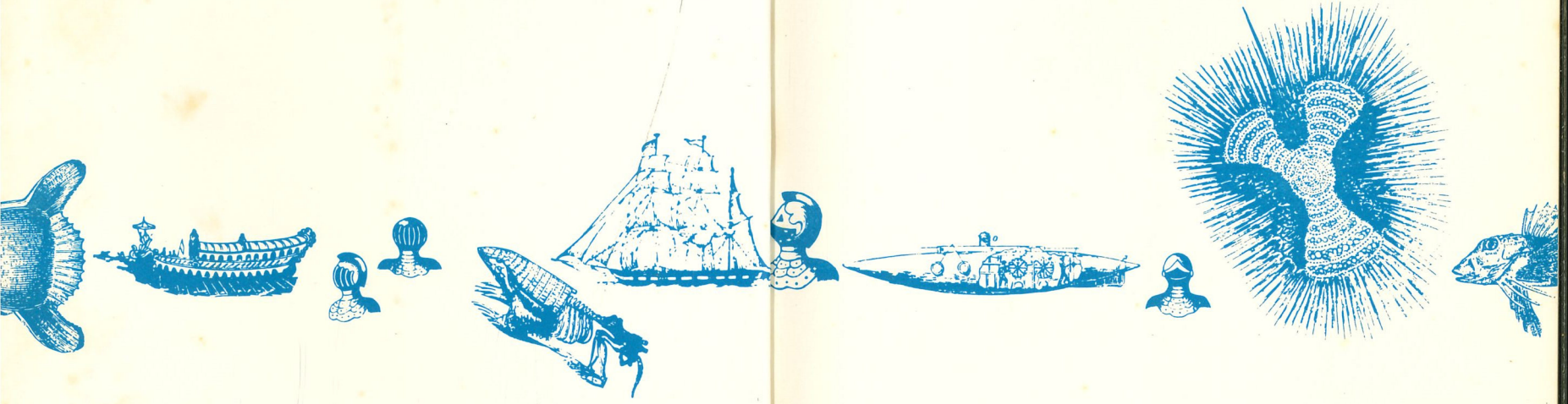
声の網 690
完備された電話網が、平和な家庭生活に安住している人々に突然、意外な事実を囁きかける。——秀抜な発想で現代文明の矛盾を衝く長篇SF

おみそれ社会 780
乞食が実は大金持で、警官が本当はギャング……やっこしい現代社会の歪みを軽妙に諷刺する快作12篇

エヌ氏の遊園地 440
ショートショートの名手が、卓抜なアイデアと洗練された語り口でつづる31篇の〝現代の寓話〟

ノックの音が 360
ノックの音をキッカケに展開する奇妙な15の物語。スリルとサスペンスとユーモアに溢れた大人のメルヘン

盗賊会社 420
盗賊会社、殺され屋、酒乱屋etc……36種の〝悪人〟たちの大活躍が、息苦しいビジネス社会を諷刺する傑作ショートショート集

きまぐれ体験紀行 680
ソ連・東南アジア・香港・韓国、そして断食……。好奇心に満ちた体験報告

定価は変更することがあります。